
《天竜》の伝説

P A P A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《天竜》の伝説

【Nコード】

N4788W

【作者名】

PAPA

【あらすじ】

神のうっかりで死んだ主人公はテンプレ通りチートをもらえると浮かれていたが、チートな能力は一切もらえず、転生先は死亡フラグ満載のワンピース！

そして自分の生まれた種族はなんと最も極悪な天竜人だった！

不定期で駄文ですか読んでいただけると嬉しいです。

プロローグ（前書き）

さて、思いつきで書いたがどうしようか…

ブローグ

「よお、目が覚めたかの」

目の前に白髪の爺がいた

「うわぁ！」

ボカツ！

「ぶふう！」

思わず殴ってしまった。

「いきなり何をするんじゃ！」

「いや、いきなり目の前に見知らぬ爺が現れたらなぐるでしょ」

「爺とは失礼な。わしは神じゃ！」

神？

「嘘つき爺」

「だからわしは嘘つきでも爺でもない！神と言っておるじやろつが！」

えゝ

「証拠は？」

「証拠？そうじゃな。おぬし、名前は言えるかの？」

「名前？んなの当たり前じゃん。俺の名前は——」

あれ？

えーと、何だっけ？

思い出せない…

「ほっほっほ。思い出せないか。そら、そうじゃの。おぬしは死んだのだから」

死んだ…？

「どうじゃ。これで信じたかの？」

「む…分かったよ。信じるよ。それより俺はどうして死んだんだ？」

「わしのせい」

は？

「いやーのう。天界には生者帳というものがあつての。それぞれの生物のことが書いてあるのじゃ。その内のおぬしの事が書いてあるページを誤って鼻水を拭くチリ紙として使ってしまったのじゃ」

「……………」

「それでおぬしのページが狂ったの。そのせいでおぬしは死んでしまったのじゃ」

「つまり俺の死はあんたの不注意だと…」

「すまんのう」

「ふざけんな!!」

神の胸ぐらを掴み、振る。

「待て待て！話を最後まで聞くのじゃ」

チツと舌打ちしながら神を離す。

「ふう。だからお詫びとしておぬしを別の世界へ転生させてやろうではないか」

テンプレキターーー!!

「転生先はもう決めておる。ワンピースの世界じゃ」

おお！やった!!

これなら確実にチート能力がもらえる！
じゃないとあんな死亡フラグ満載な世界生きていける訳がない。
さあて、どんな能力で無双しようかなー

「先に言うておくが、チートな能力はやらんぞ」

は？

なんだって？

じゃあなんだ。つまりあんな死亡フラグ満載の世界をただの人間の
まま生きろっていうのか？

絶望した。

「俺に死ねと？」

「じゃが心配は無用じゃ。

あちらの世界で闘いなんかせず安全に暮らせるよう取り計らうから
の」

はあ？

ワンピースの世界に闘わず安全に暮らせる場所なんてあるのか？

「ではゆくぞ」

「え」

おい、ちょっと待っ――

俺の立っているところに穴が開く。

「良き人生をのー」

落ちる俺。

うにゃああああ！！！

—— うん？

俺、どうなったんだっけ？

確か神に穴に落とされて、それから——

とにかく目を開けてみよう。

「おお、目を開けたぞ！サマルドリア！」

目の前には三十代ぐらいの男の顔。

「本当ですか！ゾディアック！」

パタパタと音が近づいてきたかと思うと、二十代ぐらいの女の顔が目の前に現れた。

「うーむ、可愛いのう。テラマキアは」

「ほら、ゾディアック。目元なんかあなたそっくりよ」

「ほう！そうかのう」

微笑ましい会話が続けられる。

俺の名前はテラマキアと言っらしい。

それと今、俺は赤ん坊らしい。

後、会話から察するにこの二人の男女が俺の両親なんだろう。

ここまでがいい。

問題は彼らの容姿だ。

（マジかよ…）

その容姿は原作ではまごうことなき悪として描かれた

天竜人だった――

第一説：天竜人（前書き）

主人公テラマキアの天竜人に対する印象の話。

第一説：天竜人

「いやはや、時が流れるのは早いな…」

天竜人として産まれてからあつという間に4年の歳月が流れた。

そしてやっぱり天竜人は漫画と変わらず胸糞悪い奴ばかりだった。

2歳の時に屋敷から両親と初めて外に出たが、愕然とした。

普通に人や魚人に鎖をつけて、ペットみたいに連れて歩いているのだ。

それどころか殴る蹴るの暴行も加えて、最後には殺していた天竜人すらいた。

（漫画で見るより酷いじゃねえか…！）

あまりにも残酷過ぎて、吐いてしまったこともあった。

（いくら安全に暮らせるからと言ってもこれは耐えられないぞ！）

神の奴め…覚えてろよ！

そして今、俺は4歳だ。

一応原作知識は頂上戦争まである。しかし、

「今はいつたい、いつなんだ？」

今の年代がいつなのか全く分からなかった。

世間はどうなってるんだ？

原作、もうはじまってるのか？

俺はまだマリージョアから出たことはなかった。

理由は簡単。

ゾディアック父様が出ることの許可してくれなかったからだ。

どうやら俺を下々民、つまり人間に近づかせたくなかったかららしい。

天竜人の価値観って本当に腐ってるよな。

でも父様はまだマシだった。

まあマシといっても他の天竜人と比べてだけ。

父様も奴隷を持つてはいるが殺したりすることはなかった。

役に立たなくなると解雇するだけ。他の天竜人なら役に立たない〃殺すだからな。

ある意味殺人狂じゃね。天竜人。

だが、俺は母様を見て天竜人の価値観が変わったんだな。

驚くべきことに母様は一般の天竜人とは全くの逆だった。

奴隷は一切持たないし、

前に父様から奴隷をもらっていたが、わざと逃がしたりしていた。

他にも、他の天竜人が下々民と同じ空気を吸うのが嫌だからといってつけているシャボンや防護服を身につけている姿を一切見たこともなかった。

そのせいで他の天竜人から変わり者扱いされているのだ。

かの父様もどうやら母様に感化されてあんなふうにマシになっただけらしい。

前になぜそんなことしているのかそれとなく聞いてみたことがあった。

そしたら母様は話してくれた。

「そうね…罪滅ぼかしら。母さんはね、小さいころに人さらいに誘拐されて人間ヒューマンオークションに売られそうになったのよ」

「もうだめかと思った時、とっても強い人間が人さらいを蹴散らして助けてくれたの」

「私は彼に聞いたわ。どうして助けたの。私はあなたたちが憎んでいる天竜人よ」って。そしたら彼は「誰かを助けるのにそんなのは関係ない」と言ったの」

「私には衝撃的だったわ。今まで人間は憎悪しか向けられたことがなかったから。ましてや助けてくれるなんて思いもしなかったわ」

「私は彼を屋敷に招いてお礼するために、両親に紹介したわ」

「事情を知った両親はいきなり銃で彼の頭を撃ち抜いたの。」「下々民の分際で娘に触れるとは何事だつて」ね。助けてくれたことを棚にあげて」

「私はショックを受けたわ。助けてくれた彼が殺されたこともただ、それよりもその彼を殺したのが自分と同じ天竜人だつてことに吐き気すら催したわ」

「その時に初めて分かったの。目の前で大切な人が殺される人間の気持ちだ。そして誓ったの。そんな天竜人にはならないつてね」

そんなことが…

「あら、少し熱がはいりすぎてしまったわね。テラマキアは少し難しかったかしら」

大丈夫だ、母様。

ちゃんと理解してる。

「そう。でもねテラマキア、これだけは覚えておいて。たとえどんな人から助けてもらったとしてもその恩を忘れないで。そして必ずその恩をかえしなさい」

その言葉を重く受けとめる。

浅はかだったよ、俺は。

今までは天竜人が悪だと認識していた。

でも母様みたいな天竜人もいる。

全てが悪ではないんだ。

海賊みたいに。

俺はその日に天竜人に対する認識を改めた。

他にも天竜人についていくつか分かったことがあった。

まず漫画の天竜人は語尾に「ゝえ」や「ゝアマス」とついたりするが、実際にやっているのは一部の天竜人だけだったりする。

これは意外だったな。

漫画で見ていた時、全員が語尾に「ゝえ」とかつけると思ってたんだが。

まあ現に俺の父様と母様はつけてないからな。

それと全ての天竜人はどでかい屋敷を持っている。
いずれの屋敷も絢爛豪華だ。

金の無駄遣いだろ。

広すぎるから今でもたまに迷ってしまうことがある。

あ、そうそう。

原作でシャボンディ諸島に出てきた天竜人のロズワードは家のご近所さんだ。

とはいってもものまだまだ若い。当たり前前はまだ子供のチャルロスとシャルリアはいない。

二十代だろうか。

ん、待てよ。

原作に出たとき、正確な年齢は分からないけど見た目からして恐らく四十代だったはずだ。

つまり今は原作より最低でも20年以上は前ということになる。

やっただぜ！

思わぬところから情報ゲットだ！

状況を整理するためにモノローグしたのが功を奏したな！

「何を喜んでおるのじゃ？テラマキア」

「あつ父様」

俺は現実引き戻される。

「いえ、他愛のないことですよ」

「ほう、そうかの」

あぶねー。

危うく変なこと口走りそうだったぜ。

「それはそうとの、テラマキア。お前に伝えたいことがあるのじゃ」

伝えたいこと？

「何ですか？」

「外に、出てみるかの？」

「本当ですか！」

「本当じゃ。お前もそろそろオークションに行くのも悪くないと思
つての」

げっ人間オークションかよ…

まあいいや。外に出れるなら何でもいい。

「行きます！」

「うむ、では支度をせよ」

よし！待ってるよ、シャボンディ諸島！

第一説：天竜人（後書き）

ネタがねえ。

第二説：シャボンディ諸島（前書き）

初めてのシャボンディ諸島。

第二説：シャボンディ諸島

やってきましたシャボンディ諸島！

いやー、圧巻だな。

シャボン玉にヤルキマン・マングローブ、スゲー！

「どうじゃ、初めての外は？」

「すごいです！父様！」

「はっはっは！それはよかった」

シャボンディ諸島には俺と父様、巨人族の奴隷と何人かの守護兵を連れて来ている。

母様は防護服を着ないので父様がついてくることを禁止した。故に今ここにはいない。

そもそも母様は人間オークションに行くのは嫌がっていたしね。

まあ、それはいいんだが、マリージョアをでる時に着せられたこの防護服は窮屈だな。蒸し暑いし。よくこんな服着るな、天竜人は。

それともう一つ。

「それはそうと、テラマキア。巨人の乗り心地はどうじゃ？」

「は、はい。いいです」

そう、俺は奴隷の巨人に乗っているのだ。
一応罪悪感はあるのだが、恐ろしいことにそれをあまり感じなくなっている。

やっぱり4年も天竜人をやっていると少しは影響されてしまうのだろうか。

俺もあんな天竜人みたいに…

いやいや、そんなことはない！

頭を振ってそんな考えを払う。

「どうかしたかの？ テラマキア」

「いえ、なんでもありません」

今は初めてシャボンディ諸島に来れたんだし、変なことを考えるのはやめよう。

それにしても、本当に天竜人って恐れられているんだな。

さつきから道行く人全てが膝について俯いている。

背德的だが何かこう、優越感を感じてしまうな。

はっ！ やばい。今また天竜人的な思考になってた。
油断ならないな、本当に。

「ん、あれはロズワードかの」

父様の視線の先には何か争っているロズワードと人間の女性と子供がいた。

「貴様、下々民の分際で！！何様え！」

「お許しください…！」

「ビエエエン！ママあ！」

「うるさいえ！死ね！」

ジャキンツと子供に銃を向けるロズワード。

おいおい、ちょっと待て！

「待ってください！ロズワードさん！」

慌てて、巨人族の奴隷から飛び降り、ロズワードと子供の間に割って入る。

「むっ！テラマキア、貴様下々民の味方をするつもりかえ！」

「あ、いやその…」

やべえ…

反射的に飛び出してしまったから何も言い訳考えてねえ。

「テラマキアは誰かが死ぬところを見るのは嫌っておるからの。のう、テラマキア」

「あつ、はい父様」

ナイス助け船！父様。

「これはゾディアック！そうであつたかえ。確かに下々民の血を見せるのは教育に悪いしな」

ロズワードは銃を下げてくれた。

子供の前で奴隷使つてゐる奴が教育に悪いとかよく言つよ。

「それでどうしたかの？ロズワード」

父様がロズワードに声をかける。

「そつだ。聞いてくれえ。この人間の子供が私の通り道にボールを転がしたのえ！」

えー……。

本当にむちゃくちゃだな。
どれだけ心狭いんだよ。

「ロズワードさん。下々民に構う価値すらないんだから、捨て置き
ましようよ」

俺はロズワードの気をなんとかそらそうとする。。

「むづ、しかしこの人間は私の通り道に……」

「もういいじゃろ、ロズワード。テラマキアの言うことはもっともじゃ。それにもうすぐオークションも始まってしまっしの」

「…ゾディアックがいうなら仕方ないえ。ふんっ、人間。私につまらないことに時間を使わせるなえ！」

女性を一回蹴りあげてからロズワードは自分の奴隷に乗った。

「ほらっゾディアック。早く行くえ」

「分かっておる。ほら、テラマキアも」

「はい、父様」

俺も急いで巨人族の奴隷に飛び乗った。

ふう、よかった。

せっかくの初めての外なのに血を見るなんてごめんだしな。

人間オークション前――

とうとうきたか。

人間オークション。

出来れば遊園地とかの方がよかったけど、ここに興味が無いかと言われれば嘘になる。

「これはこれは、ゾディアック聖にロズワード聖、そしてテラマキア聖。ようこそお越しくございました」

係員の一人が挨拶をしてくる。

てか、テラマキア聖って。

何回か言われたことはあるが、こそばゆいもんだな。

「会場内では膝つきなどの作法は無礼講願います」

「うむ、分かっておる」

じゃないと、競りにならないもんな。

「ありがとうございます。それではVIP席の方へご案内いたします」

「早くするえ」

「はっ」

俺たちは奴隷から降り、席へと案内された。

「今回は何か入っておるかの？」

「はい、それはもうすごいのがはいつてますよ
すごいのか？」

「人魚か？」

「それはお楽しみです」

勿体ぶるなよな。

何だろう？

全然分からん。

「それでは皆さま長らくお待たせ致しました！！」

舞台の中央に司会が現れる。

「まもなく——」

「^{グループ}毎月恒例一番GR」

「^{ヒューマン}人間オークションを開催致したいと思います！！」

オークションが始まった——

うーん、思ったより退屈だな。

出てくる奴隷もイマイチパツとしないし。

原作みたいに冥王レイリーに会えるかなと思ったけど、よく考えたら今は最低でも原作の20年以上は前なんだからレイリーがいる可能性は限りなく低いんだ。
早く終わらないかな。

「さあ、皆さま。

次が最後にして今回の目玉です！」

ん、いよいよ最後か。

どうせ目玉も大したことないんだろ。

「海軍本部中将、？錬金？のガイアです！！！」

ほらやつぱり大したことない海軍本部中将…

つてええええー！！！！？

海軍本部中将！？

ザワザワザワ——！！

会場がどよめく。

「そう、あの名高い？錬金？です！彼は悪魔の実？自然系？ツチツチの実の能力者で、その実力も折り紙付き！残念ながら安全のために海楼石の手錠をつけておりますので能力をお見せすることはできません」

いやいや、海軍本部中将ってあんた。

名前は原作では聞いたことないけど、中將だから覇気も使える上に、ロギアの能力者なんだからメチャクチャ強いはずだろ！？

でも人間オークションに出されるってことは誰かに負けたってことだよな…

いったい誰に負けたんだ？

「さあ、まずは特別価「4億で買っえー！！」」

ロズワード聖が叫んだ。

マジか…

会場があまりの言い値にシーンとする。

これで決まりか…

俺がそう思ったとき、

「10億じゃ！！10億ベリで買っえー！！」

父様が叫んだ。

おいおいマジですか？
父様。

「何するえ！ゾディアック！」

「悪いのう、ロズワード。わしは今回の目玉商品をテラマキアにプレゼントすると決めておったのじゃ」

え！

あれを俺の奴隷にするつもりですか父様！

「ほ、他に誰かいませんか！！」

誰からも声は上がることはない。

「それでは、海軍本部中将ガイアはゾディアック聖が落札ー！！」

「ほれ、テラマキア。初めて外に出た祝いじゃ」

「う、うれしいです」

うーん、まあ使い道は考えたし、海軍本部中将だ。聞きたいこともある。

初めての外出でとんでもないもん、得ちまつたな俺。

第二説：シャボンディ諸島（後書き）

若いロズワード聖ってチャルロス聖みたいな感じだと思う。

第三説：？元？海軍本部中将（前書き）

スミマセン。

文化祭とかで忙しかったので更新遅れました。

第三説：？元？海軍本部中将

人間オークションで海軍本部中将の？鍊金？のガイアを買って家に帰ってきた後、父様が母様に「なに、テラマキアに奴隷与えてるの！」としばかれていた。

その後、母様にその人を逃がしてあげなさいと言われて手錠と首輪の鍵を渡され母様は父様を引っ張って部屋から出ていった。故に今は2人きりにである。

ていうか母様、父様に馬乗りになってビンタしてたぞ。怖ええ。

で、母様には逃がせと言われたけど俺はこいつに聞きたい事とかしてほしい事があるからそう簡単には逃がすことはできない。しかし、

「何かしゃべれ」

「……」

「……しゃべってくれ」

「……」

「お願い、しゃべって」

「……」

なーんにもしゃべってくれない。

これ以上ない気まずい雰囲気。

父様母様、心が折れそうです。

はあ。

仕方がない。

俺は母様から与えられた鍵でガイアの海楼石の手錠を外した。

「――」

「さあ、手錠は外したから話してくれ」

「…君はどうしてこんなことをする？」

おっ！

やっと口聞いてくれた。

「どうしてって、話してくれないからだよ」

「私はロギアだぞ？首輪を外して今すぐ逃げるかもしれないんだぞ？」

あっ。

そうか。ロギアには爆弾首輪は通用しないんだ。

「でもあんたは逃げずにここにいないじゃないか」

「…不思議な天竜人だな、君は」

「…そうか？」

確かに他の天竜人に比べたらずいぶん違うだろうが。

「とにかく話を聞いてくれるか？」

「…分かった。聞こう。君は他の天竜人とは違うようだからね」

よかった。

聞いてくれるみたいだ。

「よし、あなたには聞きたい事としてもらいたい事、二つある。まずは聞きたい事だ」

「なんだい？」

「ゴール・D・ロジャーはどうなった？」

やっぱり年代を確かめるならこの事だろう。

これで22年以上前か後かが分かる。

大海賊時代かそうでないかが。

「？ どうなったって、別にどうもしないが」

「本当に？」

「本当だ」

よし、これで原作より22年以上前だつてことが確定した。
大海賊時代はまだ始まっていない。

「何でそんなことを聞くんだ？」

「いや、別にたいしたことじゃない」

さて、次こそが本題だ。
受け入れてくれるかどうか…

「じゃあ次だ。あんたにしてもらいたいこと。それは…」

俺は一旦息を吸い込む。

そして言った。

「俺を、鍛えてくれ!!」

「……は？」

ガイアは啞然としている。

「今、なんて？」

「いや、だから俺を鍛えてくれ！」

確かに唐突だけど。

「…ダメか？」

「ダメというわけではないが…何故なんだ？君は天竜人だろ。なら強くなる必要なんてないはずだ」

「それは…」

やっぱりある程度は強い方がこの世界では動きやすいし、損はないと思う。

俺は膝をついた。

「頼む、お願いだ!!」

そして、土下座した。

「お、おい! 顔上げるんだ!」

「鍛えてくれたら必ず逃がすから!」

「わ、分かった。分かったから! 鍛えてやるから土下座はやめてくれ!」

「本当か!?!」

思わず顔を上げる。

「あ、ああ、本当だ。君は天竜人なのにどうして奴隷なんかに頭を下げたり!」

「え、人にものを頼むのに頭を下げるのは当たり前だろ。ましてや鍛えてもらうんだから土下座ぐらいしない」と

「…君は本当に不思議だな」

天竜人としてはおかしいだろうな。
だが生憎俺は転生者だからな。

その辺の礼儀はちゃんとするんだ。

「とにかく鍛えてくれるだな？」

「ああ、鍛えてあげるよ。テラマキア聖」

「そんな堅苦しい呼び方はやめてくれ。テラでいい」

「えっ、でも私は君の奴隷で…」

「これからあんた、えっとガイアさん、は俺の師匠なんだから」

「……仰せのままに、テラ」

「よし！」

やったぜ！

何せ海軍本部中将だからな。
絶対強くなれるはずだ。

「ん、そう言えばまだ聞きたいことがあったんだ」

「なんだい？」

「ガイアさん。なんで人間オークションなんかにいたんだ？」

「……！」

俺がそう聞くと、ガイアは黙ってしまった。

「話したくないんだったらいいんだ、別に…」

「……負けたんだ。私は」

俺が話を切り上げようとした時、ガイアは話しだしてくれた。

「負けたっていったい誰に？」

何しろ海軍本部中将だ。

一筋縄では倒せない相手なんだから倒した奴もそれなりに名のある奴なんだろう。

「わからない…」

分らない？

「どういうことだ？」

「…私は無名の海賊に負けたんだ」

おいおい、嘘だろ…！

「奴には私の攻撃がまったく通用しなかったんだ」

何かの能力者だったんだろうか？

「そして私は突然ものすごい衝撃を受け、気を失ったんだ…」

一撃でやられたのか…

海軍本部中将を一撃ってどんだけ強いんだよ！

「そして気づいたらいつの間にか人間オークションにいたというわけさ」

「そうか…」

「テラマキア、彼は逃がしてあげましたか？」

ガチャツと扉が開いて母様が部屋に入ってきた。

「か、母様！？」

「あら、まだ逃がしていないの。早く逃がしてあげなさい」

「あ、あの？」

ガイアは戸惑っている。

まあ、当たり前か。目の前で天竜人が自分に逃げてと言ってるんだからな。

それよりも母様には鍛えてもらうことは話しておこうかな。

先にはらしておいたほうが動きやすいし、母様ならきつと分かってくれるはずだ。

「ねえ、母様」

「ん、何ですか。テラマキア」

「私は強くなりたいんです」

「？」

「だから彼に鍛えてもらうことにしました」

「！！ 何言ってるの！ テラマキア！ やめなさい！ そんなの危ないじゃないの！」

「母様！ どうか分かってください！」

「ダメです！」

「お願いします！ 母様！」

俺は頭を下げる。

「……………」

沈黙。

「…それがあなたの意志なのね、 テラマキア」

「…はい」

「そう。 ならあなたの自由にしなさい」

「母様！ ありがとうございます！！」

「子が本気で何かをしたいというんだもの。 それを止める親がどこにいるのよ。」

母様はガイアの方に向き直る。

「ガイアさん、でしたわね。テラマキアをよろしくお願いします」

「は、はい…」

気の抜けた返事をするガイア。

「テラマキア。ゾディアックには私から言っておくから安心しなさい」

「何から何まで本当にありがとうございます、母様」

「じゃあやるからにはうんと強くなつてね」

そう言つて母様は部屋から出ていった。

「君の家族もすごく不思議だな」

「そういう天竜人もいるってことさ」

こうして俺は家族公認で？元？海軍本部中將に修行をつけてもらえることになった。

「…何故元のところを強調する？」

「地の文読まないでくださいよ、ガイアさん…」

第三説：？元？海軍本部中将（後書き）

次は修行編に入ります。

第四説：修行（前書き）

駄文め…！

第四説：修行

シャボンディ諸島からちよつと離れた小島。

「ほら！遅いぞ！」

「くつ、ガイアが早いんだよ！」

俺とガイアは戦っていた。

勿論俺は防護服やシャボンはつけていない。

「嵐脚！！」

神速の蹴りで斬撃を放つ。

「甘い！」

が、避けられる。

そして裏拳を叩きこまれる。

「鉄塊！」

俺は鉄塊でガードする。

「指銃？黄連？！！」

指銃の連打でガイアを狙うが、ガイアはするすると避けて俺の腕を掴んだ。

「ふんっ！」

地面に叩きつけられる。

「いつてえ…！」

「まだまだだな」

ガイアは俺を見下ろしながら言った。

「くそっ！紙重と月歩以外は使いこなせるようになったのに」

鍛えてくれとガイアに頼んで二年の月日が経った。

驚いたことにガイアは六式の使い手でもあった。

すぐに教えてもらえると思ったけどその考えは甘かった。

最初は走り込みや腕立て1000回、腹筋1000回など体力作りばかりさせられた。

あれはキツかったなあ。

「なあ、早く教えてくれよ。六式を」

「だめだ」

「何でだよ！？」

「体力のない素人の一般人じゃ覚えることさえできないからな」

「そんなあ……」

「だからまずは体力作りだ。この島の外周をぐるつと5周、それから腕立て、腹筋を1000回ずつ3セットだ」

え？

今なんかあほみたいな数が聞こえたぞ？

「ごめん、ガイアさん。もう一回言つて？」

「島の外周を5周と腕立て、腹筋を1000回ずつを3セットだが」

……。

「……あんたは俺を死なせたいのか？」

「がんばれ、テラ（笑）」

「笑ってんじゃねーよ！！」

ちくしょー！いつか絶対泣かせてやる！

俺は涙目になりながらそう誓った。

ああ、今となつてはいい思い出だなあ。

そんな感じで今では気軽に呼び合う仲である。

「しかし四式しか使えないとはいえ、たった二年でここまで成長するとは驚きだな」

「そうか？」

「ああ、テラ。お前も十分超人の域にいるぞ」

「こちとら師匠が超人を越えた化け物だから全然実感できないけどな」

実際マジでガイアは化け物だと思う。

二年間ガイアに修行をつけてもらったけど、今まで一度たりとも能力を使わせることはできなかった。

ガイアが持つ悪魔の実の能力。
ツチツチの実。

以前一度だけ見せてもらったことがある。
それは本当に恐ろしいものだった。

だって地割れ起こせるんだぜ！！
その時その地割れで山ひとつ沈めちまったんだからな。
全然笑えねーよ。

「しまったな……。？大地の怒り？（ガイア・ヴァジュラ）なんか使わずもつと軽めの技使えばよかった」

本人はその時そんなことを呟いていたりした。
ロギアって本当に恐ろしいな。

「お前ももう6歳か。6歳でこの強さの奴はなかなかいいから誇
つていいぞ」

なかなかいいって、いるにはいるのかよ。

「修行場所を確保してくれたテラの親父さんには感謝しないとな」
そうそう。

この俺たちが修行に使っているこの小島は父様が見つけて連れてき
てくれた島なのだ。

今もこの島にくる時は父様がくれた小型船で来ている。
父様も俺が修行をするのを応援してくれた。

「がんばるのじゃぞ。テラマキア」

何故か顔が腫れ上がっていたが。

尻に敷かれてるなあ、父様。

そういえば何で父様と母様は結婚したんだろ？

言ってみれば母様は天竜人では異端者だ。

そんな母様を何で父様は選んだんだろう？

今度なれ初めても聞いてみようかな。

「なにボーツとしてるんだ。続きするぞ」

「ん、ああ」

俺は立ち上がり再び構える。

「さあいつでも来い」

「うおおっ!!」

修行は続く。

島から帰る途中の小型船の船内。

「いてて…」

俺は顔を腫らしていた。

顔だけじゃない。

身体中打ち身や擦り傷だらけである。

「あんたは手加減で言葉知らないのかよ。俺一応まだ6歳の子どもだぞ」

俺をそんなことにした張本人、ガイアに抗議の声を上げる。

「弟子だからな（笑）」

「…あんた絶対地獄に落ちるよ」

俺はにやついた顔で言うガイアにそう言い放ってやった。

ひどい奴だ。

だって攻撃に武装色の覇気を纏わせてくるだぜ。

痛いなのって。

それにこっちの攻撃は見聞色の覇気で全部見切られてカウンターをことごとく食らってしまう。

こっちは覇気なんてこれっぽっちも使えないのに。

これを大人げないと言わずなんと言っ。

ガイア曰く、覇気を体感していたほうが覇気を会得しやすいらしいが正直言つと全然わからない。

というかガイアがただ単に俺を虐めたいだけな気がする。

「なあ、ガイア」

「何だ、テラ」

「俺には才能がないのかな？」

「何言ってるんだ。お前は6歳でこの強さだぞ。もう既に並みの海兵じゃ辿り着けない領域まできてるぞ」

「でも俺は六式すら満足に扱えないし、まだ全然覇気も使えないだぞ」

「……………」

ガイアは少し黙って、それから俺の顔に手を持ってきてそして、

「バカかお前は」

「いてっ」

デコピンをかました。

「あのな、テラ。お前は焦りすぎだ。」

「え？」

「いくら才能があるといつてもお前はまだ6歳だ。まだまだこれから成長期だ」

「……………」

「だから焦らずゆっくりと強くなればいい。時間はたっぷりあるんだ」

「ああ……」

そうか。

俺は無意識に焦っていたんだな。

俺が無意識に焦っていた理由。

やっぱりそれは恐らくあの事件が起こると知っているからだろっ。

聖地マリージョア襲撃事件。

後にタイヨウの海賊団を結成するフィッツシャー・タイガーによって引き起こされる事件。

あの事件で少なからず天竜人も死んでいる。

もしかしたら原作では父様と母様も死んでしまったのかもしれない。でもそんなことはさせない。

俺が強くなって父様と母様を守るんだ。

いくら天竜人だといっても俺にとっては大事な父様と母様だからな。

俺は改めて強くなる決心をした。

「まあ、テラはいつまでたっても私を越えることはできないがな」

……… ついでにガイアをいつか泣かすことも改めて誓った。

第四説：修行（後書き）

悪魔の実は食べたほうがいいかな…

第一外伝説：思い出と願い（前書き）

ゾディアックとサマルドリアのなれそめの話。
基本ゾディアック視点で進みます。
いつもよりかなり長いです。

第一外伝説：思い出と願い

「父様、母様行つてきまーす」

「これ、テラマキア！島に行くまでぐらい防護服を着けていかなんか！」

「ふふっ、ガイアさん。今日もテラマキアをよろしくね」

「分かりました。ほら、行くぞテラ」

「分かつてるって！ちえっ、分かりましたよ父様。着ますよ防護服！」

「うむ、分かればいいんじゃない！」

ぶつぶつ言いながらテラマキアは防護服を着て、行ってしまった。

「ああ、しかし奴隷にあんな気軽に口をきいて…。」

わしは頭を抱える。

「他の天竜人にバレたりしたらただじゃすまんぞ…」

「あら、その時はあなたが守ってあげればいいじゃない。あの時、私を守ってくれたみたいに」

「あの時か…。簡単に言わんでおくれ。あの時もギリギリだったのじゃから」

「ふふっ、懐かしいわね」

妻が顔を緩ませる。

「ああ、そうじゃの」

わしは懐かしき大切な思い出へと意識を飛ばす。

そのころの私は飽きていた。

この世の全てに。

私は早くに両親を亡くし家督を継いでいたために同世代の天竜人には羨ましがれていた。

周りの天竜人はやれ下々民は汚いだの自分達は至高の種族だの同じことしか言わない奴ばかりだった。

でもそれらは皆例外無く私の持っている権力や屈強な奴隷をみて羨む視線を向けてきた。

世界に力でなびかないものはないと信じていた。

そんな時である。

彼女と出会ったのは。

ある日私は奴隷である巨人族を連れて歩いていたとき、道端でちよつとした人だかりができていた。

「この異端者め！」

「下々民に侵された下賤！」

「天竜人の風上にもおけぬえ！！」

いったい何なんだ？

そう思い人だかりに近づいてみる。

その中心には見るも無惨な姿の天竜人の女性だった。

「……………」

その女性は周りの天竜人に暴力を振られて傷だらけである。
しかし、

「ほう……」

顔は美しい女性だった。

「おい、何してる」

「！！ これはゾディアック殿。」

天竜人の一人が媚びへつらうように頭を下げる。

「今、この異端者を肅清していたところなのです」

「異端者？」

「はい。この者は防護服を着ないどころかあまつさえ下々民に施し

を行ったりしたのです」

「天竜人の面汚しだえ！」

「ふむ…」

私は女性のほうに向き直る。

「おい、お前助けてやろうか」

「……！」

「な、何を言うのです！ゾディアック殿！」

「少し黙っている」

「なっ！」

この天竜人の女性は素材がいい。

恩を売ってそれで脅せば、言うことを聞くだろう。

最近飽き飽きしていたからな。

これで遊んで暇を潰すか。

「さあ、どうなんだ？」

結果は分かっている。

今まで力でなびかないものはなかったのだから。

権力に屈さない奴はいないのだ。

心の中でそんな世の中を嘲笑った。

「……お断りしますわ」

——なに？

「何…だと？」

「私はあなたみたいな心が腐っている人には死んでも助けられたくありません」

信じられなかった。

今起こっている現実が。

ありえないと思った。

今日の前で喋っている女性が何か別の生き物に見えた。

今まで権力をちらつかせればどんなものも従い、手にいれることができた。

ましてや逆らう奴などこれまで一人だっていなかった。

しかしこの女性は逆らったのだ！

逆らえばこの後にどんな酷いことが待ち受けているか容易に想像できるはず。

にも関わらず彼女は私に逆らった。

臆面もなく。

屈することなく。

私に従わないとはつきり言っただけだ！

「貴様！ゾディアック殿に向かってなんて口を！」

天竜人の一人が女性を蹴りあげる。

「殺すな」

「え？」

「殺さない程度に痛めつける」

「は、はい！」

「そして明日またこの場所に連れてこい」

「分かりました！」

私はその場を去りながら考えた。

何なんだ、あいつは？

全然考えていることが分からない。

まさか飽きてしまったこの世界にそんな奴がいるとはな……
私はいつの間にか彼女に興味を持っていた。

翌日。

再び昨日のあの場所に向かう。

やはりそこには昨日と同じように天竜人の女性と女性に暴力を振るう天竜人がいた。

女性の姿は昨日よりも酷くなっている。

「おい」

「！ これはゾディアック殿。約束通りこの異端者を連れてきましたぞ」

「うむ、それで」

女性を見る。

「今一度聞く。助けてやろうか？」

「また…！？」

天竜人たちがざわつく。

「いいりません」

女性はキツパリと断った。

これだけ痛めつけられてまだ屈しないのか。
普通の天竜人では考えられない。

何を彼女がそこまでさせているんだ？

私はそれが気になってある決心をした。

「お前、私の屋敷に來い」

「なっ！」

「……！！」

皆酷く驚いている。

「何故です！何故こんな者をゾディアック殿の屋敷に！」

「勘違いするな。私はこの手で私の慈悲を二回も払い除けたこの異端者をいたぶるために屋敷に来させるだけだ。おい」

「ッ！きゃあ！！」

私は顎で巨人族の奴隷に指図し、女性を捕まえさせた。

「くっ、離して！」

「そのまま屋敷に連れていくぞ」

巨人族の奴隷にそう命令し私は屋敷へと向かった。

私の屋敷。

女性には手錠を後ろ手につけさせ椅子に座らせていた。

「さて、お前に聞きたいことがある」

「…いたぶるんじゃないかったですか？」

「あれは嘘だ。本当はお前に聞きたいことがあった」

「聞きたいこと？」

「何故お前は下々民などに施しをした。異端者と呼ばれるのは目に
見えていただろう」「……………」

「答えないのか」

「…何故」

「！」

「あなたこそ何故そんなことを聞くの？私はあなたの提案を二回も
拒否したのよ？」

「……………」

「あなたにとってそれは屈辱だったはず。なのに何故？」

「そうだな…。確かに屈辱的だった」

私はそこで息を整えた。

「だがそれ以上に嬉しかったのだよ。私の退屈な予想を裏切ってく
れたからな」

女性は黙って聞いている。

「私は世界に飽きていた。今まで私の力になびかない者はなかったからな」

「だがお前が現れた。私の力を初めて拒絶したお前が」

「私が飽きた世界にまだお前みたいな奴がいるとは知らなかった」

「だから私は知りたいのだ。何故お前がそのようになったかを」

「……………」

「さあ、お前の質問には答えたぞ。次は私の質問に答えろ」

「…分かったわ。確かにあなたが答えて私が答えないのは卑怯だものね」

そして彼女は話してくれた。

幼い頃ひとさらいに誘拐されたこと。

その時人間に助けられたこと。

そしてその人間は自分の親に殺されたこと。

それでそんな天竜人にならないことを誓ったことを。

「だから私は醜い奴には屈することはしないの。あなたみたいな力を振り回す醜い人には」

「醜い？私が？」

「そうよ。あなたみたいに力でしか自分を示せない人を醜いと言わず何と言つのよ」

力でしか自分を示せない…

「…クククク」

「？」

「アハハハハハハハハ！！」

「え、ええ！？」

そうか。

そういうことか！

だから私は世界に飽きてしまったんだな。

私は力でしか世界を見ていなかったんだ。

それはそうだ。

世界を一つ概念でしか見ていなかったら飽きてしまう。

しかし世界は一つ概念で出来ている訳ではない。

彼女に心があるように。

他の概念からみればある概念なんかは容易く打ち破れたりもする。
彼女が心で俺の力に抗ったように。

「ハハハハハハハハハ！！」

たまらなく可笑しかった。

なんて私はバカだったんだろう。

世界がつまらないんじゃない。

私がつまらなかったんだ。

「ハハハ…ハア…ハア…」

ようやく笑い終えて息を荒くする。

「ちょっと、大丈夫？頭狂っちゃった？」

「いや、狂ってなどいない。むしろ今までが狂っていたな」

女性を見る。

「お前、名は？」

「…サマルドリアだけど」

「サマルドリア、感謝する。私に新たな世界を教えてくれて」

「は、はあ…」

私はサマルドリアにした手錠の鍵を開ける。

「おっと、私の名はゾディアックだ。暇だったらいつでも私の屋敷に来るがいい。歓迎するぞ。お前は気に入ったからな」

「えっ、でも…」

「遠慮なんかしないでいいぞ」

「そういうことじゃなくて…」

急に口ごもる。

「私、異端者だしもう屋敷からも追い出されちゃったから…」

「勘当されたのか」

「……………」

黙ってしまふサマルドリア。

まあ、当たり前か。

普通の天竜人なら自分の家からそんな異端者がでたら悪評が広がる前に縁を切ることを選ぶだろう。

ふむ、なら都合がいい。

「行くところがないなら家に住むか？」

「えっ！」

驚いた顔をする。

「いけません！異端者である私に関わったら、ましてや匿うみたいなことをするなんて。あなたも間違いなく異端者扱いされるわよ」

「バレなければどうってことはない。都合のいいことに私の両親は既に亡くなって家督は私が継いでいる。召し使いや奴隷には口止めすればいい」

「でも…」

「これもお前は拒絶するのか？」

「…私はあなたに醜いとか腐っていると酷いことを言ったのよ」

「実際そうだったからな。気にしてはいない」

彼女は顔を俯ける。

「…あなた、急に変わりすぎでしょ。醜いどころかカッコよくなってるじゃないの」

そして上げた顔の目には涙がたまっている。

「ありがとう…！」

そして溢れだした。

そしてその日から彼女との生活が始まった。

彼女は不思議だった。

誰とでも分け隔てなく接するのだ。

それが召し使いや奴隷であつても関係無く。

だから彼女はすぐに屋敷の人気者になつた。

代わりに何故か本来の屋敷の主人である私が蔑ろにされている。

前にサマルドリアが誤つて皿を割ってしまった時、奴隷や召し使いたちが私たちが割りましたと庇っていた。それを振り切つてサマルドリアを罰すると彼らからジトーツとした視線を送られた。

彼女はありえないくらいに屋敷の皆から慕われていた。

そしてその中で彼女はとても幸せそうだった。

これは天竜人から見たら決して許してはならない光景だろう。

だが私は彼女が羨ましく思えた。

私にはいくら権力を使つてもあの光景を手に入れることはできない。人の心は力では手に入れない。

私は改めて昔の力で何でも手に入れると思つていた自分を愚かだつたと思ひ知つた。

そしていつか自分もあんな風に彼女みたいに人から慕われてみたいと願つた。

そんな感じで私は彼女に惹かれていった。

私は異端者だった。

そんな私を受け入れてくれた天竜人がいた。

彼も元々は周りの腐つた彼らと同じだったけど、私の言葉から何か

を得たのか人が変わったように私に親切してくれた。

彼は私が異端者だということを躊躇わず受け入れてくれた。

あまりに嬉しくて家を追い出されてからは二度と泣かない誓ったのに思わず泣いてしまった。

そして今私は幸せだ。

今までのどんな時よりも。

彼、ゾディアックのおかげで。

突然、頭にとてつもない衝撃を受ける！！

な、なに…？

薄れゆく意識の中、見えるのは数人の男の姿だった。

私が道を歩いているといつかサマルドリアに暴力を振っていた天竜人の一人が声をかけてきた。

「いい知らせですよ。ゾディアック殿」

「いい知らせ？」

私は正直さつさとあしらって屋敷に帰り、サマルドリアに会いたいと思っていた。

しかし、天竜人から発せられた言葉に私のその思いは消し飛んだ。

「ゾディアック殿に失礼な口をきいたあの異端者が捕まり、明後日処刑されるそうですよ」

——なんだって？

「しかもその異端者をその両親が直々に処刑するらしいです」

頭が真っ白になる。

「何でも家から出た害悪は身内で処理するとか」

サマルドリアが死ぬ——

「いや、これだよやく——」

私は最後まで聞かず走り出した。

…認めない。

認めてなるものか！

彼女と過ごした日々が脳裏をよぎる。

失うわけにはいかない！

あの日々を。

私の世界を変えてくれた彼女を。

何より私は彼女が、彼女のことが——

私は走る。

彼女を救うために。

私は牢の中にいた。

殴られて少し前まで気絶していたが。

どうやら私は処刑されるらしい。

覚悟はしていた。

何しろ異端者なのだからありえないことはない。

悔いはない。

私はやりたいことをやったのだ。

それで死ねるのなら本望だ。

そう思っていたら急にあのゾディアックの屋敷での日々が心に浮かんできた。

召し使いたち。

奴隷の人たち。

…そしてゾディアック。

皆の顔が次々と浮かんでは消える。

嫌だ…

楽しかったあの日々。

怖い…！

もう二度と戻れないあの日々。

死にたくない…！！

死の恐怖がこみあげてくる。

助けて…誰か…

ゾディアック…！！

「サマルドリア！」

牢の扉が開く。

「迎えにきたぞ」

その姿は幼い頃に助けてくれた人間の彼にダブって見えた。

「どうして…」

牢にいた彼女が発した第一声。

「どうして…私を助けるの？私は異端者よ？」

私はその問いにこう答えた。

「お前を助けるのに、そんなのは関係無い」

「！！！！」

彼女は驚いた表情をし、それから顔をクシャツとして、

「うわああああー！！」

大きな声を上げて泣き出し、私に抱きついてきた。

私は突然のことで一瞬怯んだが、彼女を抱きしめてその背中を優しく撫でた。

一層強くなる泣き声を私は聞いていた。

屋敷に戻ったら召し使いたちがサマルドリアを心配して近寄ってきた。

彼女は召し使いたちを落ち着かせていたが途中であることに気づいた。

「ねえ、奴隷の皆は？」

それを聞いた召し使いたちは顔を俯けた。

「…？」

「奴隷たちは…」

「お前と引き換えに連れていかれた」

「何よそれ……」

サマルドリアは私に食って掛かる。

「そんなの聞いてないわよ!!」

「お前を救うにはそれしかなかったんだ……」

「何で私一人を救うために皆が犠牲に……!」

「彼らも望んだことだ」

「でも!」

「……私たちはお前を助けた。それはお前にとって間違ったことなのか?」

「……………」

彼女は少しの間、黙る。

「……そんなこと」

「そんなこと言えるわけじゃないじゃない……!」

彼女は肩を震わせて言った。

私はそんな彼女を優しく抱きしめた。

「彼らはお前が幸せになることを願っていた」

「だから言っよ。私の気持ちを」

「え…？」

「サマルドリア」

「私はお前が好きだ」

「！！」

「だから私と一生いてほしい」

ありったけの思いを込めて言った。

「…あなたばかりでしょ。全然そんな雰囲気じゃないのに」

顔を上げて私を見つめる。

「私は異端者だよ。それでもいいの？」

「よくなかったら助けてないさ」

「ふふっ、そうね」

彼女は軽く微笑む。

「私も好きよ」

「そうか」

彼女を強く抱きしめる。

「よかった…」

召し使いたちの拍手が聞こえる。

こうして私たちは結ばれた――

「本当に懐かしいのう」

「あれからもう21年も経つのよね」

「そうじゃのう」

本当に長かった。

彼女に対する排斥を無くすために今まで色々な根回しをした。汚いこともした。

そのかいがあつてか今は昔に比べるとずいぶんマシになっている。

「あなたには苦勞をかけっぱなしね。テラマキアのこと…」

そう、6年前にはテラマキアのこともあった。
サマルドリアと私の子。

異端者の子どもと知れたらあの子にどんな危害が及ぶか分からない。

だから私はあの子のためにサマルドリアにためにしたことよりもたくさん汚いことをした。

越えてはならない一線も越えてしまった。

世間にもバレないようにわざと極悪な天竜人の振りもしている。そのために口癖も変えたりした。

そして今はまだバレないで済んでいる。

「だけどそのせいであなたがあの子に疎ましく思われるなんて…」

まだテラマキアにはそのことを言っていない。

だからあの子から見たらわしは悪い奴に見えているだろう。

「いいんじゃないよ」

彼女の肩に手を置く。

「全てはあの子を守るためじゃ」

「親は子のためならどこまでも汚くなれるもんじゃ」

「その代わりお前はいつまでも綺麗であってくれ。あの子のために」

わしは笑う。

「汚れきった悪役は一人で十分じゃからの」

もしかしたらいつかはバレてしまつかもしれない。
それでもやっぱりその時は――

「何とかして助けちゃうんでしょ？」

わしの心を見透かしたようにサマルドリアが言う。

「あなたは昔からそういう人だから」

そうだな。

確かに助けるだろう。

何としてでも。

でもやはりできればそんなことにはなってほしくない。

願わくはあの子がこの先幸せでいられますように――

わしはそう思った。

第一外伝説：思い出と願い（後書き）

無駄にゾディアックがかっこよくなった。

第五説：初めての戦闘（という独壇場）（前書き）

修行の成果。

第五説：初めての戦闘（という独壇場）

いつものように小島で鍛練をして帰りの船の中。

「うつうつ…」

いつにもましてボコボコな俺。

「まだまだ弱いな（笑）」

それを見て笑うガイア。

いつもと変わらない平和？な日常。

「なあ、ガイア。せめて覇気は無しにしてくれ。攻撃読まれちゃ勝てないぞ」

「ダメだ。これもお前のためだからな。お前も早く覇気を覚えたいだろう？」

「確かにそうだけど…」

「なら我慢しろ。それに実際見聞色の覇気なんて上位者同士の戦いになるとあまり役に立たない。考えを読んでいる暇なんてないからな」

「…本当の理由は？」

「私がお前をボコボコにしてスッキリしたいか……、ゲフン、ゲフ

ン！何でもない」

「おいこら、ちょっと待てガイア。てめー今本音漏れただろ」

ボコボコにしてスッキリしたいからって聞こえたぞ。

「空耳だ」

「シラをきるな」

「……………」

黙りこくるガイア。

「……………？錬金？ダイヤモンド」

「あっ！」

「？大地の揺りかご？（ガイア・エッグ）ダイヤモンド^{バージョン}ver」

ガイアがダイヤモンド製の丸い壁に包まれた。

「ちよっ、こら！ガイア！能力使って逃げるなー！」

「……………」

とっても平和な日常だった。

まあ、そんなこんなで船はシャボンディ諸島に着いた。

「ほら、早く防護服着ろ。テラ」

今の今までダイヤモンド製の丸い壁に隠れていたガイアが能力を解除して船から降りる。

「ガイアお前、後で覚えとけよ……」

「覚えておいてもいいが、お前は私に勝てないだろう？」

「うぐっ……」

こんちくしょー！

言い返せないのがまた悔しい。

「諦めろ、テラ（笑）」

……泣かす。

いつか絶対泣かす。

俺は防護服を着ながらいつものようにそう思った。

「ふむ、にしてもいつにもまして傷が多いな」

確かにさっきからジンジン痛みますが。

「特に顔の傷は不味いな。何があつたか勘ぐられるかもしれない」

そうだ。

体の傷は防護服で隠せても顔は隠せない。

他の天竜人に何があつたか聞かれて奴隷に修行をつけられている、
なんてことがバレたらただじゃ済まない。

「…仕方ない。近くで顔を隠すマスク買ってくるからここで待つて
る」

「え…」

そう言つてガイアは街の方に行こうとする。

「ちょっと待てよ。マスクなんかしてたら余計に怪しまれないか？」

「下々民と同じ空気をできるだけ吸いたくないからだ、とでも誤魔
化せばいいだろう」

「あつ、そうか！」

納得する俺。

しかしちよつぴり罪悪感があるなあ…

「とにかく買ってくるから必ずここで待つていろよ」

そう言い残すとガイアは行つてしまった。

「……………」

待つしかないか。

俺は待っている間だけでも防護服を脱ぐことにした。

本当に辛いんだよ着てるのが。

蒸し暑いから汗をかいてそれが傷にしみてかなわないだよ。
本当にこんな服よく着るな。

天竜人のここだけは素直に尊敬する。

「ふう……」

防護服を脱ぎ終わった俺は一息つく。

その時、誰かの気配を感じた。

それも多数。

嫌な予感がする。

そしてその気配の主たちが現れる。

「グヘヘヘ……」

人相の悪い男たちだ。

全員それぞれ武器を持っている。

「まさかこんなところで天竜人のガキに出会えるとはよお……」

「……………」

いったい何が目的なんだ、

こいつらは？

「ついてるなあ、おい。何で傷だらけなのかは知らねえが、しかるべきところに売ればたんまり金が貰えるぜ」

「!」

人さらい屋か！

「へっへっへ…。悪く思っなよ、坊主。これも商売だから」

ふざけるなよ。

誰が易々と捕まるか。

とはいうもののまずいな…。

いかんせん数が多い。

それにこっちは手負いの状態。

圧倒的に不利だ。

「行くぜ！俺達？ブラックオーガ？の獲物だ！絶対逃がすなよ！」

チームのリーダーっぽい奴がそう言って手下に俺の周りを囲ませる。

くそっ！

どうする！

いやはやマジでついてるぜ。

天竜人のガキが独りでこんな人気のないところを彷徨いてるとはな。天竜人に対してはほとんどの奴はよくは思っていないから奴隸として売れば、確実に売れる。

政府や海軍、天竜人にはバレないようにしないな。

「さあ、野郎共。ガキを捕らえろ！」

手下の一人が俺の言葉に反応してガキに向かって行った。

が、鈍い音がしてそいつは吹き飛んでいった。

「は？」

何が起こったんだ？

うわー、ビックリした。

自分の強さではない。

相手の弱さにだ。

だって余りにも動きがトロイ。

トロすぎる。

それに軽く殴り飛ばしただけでヒューンっと飛んでいった。
これがガイアだったら逆に俺が飛ばされてるところだな。

「くっ、このガキ！」

手下の一人が手にした武器で斬りかかってくる。

俺は腰を低くしてそれをかわし、その腹を殴り飛ばした。
それだけで相手は空中を飛んでいく。

負けるかと思っただけ杞憂だったようだ。
六式を使うまでもない。

「こ、この野郎ー！！」

「ふざけやがって！！」

「舐めんじゃねえよ！！」

手下が一斉に襲いかかってくる。

「はあ……」

早く帰ってこないかなあ、ガイア。

「…何やってるんだ、お前？」

「おっ、ようやく帰ってきたか、ガイア」

ガイアは呆れている。

それはそうだろう。

何せ当たり一面に人が倒れてるんだ。

手下全員は倒すことはなかったかな。

やり過ぎた。

「な、何で天竜人がこんなに強いんだよ！？しかもこんなガキが！」

そして今唯一立っているのが人さらいたちのリーダーだった。

「そりゃ、鍛えてるからな。それよりもお前らをどうしよかな？天竜人に手を出した大罪人として海軍につきだしてもいいんだけどな
ー」

「ひいつ、お助けを！」

必死に平伏する。

うーん、少し可哀想だな。

……そうだ！

「…冗談だよ。あんた名前は」

「はえ？」

「名前だよ。名前！」

「ギドーですけど…」

「よし、ギドー。これあげるからもう人さらいはやめろ」

俺はそう言ってお小遣いの内の100万ベリーをギドーに渡す。

「へ？」

「それで俺の情報屋になれ」

「はあー…」

ガイアがため息をつく。

「許して…くれるのか？」

「んー？」

「俺達はあるたをさらって売ろうとしたんだぞ」

「別にこっちは結果的に何も被害なかったしね」

「…お前本当に天竜人か？」

「よく言われるよ。それよりやるのか？」

「それは…」

「ガイアー、海軍の駐屯所ってどこだったけ？」

「やります!!やらせていただきます!!」

「うん」

「やったぜ！」

「思わぬところで情報源をゲットだ！人さらい屋もやめさせられて――石二鳥！」

「報酬は定期的に渡すからな。絶対に人さらいなんかするなよ。したら海軍につきだすからな」

釘を刺しながら俺は防護服を着る。

「さあ、行こうぜ。ガイア」

「まったくお前は……」

俺はガイアからマスクをもらってつける。

「まあ、いいじゃないか。それよりも……」

「何だ？」

「俺ってマジで強かったんだな」

「……はあ……」

ガイアは再びため息をついた。

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

家に戻ってきた俺達。

「お帰りテラマキア」

「父様は？」

「どこかの人の取引の算段を立ててるらしいわってあらあら。今日も傷だらけね。リビングに行っていて。薬箱出してくるから」

「すみませんお母さん。お風呂ただいていいですか？」

「ええ、いいですよ。ガイアさん」

「ありがとうございます」

ガイアは風呂場に向かう。

くそっ、ガイアめ。

ぬけぬけと風呂に向かいやがって。

鬱憤晴らしに俺を殴ってることバラしてやろうか。

「さあ、テラマキア。リビングに行きなさい。果物を用意してるから」

「分かりました。母様」

俺はリビングに向かった。

リビングには母様の言った通り、机に切られた果物が置いてあった。

「母様に感謝だな」

俺は果物を手にとる。

「いただきまーす」

がぶっ。

モグモグ…

「うっ」

まっつっずっつっつううう！！！！！！

何なんだよこれ！？

不味すぎだろ！！

何の果物だよ！！

「うぶっ」

ダメだ吐いちゃ！

いくら何でも吐くのはまずい。

母様に怒られる。

「うつ…く…」

ごくんっ

何とか飲み込む。

「はあー…」

地獄を見たぜ…

「どう、テラマキア。おいしかった？」

薬箱を持ってリビングに入ってきた母様が聞いてくる。

「は、はい…」

滅茶苦茶不味かったけどね。

「よかった。変な模様がついた果物だったから味がわからなかったのよ」

変な模様？

…嫌な予感がする。

「おい、サマルドリア。取引用にここに置いていた悪魔の実を知らぬかの？」

「あら、悪魔の実は知らないけどそこにあつた果物なら切つてテラマキアが食べたわ」

「なん…じゃと…」

父様の顔が驚愕の色に染まる。

「うあ…」

つまり俺が食つたのは悪魔の実だということですか。

……………マジ？

第五説：初めての戦闘（という独壇場）（後書き）

ついに悪魔の実を食べちゃった。
能力は次回明らかになります。

第六説：悪魔の実（前書き）

いよいよテラマキアが食べた悪魔の実が分かります。

第六説：悪魔の実

さて、いったん落ち着いて今の状況を整理しよう。

俺は悪魔の実を食べてしまった。

これはまぎれもない事実だ。

このことから二つのことが分かる。

一つめ、俺はかなづちになってしまった。

それは別にいい。

俺は泳ぎが好きなわけではないからな。

重要なのは次、二つめだ。

俺は何かの能力者になってしまったということ。

何の能力かは分からない以上、無闇に能力を発動させるのは危険だ。ということではいつもの鍛錬をするときの小島に來ている。

ここなら多少荒っぽいことが起こっても大丈夫だ。

というかここでいつも荒っぽいことしてるしね。

今回は俺とガイア以外に母様と父様も來ている。

それはなぜか？

事の発端は昨日、俺が悪魔の実を食べた直後のことである。

「吐け！！吐くのじゃテラマキア！！」

「む、無理ですよ。父様！胸ぐら掴んで揺らさないでください！」

そう言つと父様はやつと放してくれたが、膝をついて落ち込みはじめた。

「ああ、なんてことじゃ…。よりにもよつて悪魔の実じゃなんてこんなことがバレたら今度こそ…」

「まあまあ、ゾディアック。落ち着いて」

母様が父様を慰めようとする。

「これが落ち着いていられるか！元はといえばお前のせいじゃぞ！お前がテラマキアに悪魔の実を…！」

「いつまでもウジウジ言つてるんじゃないありません…！」

母様の一喝。

マジでびつくりした…！

父様も驚いてのけぞっている。

「食べてしまったものは仕方ないのですから、今の現状に対することを考えなさい」

「う、うむ。そうじゃのう。すまんかった、サマルドリア」

「分かればいいのです」

とりあえず納得する父様。

ていうか母様もつともらしいこと言ってるけど完全に自分の責任を誤魔化してるよね？

それでよく納得する父様はある意味すごい。
本当に尻に敷かれてるなあ。

「お風呂、お先にいただきましたーってどうしたんですか？」

ガイアが風呂から上がってきた。
空気読めよ。

「あら、ガイアさん。ちょっと聞いてくださる？」

「はあ…」

母様がガイアに事情を説明する。

そして全てを聞き終わったガイアは深いため息をついた。

「テラ。お前って奴は…」

「あはは…。成りゆきで食べちゃった」

そんな俺の能天気なことを言う俺を見てガイアはもう一度ため息をついた。

「なんだか最近、ため息をつきっぱなしな気がするな」

「なあ、ガイア。さっきから能力を使いたくて体がウズウズしてるんだけど能力使っていいかな？」

その証拠にさっきから体が若干熱い気がする。

「ダメだ抑える。もしその能力が危険なものだつたらどうする？それに能力の扱いはかなり難しいんだ。下手に使つと周りに甚大な被害をもたらしかねないんだからな」

「うつ…」

ちえつ、分かったよ。

確かにここは家の中だし、何より父様と母様がいる。

もし能力を使つて危害が及んだら目も当てられないからな。

「能力の把握は明日、いつもの鍛錬の小島でするからな」

「あの、ガイアさん」

母様が躊躇いがちにガイアに話しかける。
どうしたんだ？

「明日の鍛錬、私が見に行つてもよろしいでしょうか？」

「なっ！？」

「何を言つのですか！？母様！」

驚愕する俺とガイア。

「テラマキアが悪魔の実を食べたのは私にも責任がありますからね」

勇ましい母様。

「ですが何が起こるか分かりませんよ？命の保証もできませんし…」

「覚悟の上です」

「しかし…」

「こう言ったらサマルドリアは絶対に譲らんよ、ガイア君」

父様が前に歩みでてくる。

「昔からこうじゃからな」

「当たり前でしょ。それに私が行くからにはあなたも来るのでしょ
う？」

「当然じゃ」

ガイアはしばらく黙っていたが諦めたかのように体の力を抜き、

「…分かりました。連れて行きましょう」

「ありがとうございます。ガイアさん」

「ですが絶対に私の指示に従ってくださいね」

「うむ、礼を言う。ガイア君」

というわけで父様や母様もいるのである。

「さあ、テラ。いつでもいいぞ！」

ガイアは父様と母様の前に何が起きても守れるように立っている。

「ああ、行くぞ！」

俺は能力を発動させた。

その瞬間体の形が変わり始める。

骨格が変わり、筋肉が隆起していくのが分かる。

これはあれか！

もしかしてあの動物系幻獣種のドラゴンか！

天竜人だけに！

すると突然、どんどん大きくなると思っていた体変化が止まった。

あれ？

ドラゴンってこんな大ききなの？

「これはまたすごいのを引き当てたな…！」

「まあ…！」

「体長10メートルぐらいはあるかのう！」

皆が感嘆の息を漏らす。

「動物系幻獣種か…」

！！

やったぜ！

やっぱりドラゴンだったんだ！！

「へへっ、見たかガイア！俺はドラゴンだぞ！」

「はあ？」

ガイアが間の抜けた声をだす。

「何言ってるんだ、テラ？自分の体をよく見ろよ」

え？

俺は慌てて自分の体を調べる。

手のひらには柔らかい肉球。

口には鋭く抜きん出て尖った二つの牙。

頭には丸っこい耳。

尻にはふさふさの尻尾。

そして何より全身を覆う雪の様に真っ白な毛並み。

「ねえ、ガイア。これってまさか…」

「ようやく気づいたか」

ガイアが呆れたように言う。

「お前が食ったのは動物系幻獣種ネコネコの実モデル？白虎？だ」

ええええええ！！

そんなーーーー！！

何で虎なんだよ！

龍虎相討つのドラゴンのライバルの方じゃないか！！

普通は絶対にドラゴンだろ！！

天竜人なだけに！

空気読めよ世界！！

「ウガアアア！！」

苛ついて思わず叫んでしまう。

その時、物凄い強風が巻き起こった。

「うわっ！何だ！？」

「きゃあ！」

「サマルドリア！」

「くそっ！？大地の揺りかご？（ガイア・エッグ）！！」

ガイアが能力を発動し、父様と母様を強風から守る。

「こら！！テラ！これは恐らくお前の力だ！早く何とかしろ！」

「ええっ！何とかしろと言われても…」

風は依然として荒れ狂い続けている。

「だったら能力を解除しろ！そうすれば止まるはずだ！」

「わ、分かった！」

俺は急いで能力を解除し、獣型から人型に戻る。
それと同時に荒れ狂っていた風もおさまった。

「ふう…」

ガイアは能力を解除して父様と母様を解放する。

「だから言っただろ。能力の制御は難しいから一歩間違えば甚大な被害をもたらしかねないって」

「ごめん…ガイア。それよりどうしてあの風が俺の力だって分かったんだ？」

「ん？それは勘だ」

「勘かよ！」

思わずツツコミをしてしまった。

「ふむ、にしても風を操れるのか…。これは強力だな」

ガイアはブツブツと独り言を言いながら考え込んでしまう。

「テラマキア…」

「母様」

母様が近づいてきた。

「母様。俺には近づかない方がいいですよ。俺はいつまた力が暴発するか分からない化け物なん——」

俺は最後まで言えなかった。

何故なら、

「どつ…して…」

抱きしめられていたからだ。

「どうしてもこうしてもないでしょ。あなたは化け物である前に私たちの息子なのよ」

「そつじゃ。だから愛し続けるに決まっておろつ」

「それだけはこれからも変わりないわ」

ああ…

なんて…

なんて暖かくて優しいんだろう…

俺はこの時心の底から思った。

父様と母様の子どもでよかった、と――

第六説：悪魔の実（後書き）

あまのじやくな自分ですからあえて虎にしました。
詳しい能力についてはまた次回。

第七説：近況報告（前書き）

今回はちょっと短い。

第七説：近況報告

悪魔の実食べちゃった事件（俺はそう呼んでいる）から早い話、2年の歳月が流れた。

あー、何か色々あったなー。

まあ順を追って話していくことにしよう。

まずは皆？が気になっていている悪魔の実についてだがご存じ通り俺が食ったのは動物系幻獣種ネコネコの実モデル？白虎？である。

ここ二年間で何とか人獣型を常時保ちつつ、能力を使うことはできるようになった。

最初は体力がもたず人獣型を保てなくて、能力を使うどころではなかったのだから、大した成長だ。

ちなみに能力は最低でも人獣型ではないと使えなかった。

そしてその能力は五行の金、つまりあらゆるものを金属のように硬質化できることだった。

厳密に言うと自身と自身に触れている物を硬質化できるのだ。

その強度は驚くべきものだった。

「ガイア・ウォール
大地の守護」

俺の目の前に土の壁がせりあがってきた。

「よし、これを硬質化して私の攻撃をガードしてみろ」

「ええっ！何で？」

「お前の能力の硬質化の強度がどれくらいか確かめるためだ」

「うー…」

ガイアの攻撃を真正面からガードしろとか無理だろ！
俺死んだな…

「早くしろ！じゃないと死ぬぞ！」

「分かってるよ！うつつ…」

あんたの攻撃だったら硬質化してても死ぬよ…

「？五行の金？物体硬質化」

俺は目の前の土の壁に触れて全力で硬質化させる。

「じゃあ、いくぞ」

ガイアが能力を使う。

「？錬金？ダイヤモンド」

「大地の武具・ガイア・ウェポンランス槍ダイヤモンドVer」

ガイアは構える。

「ふんっ！」

そしてダイヤモンド製の槍を投げてきた。

ああっ、さよなら父様母様。

先に旅立つ親不孝な息子をお許しください。

固いもの同士がぶつかる鋭い音がした。

…

…

………あれ？

死んでない？

「すごいな……」

ガイアの驚愕した声が聞こえた。

硬質化を解いて土の壁の裏にまわる。

そこには砕け散ったダイヤがあつた。

その強度はダイヤを砕く程だつた。

さすがに武装色の覇気を纏わせられると無理だつたが。

しかし、ぶつちやけ俺はあんまりこの能力を使いこなせていない。

自身の体で硬質化できるのは両腕だけだし物体硬質化だつて集中しようやく一個が限界。

能力の扱いが難しいとガイアが言っていたのがよく分かる。

それと能力でもう一つ、あの時に見せたあの荒れ狂う風。

あれはあの時の一度つきりで二年間修行したが全然だせなかった。
俺的には五行の金よりそっちの風が使いたかったなあ。
そうだ。

六式は全部使えるようになったんだ。

おかげで変装してお忍びの一人での外出ができるようになった。

いやー、月歩って便利だなー。

まあ、マリージョアをでるまでは防護服を着なきゃならないんだ。
ど。

変装するのは、そうでないと皆、膝ついたりして全然相手してくれないからだ。

まあ、それで父様に大目玉とかをよく食らうんだけどね。

母様に「昔の私にそっくりね」と言われた。

そうそう。

ロズワードの子どもたち、チャルロスとシャルリアもこの二年で生まれた。

チャルロスは一昨年、シャルリアは去年にだ。

前にチャルロスの誕生会に呼ばれた時に見たが原作通り鼻水垂れっぱなしだった。

誰か拭いてやれよ。

そして最後に一番大事なこと。

ついに今年の始めにロジャーが処刑され大海賊時代が始まったんだ。
つまり今は原作開始の22年前ということだ。

まあ大海賊時代が始まったからといって何かが変わるわけでもなく
天竜人たちは数日後にある年に一度に開催される大人間オークションを前にそわそわしている。

暢気なもんだ。

かくいう俺もまた変装してお忍びでシャボンディ諸島に遊びに来ているのだが。

アイスうめー。

「さっさと動け！新世界を目指すルーキーたちはいつ来るか分からないのだから！」

俺の目の前を海兵たちが横切っていく。

最近はやけに海軍や海賊を見かけることが多い。

そう言えばシャボンディ諸島って新世界の海に行くために海賊たちが一斉に集うんだっけ…

この時海兵の言っていた言葉が後に起こる大事件の始まりを予告していたなんて俺は知る由もなかった。

第七説：近況報告（後書き）

次回は長編がいよいよ始まる。

第八説：初代超新星（ルーキー）（前書き）

祝！10万PV突破！

これからも読んでいただけるとありがたいです。

後、活動報告の方でアンケートやってるんで覗いてやってください。
お願いします。

第八説：初代超新星（ルーキー）

俺はいつもの様に変装をし、お忍びでシャボンディ諸島にある町の一つを歩いていた。

「相変わらずヤルキマン・マングローブは圧巻だな」

そんな暢気なことを言いながら。

「きゃあああつー!!」

突然、轟音と悲鳴が街中に響いた。

「な、何だ？」

どうやら酒場の方から聞こえてきたようだ。

何か事件でも起こったのか？

俺は野次馬根性丸出しで見に行くことにした。

酒場の前。

酒場は遠くから見ても分かるくらい半壊していた。

そしてその酒場の前に俺と同じく興味本意で集まった野次馬たちがいた。

俺は野次馬たちをかき分け、その中心を見る。

「うつ…！」

俺はそれを見た時思わず呻いてしまった。

「酷いな…」

「しかしいったいどうしたらこんな風に…」

野次馬たちもそれを見て呻き声を上げる。

半壊した酒場の前にあった物。

それは全身の水分を抜かれてからからにミイラ化した死体。そして体のあらゆる部分を切り裂かれた死体だった。

あの死体…。

俺はあんな風に殺せる奴を知っている。

でも奴は本来この島に何かいるはずがない。

いったいどうなってるんだ？

「お、おい！あれ！」

俺が考えに耽っていると野次馬の一人が死体を指差しながら叫んだ。

いったい何なんだ？

俺が死体の方を見ると、なんと死体から草花が咲き出していて、あつという間に死体を覆ってしまった！

「気持ち悪い物を残しやがって…」

誰かがそう言いながら半壊した酒場から出てきた。

「ちゃんと後片付けぐらいしていけよな」

それは青い髪青年だった。

その言動から察するにこれは彼がやったことなのだろうか。

「たくつ…。くせえ生ゴミだぜ」

青年はそう言いながらどこかへ行ってしまった。

「フフフフ…。おもしれえ奴がいるな」

突然、若い男の声が聞こえてきた。

この笑い声…！

俺は後ろを振り返って声の主を探すが見つけれない。

「いい時代になったもんだ…！」

それきりその声は聞こえてこなかった。

「しかし物騒な時代になってしまったな」

「これもあの忌まわしい海賊王が焚き付けたせいだ…！」

その代わり野次馬の会話が聞こえてきた。

「海賊たちは新世界に行くためにここシャボンディ諸島に集まるかな。しかも集まるのは過酷な生存競争を乗り越えてきた選りすぐりの海賊、つまり超^{ルキ}新星たちだから必然的に物騒になるさ」

「さっきの青い髪の奴だつて超新星の海賊だろ」

「そうさ。確か懸賞金1億8000万ベリーの《神咲》のブルーって奴だ」

「他に船員はいなくてたった一人の海賊だつて話だ」

「たった一人の海賊つて言うならもう一人いるぜ。俺今日そいつも見たんだ」

「マジか!？」

「ああ。何か身の丈ぐらいある黒い剣を背負つててさ…」

「私知ってるよ!そいつのこと。えーと、確か…」

そこで会話は聞こえなくなった。

……………うん。

ソフトクリームでも食べて落ち着こう。

俺はその場を離れ、ソフトクリームを買いに行くことにした。

うーん、やっぱりソフトクリームはうめーな。
さてと。

落ち着いたことだし頭の中を整理しようか。

恐らく今この島にはルーキーたちが多数いるのだろう。

大海賊時代に入って初めてのルーキー。

いわば初代^{ルーキー}超新星だ。

そして原作時代で名を馳せていた海賊たち。

彼らにもかつてルーキー時代というものは確かに存在したのだ。

そしてそのルーキー時代と言うのが今なわけだ。

はあ…。

めんどくさいことになったな。

俺が得た情報からは原作時代に名を馳せた海賊が少なくとも3人はいる。

ここまで揃っていると恐らく残りの奴も二人を除いてはいるだろう。

運命とはつくづく不思議なものだな…。

「いてっ」

「おわっ」

考え事をしながら歩いていたせいで人とぶつかってしまった。
その際俺が持っていたソフトクリームがその人の服にべったりとついてしまう。

「ああっ！すみません！ごめんな…さ…い…」

「いやいや、気にすんな坊主！」

シャ…

「こっちこそ悪かったな。ソフトクリーム台無しにして」

シャ…

「ん？どうしたんだ？そんな口をパクパクさせて」

シャunksだあああああ——！！！！！！

「ほれ、金やるからこれでまた買ってこい」

そう言っつてシャunksは俺に金を握らせる。

「あ…え…でも…服が…」

あまりのことで声がうまく出なくなる。

「服のことならいい。また洗えば済む話だしな！」

屈託のない笑顔で言うシャックス。

「じゃあな、坊主。俺は用事があるから行くわ」

シャックスは踵をかえす。

「さてと、みんなどこに行ってたんだ…？」

そう言っ行ってしまった。

途端に俺は全身の力が抜けた。

どうやら知らず知らずの内に体に入っていたようだ。
まさかこんなところにシャックスがいるなんて…

でも普通にいい人だったな。

服を汚しちゃったのに逆にソフトクリームを貰うお金をくれるなんて。

この恩はいずれ何かの形で返さないとな。
母様に受けた恩は必ず返せって教わったしね。

さて。

もはやこの島に後に有力な海賊になる奴が多数いるのは確定だな。

うーん、いったい誰がいるのか情報が欲しいな。

…そうだ！

こんな時こそ奴等の出番じゃないか！

2年前に俺の情報屋として雇った奴等の！

呼び出せばすぐに飛んできてくれるだろう。

この2年ですいぶん仲がよくなったからな。

よし！そうと決まれば善は急げだ。

おっと。

その前にシャンクスからもらったお金でソフトクリーム買い直すか。

俺はその時気づけなかった。

自分を見ている奴がいることに。

「フフフフフ…。まさか変装している天竜人のガキがいるとは…。
本当におもしろい」

第八説：初代超新星（ルーキー）（後書き）

一部のルーキーの名前は伏せましたが、皆さんは誰が誰だか分かりましたか？

第九説：超新星の情報（前書き）

まだまだアンケート実施してるんで皆さん答えてくれるとうれしいです。

詳しくは活動報告を見てください！

第九説：超新星の情報

シャボンディ諸島の無法地帯のとある場所。

「オーツス！久しぶりだな！テラの旦那」

「ああ、久しぶりギドー。人さらいなんかやってないだろうな？」

俺は情報屋に会っていた。

「何言ってるんだ！あんたからたんまり金もらってるんだからやるわけないでしょう？」

「ほう、金もらってなかったらやるんだな？」

「うっ…。それは言葉のあやってもんですよ、テラの旦那」

俺の情報屋。

そう。

それは俺が2年前にボコボコにして親切に「無理矢理ですよ」「ああん？」「…何でもありません」「…そう、親切に雇ってやったかつての人さらいチーム「ブラックオーガ」だった奴等だ。

今までも何度かお世話になっている。

「連絡した通りの情報はもう仕入れているよな？」

「あつたりまえですよ旦那！今やルーキーについては話題沸騰中だからすぐに情報は手に入りますよ」

「よし、じゃあさっそく教えてくれ」

「あいよ！じゃあまずはこいつから！」

そう言つてギドーは荷物から手配書を取り出した。

「懸賞金2億6000万ベリー！《鷹の目》のミホーク！背中
に背負う黒刀はあの最上大業物12工の一振りである「夜」で凄腕の剣豪！たつた一人でここまできた海賊。ルーキーの中でもかなりの強者らしいぜ」

やっぱりいたのか、ミホーク。あの野次馬どもの会話から薄々は分かっていただけ。

「さて、お次はこいつだ！」

「懸賞金3億4000万ベリー！ドンキホーテ・ドフラミンゴ！こいつは鷹の目とは逆で多くの手下を持ってやがる。その能力も未知数で危険度も半端ねえ」

そうだ。

確かに原作でもドフラミンゴには謎が多い。

第一、あの人を操る力が悪魔の実の能力がすら分かっていないのだ。関わるのは絶対にやめておこう。

もし天竜人だつてことがバレたら何をされるか分からない。

「さてさて、次はこいつ！」

「懸賞金2億9600万ベリー！《暴君》バーソロミュー・くまだ

！奴はその二つ名の通りまさに暴君！ニキュニキュの実の能力者で残虐非道の限りを尽くす海賊さ」

！！

そうか。

くまはかつては残虐非道の限りを尽くした海賊だって原作でも言われてたっけ。

原作でも恐るべき強さでルフィたちを圧倒していたんだ。

その上残虐だなんて手がつけられない。

こっちも関わらないようにしよう。

「それで次はつと…」

「懸賞金8100万ベリーのサー・クロコダイルだ。こいつはルーキーの中で一番懸賞金が低いが珍しい自然系の悪魔の実、スナスナの実の能力者だ！戦闘力も他のルーキーに引けをとらねえ」

クロコダイルか。

懸賞金低いな。

まああいつは能力に頼り過ぎてるところがあるからな。

スナスナの実自体、弱点が水っていうありきたりな弱点だしね。

王下七武海なのにルフィが勝てたのも頷ける。

「お次は…」

「懸賞金3億2000万ベリーのゲッコー・モリアだな。こいつも悪魔の実の能力者でカゲカゲの実を食べた影人間だそうだ。部下も懸賞金はかけられていないが有能な奴が多いらしい」

ふーん、ルーキー時代のモリアか…

確か新世界で四皇のカイドウに負けるまで己の力を過信してたんだっけ？

興味あるな。

というかこの時代に海賊やってる未来の王下七武海勢揃いだな。

恐ろしいな…

「次のこいつは大物だな」

「懸賞金4億7000万ベリー！！赤髪のシャンクスだ！かつて海賊王の船員でそのせいか懸賞金がルーキーの中でずば抜けて高い！その強さも折り紙つきだ！」

スゲー…

圧倒的だな、シャンクス。

まあ、後に四皇になるんだしこれぐらい懸賞金かけられるのは当たり前か。

そう言えば覇気はもう使えるのかな。

「次が最後だな」

「懸賞金1億8000万ベリー、《神咲》のブルーだ。こいつも鷹の目と同じくたった一人でここまできた海賊だな。こいつについては余り情報が得られなかった。何せ他のルーキーとは違ってごく最近に現れた海賊だからな。悪魔の実の能力者ってことだけは分かってるが…。それでも懸賞金が高いのは民間に多大な被害を与えているからさ。ルーキーの中では一番世間に不評な海賊だな」

酒場で見たあの髪の青い青年か。

こいつは原作では名を聞かないな。

新世界でやられてしまったのか？
俺的には一番興味があるな。

「以上総勢7名のルーキーがこのシャボンディ諸島に集まっている
ようだぜ。」

「そうか。ありがとな、ギドー。助かったよ」

俺はギドーに報酬の金を渡した。

「いやいや、こちらこそこんな大金をもらえて感謝だぜ。そうだ、
テラの旦那。もうひとつ言うことがあったぜ」

ギドーが思い出したようにそんなことを言う。

「何なんだ？」

「ああ。海軍のことさ」

海軍？

「海軍がどうしたんだ？」

「それが今日の昼頃に海軍の中将がこのシャボンディ諸島に来るらしい。ちょうど今頃到着したんじゃないか？」

……マジですか？

同時刻。

シャボンディ諸島のとある港。

その港には海軍の軍艦が停泊している。

その軍艦の甲板に一人の男が立っている。

その男は正義の刺繍が入った背広を羽織っていて、頭には海軍の帽子を被っていた。

海兵の一人がその男に近づく。

「サカズキ中将！全兵士の武装、完了しました！」

その男——サカズキはその報告を聞き、海兵を怒鳴った。

「遅い！！もっと早くせんか！！」

「す、すみません！！」

一喝され怯える海兵を一瞥しサカズキはシャボンディ諸島を見る。

「まずは最優先で赤髪を狙わなければのう……。奴は海賊王の元船員。新世界へと進出を許せば必ず次世代の海賊としての風格を表す。そうならんためにも今、始末せんとな……！」

シャボンディ諸島のとある無法地帯。

「仲間を探していたつもりがとんでもないやつにあっちまったな」

「赤髪か…」

そこで二人の男が対峙していた。

「噂はかねがね聞いてるぞ《鷹の目》」

「……………」

ミホークとシャンクスである。

ミホークは無言で背中に背負った「夜」を手取る。

「手合わせを願おう。強き者よ」

そして構える。

「決闘ってか…」

シャンクスも腰にさしてある剣を抜く。

「仲間を探してる途中だけど見逃してもらえそつもないな」

お互いに構え合う。

緊迫した空気が流れた。

シャボンディ諸島のある街中。

轟音と悲鳴が飛び交う。

「キーッシッシッシ！せつかちな奴等だな、オイ！」

ゴシック調の服を着た大男——モリアは大声を上げて笑う。

モリアが見ている先。

その先の建物から砂嵐と

肉球型に穴の空いた瓦礫に混じって二人の男が飛び出してきた。

「ちいっ！何だあのふざけた手のひらは！」

一人はクロコダイル。

「懸賞金8100万ベリーのクロコダイル…。こんなものか」

もう一人はバーソロミュー・くまだった。

「キッシシ！くま。お前いきなり仕掛けてきてうちのクルーたちを全員倒すとはどういうつもりだ？」

「……ライバルは今の内に減らしておくべきだと思ってな」

「ムカつく野郎だな…。てめえミイラになりたいか？」

一触即発の雰囲気。

それを見物する人物が一人。

「フフフフ…。早くもここで誰かが脱落するのか…？」

ここ、シャボンディ諸島において始まる戦いの兆し。

これが大事件の始まりであることをまだ誰も知らない。

第九説：超新星の情報（後書き）

中将も来て、いよいよ戦いが始まります。

第十説：巻き込まれる（前書き）

戦いの臨場感でてるかな…？

第十説：巻き込まれる

無法地帯に飛び交う斬撃。

「おらあ！」

「……………！」

ミホークとシャンクスは打ち合い続ける。

その剣筋は凡百の人間には全く見えない程のスピードだ。

剣がぶつかり合う度に鳴る金属音と斬撃の余波。

その余波はすさまじいもので地を裂き、天を鳴動させる。

「おわつと！？」

シャンクスが体勢を崩し、打ち合いの均衡をが崩れる。

「好機……！」

ミホークは黒刀「夜」を構え直す。

「フッ……！」

そして渾身の力で振り抜た。

「やべっ……！」

シャンクスはそれを紙一重でかわす。

シャンクスがかわしたミホークの渾身の斬撃は後ろにあったヤルキマン・マングローブを真つ二つにした。
真つ二つになったヤルキマン・マングローブはメキメキと音を立てて崩れ落ちる。

「こんにやろう!!」

体勢を立て直したシャンクスは渾身の一撃を放ったことで大きなスキを作ったミホークを狙う。

「お返しだ!」

剣に覇気を纏わせ、振り下ろす。

「くっ!!」

ミホークは何とか飛び退いて回避する。
覇気を纏った一撃はミホークのいた場所の地面を深く抉った。

「やるな!!」

「貴様こそ!!」

彼らはお互いに全力で打ち合い始める。

それは周りにあるヤルキマン・マングローブを次々と真つ二つにし、地面を抉っていった。

情報屋のギドーと別れた俺は一人、無法地帯を歩いていた。

うーん、やばいな。

まさか中將が出てくるとは思いもしなかった。

この時代の中將っていうと後に大將になるサカズキやボルサリーノ、クザンも含むんだよなあ…。

もしこの島に来ているのが彼らだった場合はシャボンディ諸島は原作並みに被害甚大になるだろう。

もし遊園地が被害にあつて半壊でもしたらどうしよう…。
しばらく遊園地で遊べなくなるのは嫌だな。

そんな風に悶々と考えていると目の前に何かが迫ってきた。

「ん？何だあれ？」

ていうかあれ…

斬撃だー！ー！！

「くそっ！」

俺は避けられないことを悟ると急いで人獣型になり、能力を発動さ

せる。

「？五行の金？右腕硬質化！！」

能力により硬質化した右腕を六式の指銃で全力で向かってくる斬撃に向けて突きだす。

「指銃？白弾？！！！」

すさまじい轟音と共に俺の技と斬撃がぶつかる。

そして斬撃は俺の技によってかき消された。

「ふう…。危なかった」

俺は人型に戻る。

「いったい誰だ？今の斬撃を放った奴は？」

並みの奴じゃ今の斬撃は放てない。

俺は斬撃を放った奴を探そうとして辺りを見渡そうとするが、スパンツと何かを切る音が聞こえたかと思うと、続けてメキメキという音が後ろからした。

「まさかね…」

俺は嫌な予感を振り払いながら後ろを振り返った。

ちょうどヤルキマン・マングローブが真っ二つに斬られて俺の上に

落ちてこようとしているところだった。

「うわあああ！！！」

俺は剃を使い全速力でその場を離れる。

それと同時にヤルキマン・マングローブは落ちてきた。

ギリギリ間一髪で間に合った。

もう少して死ぬところだったじゃないか！

俺は立ち上がろうとする。

しかし目の前に起きた地面を抉るような衝撃で吹き飛ばされた。

「うひゃあああ！！！」

もう嫌だあああ！！

家に帰りたい！！

吹き飛ばされてポテツと地面に転がる俺。

「すばしっこい奴だな、おい！」

砂ぼこりの舞う中、聞き覚えのある声を聞く。

この声は――

「何やってんだよシャックス！こんなところで！」

シャンクスは驚いた顔でこちらを振り返る。

「お前あの時のソフトクリーム坊主！何でこんなところに…！」

シャンクスは驚いていたが頭を振ってその感情を振り払う。

「いや、そんなことよりも一刻早くここから離れる！じゃねえと…
ってうわっ！！」

シャンクスが突然、体をひねる。

その時その赤髪が数本、切断されたかのように落ちた。

「よそ見をしている場合か？」

神速の太刀筋による突風で砂ぼこりの払われた先に身の丈程もある黒刀を携えた男が立っていた。

ミ、ミホーク！？

何で！？

「ほら、さつさと逃げる坊主。今は決闘中だからお前を助けられない。ここにいたら死ぬぞ」

決闘！？

つまり今まで戦っていたってことかよ！

じゃあ最初の斬撃やヤルキマン・マングローブが落ちてきたりとかさっきの

俺が吹き飛ばされた衝撃は全部このシャンクスとミホークの戦いのせい！

チクシヨー！！

お前らもいつか泣かすリストに入れてやる！
でも今は――

「言われなくても逃げるに決まってる！！」

俺はダッシュで逃げ出す。

彼らの戦いに巻き込まれたら今の俺じゃ命がいくつあっても足りない。

まだ死にたくないんだよ俺は！

しかし俺が逃げ出した先の地面から突然マグマが噴き出してきた！！

「うにゃああああ！！」

今日あまりにも悲鳴を上げすぎたから変な悲鳴になってしまった。

次から次へと……！

今度は何なんだ！？

「見つけたぞ……。赤髪！」

噴き出したマグマが人の形をとっていく。

まさか……

「こりゃまたえらいのがでてきたな……」

「覚悟せえよ……！！」

サカズキだああ！！

シャボンディ諸島に来た中将ってこいつだったのか！
最悪だ。

こいつは海賊を成敗するためなら周りの被害は気にしないタイプだ。
よりにもよってこいつとはな…。

「逃がしはせんぞ」

俺たちはいつの間にか海兵たちに囲まれていた。

「行くぞ…。冥こ——おお！？」

技を繰り出そうとしたサカズキが真つ二つになる。

「決闘の邪魔をするな」

どうやらミホークが斬ったらしい。

しかしサカズキは微塵も効いた様子もなく、すぐさまマグマは元の
形へと戻っていく。

「ああ、《鷹の目》もいたのか…」

サカズキは確認するように俺たちを見て言う。

「ふむ、三人か。とるに足らんな」

ん？三人！？

もしかして俺も数に入ってるのか！？

変装してるから一応一般人の子供に見えてるはずだよな！

「ちょっと待ってくれ！俺は一般人だぞ！」

「嘘をつけ！！こんな無法地帯の奥に一般人の、それもただの子供がいるわけがなかるう！」

……マジですか？

「《鷹の目》。ここは一旦勝負を預けないか？じゃないとやばそうだしな」

「……いいだろう。決着をつけるのはまた今度だ」

シャンクスたちはどうやら一時休戦してここから逃げ出すために手を組むようだ。

「悪いな、坊主。巻き込みじまって。お前は俺が責任持つて守るか
らよ」

「俺は坊主じゃない。テラマキアって名前があるんだ。それに一応自分の身ぐらい自分で守れる」

そう言つて俺は人獣型になる。

「むっ——！」

「……！！」

「へえ……！」

ざわ—ざわ——！

場がざわつく。

「驚いた…！悪魔の実の能力者だったのか。見くびって悪かったよ、テラマキア」

「分かったならいいんだ」

正直そんなに戦えるか分からないんだけどね。

「だが無理はするなよ。あいつにスキができれば全力で逃げろ」

当たり前だ。

「言われなくても」

「ふんっ！」

ポコポコと音を立ててサカズキのマグマが膨れ上がっていく。

「悪魔の実か——。それがどうした！全員骨も残らず溶かしてやるわ！——」

「…来るぞ」

くそっ！

どうしてこんなことになったのか分からないが闘うしかないか…！

俺たちは身構えた。

第十説・巻き込まれる（後書き）

原作のキャラの口調ってこれであってますよね。

第十一説：バトルロイヤル（前書き）

戦闘シーンってやっぱりむずい…。

第十一説：バトルロイヤル

テラがサカズキと対峙する少し前。

「くそっ！テラのやつ、どこ行っただ？」

私、ガイアはお忍びで勝手に出かけたテラを探して街中にいた。

「テラのおとうさんに連れてこいと言われたんだけどな……」

数日後に行われるはずの大人間オークションが多くの天竜人の希望、
というか命令で今日になったからおとうさんはテラも連れていこう
としたが、案の定テラはいつも通り勝手に外に出かけていた。
おとうさんカンカンに怒ってたぞ。

「連れて帰ったらお仕置きだな」

その時、悲鳴が聞こえたと共に何かが私の体をものすごい衝撃で走
り抜けた！！

「うおっ——！？」

見ると体に肉球型の穴が空いていた。

ロギア的能力者じゃなければ危なかった……！

「デザート・スパーダ
砂漠の宝刀……！！」

私の横にあった建物を砂の刃が斬り倒した。
一歩間違えば私に当たっていたかもしれない。

「フリック・バット
欠片蝙蝠！！」

「バッド
圧力砲……」

どうやら海賊たちが戦っているようだ。

その余波で次々と周りの

人や建物が傷つき、壊れていく。

「ああっ！私の家がああ！！」

その家の住人らしき女性が斬り倒された家を見て、嘆きの声を上げていた。

「お願いだから目を開けてくれ……！」

その向かい側では男性が恋人らしき女性を抱えてうずくまっている。
その女性は大量の血を流していた。

たくさんの人々の悲鳴が飛び交う。

プツンッ——

私の中で何かがキレた。

「アース・ガイア
母なる大地」

地面から土が大きく盛り上がり、直径4メートルくらいの巨大な塊

となる。

「慈悲の拳……！」
ビシッ・ブロウ

その塊は拳の形を模して、暴れている海賊たちがいる方へと突っ込んでいく！

「くっ！？砂嵐……！」
サイブルス

その巨大な土の拳は海賊の一人がだした巨大な砂嵐と激突した。

「なにっ！」

その土の拳は砂嵐を突き破り、その先にいる砂嵐をだした海賊に直撃し、粉微塵になった。

「ちいっ！」

しかしその粉が集まって元の海賊の形をとっていく。

ロギアの能力者か！

「お前は確か……」

「キーッシッシッ！堕ちた海軍中将、ガイアか！」

なるほど、今世間を騒がせているルーキーたちか……。

クロコダイルにゲッコー・モリア、それに《暴君》バーソロミュー・くまの三人だな……！

「お前たち…。暴れるなら街の外で暴れる！」

「何故お前にそんなことを言われなきゃならねえんだ？」

「民間人に被害が及ぶだろうが…！」

私は激昂して言う。

しかし彼らの反応は冷めていた。

「知るか」

「…カスが死のうと俺には関係ない」

「キッシッシシ！巻き込まれる奴が悪いんだ！」

「……ッ…！」

私は拳を握りしめる。

「……ヒヨっ子共が」

いいだろう。

鉄槌を下してやる。

「新世界の海のレベルってやつを見せてやろう…！」

ガイアとルーキーたちが戦おうしているところ。

「フフフフ…。まさかあの堕ちた海軍中將がこの諸島にいたとはな…！」

それを見ている男――

ドンキホーテ・ドフラミンゴがいた。

彼はおもしろそうにこれから始まる戦いを観戦しようとしていた。

「錬金？ダイヤモンド？」

ガイアは能力を発動させる。

ガイア・ウェボンカーニバル
「大地の武具祭！」

地面から色々な形をした無数のダイヤモンド製の武器が飛び出し、クロコダイルたちを狙う。

もちろんガイアはそれらに武装色の覇気を纏わせている。

そんなことは露ほども知らない彼ら。

モリアとくまは余裕でそれらを避けるがクロコダイルだけはロギア
の能力者である驕りからか避けなかった。

そしてガイアの放った覇気を纏った武具たちは何の抵抗もなく当た
り前にクロコダイルの体に突き刺さった。

「がはっ……なんだと！！！？？」

クロコダイルはあまりのことで痛みを忘れて驚愕している。

それはそうである。

弱点である水をかけられて攻撃が当たったことはあるにしても、通
常の状態で攻撃を受けたことはなかったのだから。

ロギアに物理攻撃は通用しないというクロコダイルの常識はもろく
も崩れさった。

「こりゃ驚いた……！」

「……！！！」

モリアやくまも驚愕の表情を見せる。

「これがお前たちルーキーと私の差だ」

ガイアは無慈悲にも追撃をしようとクロコダイルに近づく。

「行け、ドッヘルマン影法師！」

しかしモリアが横からガイアに能力のひとつである己の影を操って、ガイアに体当たりをかまそうとする。

ガイアは読んでいたかのようにするりとかわした。

「キッシッシッシ！つまりお前を倒せば俺の名はさらに上がるってわけだ」

モリアはなおもしつこくガイアを追撃する。

だがガイアはそれらの攻撃を全てかすることなくかわしていく。

「ちいっ！すばしっこいやつめ！」

そのモリアが突然横に吹き飛ぶ！

そして建物に激突し、壁を突き破って中へと突っ込んだ。

「横がから空きだ……」

モリアはくまの「圧力砲」によって吹き飛んだのである。

「てめえ……くま！いきなり何を……」

「俺達は別にあの男を倒すために協力しているわけではない」

それは至極もつともなことである。

彼らはガイアが来るまでの間も戦っていたのだから。

「バトルロイヤルってか…？」

「的を射ている」

その瞬間、パツとくまの姿が消える。

いつの間にかガイアの後ろに移動し、しこを踏み始めていた。

ガイアがそれに気づいたのはくまがしこを踏み終えた後だった。

「つつぱり圧力砲！！」

くまは怒濤の勢いで空気をはたく。

はたかれた空気は衝撃波となってガイアを襲う。

「当たるかそんなの」

ガイアはそれらを紙一重で避け、くまに急速に接近する。

「！！」

くまは急いで両手を前に持っていき、カウンターの用意をしようとする。

「遅い」

が、それよりも先にガイアが近づき武装色の覇気を纏わせた手でく

「なんだありや…?」

「尻尾?」

その巨大な長い尻尾らしきものは垂直から横に倒れてそしてガイアたちがいる方を目掛けて建物をなぎ倒しながら迫ってきた!

「おっと!」

「ちっ!」

「ドッベルマン
影法師!」

「……!」

全員何とか避けるが尻尾らしきものはその後そのまま酒場を中心として円を描きながらその範囲内ある建物をなぎ倒していった。

そして一周してようやく元の位置に戻ったとき、シウルシウルとそれは中心である酒場に戻っていった。

「たくつ。おちおち酒も飲めやしない」

その巨大な尻尾らしきものに破壊された酒場、いやその跡地には青い髪青年が立っていた。

「《神咲》のブルーか!」

ブルーと呼ばれた青年はだるそうにしている。

「くそっ……うぜえな。二日酔いだ。」

「次から次へと…！」

クロコダイルが痺れをきらしたように言う。

「てめえら全員ミイラになるか？」

そう言って手を地面につける。

グラウンド・デス
「浸食輪廻！！！」

そしてなんと手をつけたところから地面が渴いて瓦礫や植物なども呑み込んで砂漠化していく！

「させるか！」

それに気づいたガイアも地面に手をつける。

「大地の恵み（ガイア・メルシー）！！！」

ガイアの手をつけた部分からは地面が水気を帯びていく！

「はっ！そんなしょばい水気が俺の渴きに勝てるっても？」

しかしガイアの地面が水気を帯びていくスピードはクロコダイルの地面を覆っていく渴きの倍速だった。

「な、何故だ！？」

「当たり前だ。お前は砂、私は土。私の能力はお前の能力に対して上位にあるからだ。土が砂に負けるわけないだろう」

渴きは全て無くなりクロコダイルの浸食輪廻は完全に無効化された。

「何をしておるのじゃ、ガイア」

「え？」

突然、聞き慣れた声が聞こえたことにガイアは驚く。

他のルーキーたちもその姿を見て慌てて膝をつく。

「何があつたか知らんがひどく荒れておるのう…。この街は」

それは天竜人、ゾディアックだった――

「フフフフ…！天竜人まで絡んできたか」

ドフラミンゴはまだ彼らの戦いを遠くで観戦していた。

今は天竜人が来たことで中断されているが。

「にしてもあの青髪の野郎ム力つくな……」

ブルーの街をなぎ倒した回転尻尾。

ドフラミンゴも危うくあれに巻きこまれそうだったのである。

「！」

ドフラミンゴの顔がニイツと歪む。

「おもしれえことを思いついた……！」

ドフラミンゴは手をゆっくりと前に持ってくる。

「フフフフ……！」

そして能力を発動した。

「どうしてこんなところに……？」

私は突然現れたテラのおとうさんと対峙していた。

「いやのう、あまりにも遅いから様子を見にきたのじゃ。それでガイアは何をしておる？テラマキアの奴はまだ見つからんのか？」

「あー!!」

わ、忘れていた…

「ん、どうしたんじゃ？」

「あ、いやその…」

「あいつ、馬鹿か!？」

後ろからモリアの驚愕の声が聞こえた。

振り向くと《神咲》が立ってこちらに向かってきた。

ん？

向かってきた？

天竜人がいるのに!？

「何であやつは立っておるのじゃ!？」

「か…体が…勝手に…!」

何を言ってるんだ？

「う…、うおおああー!!」

《神咲》は飛びかかってきた。

私は迎撃のためな構える。

「え？」

しかし彼は私を攻撃するどころか通りすぎ、

そして――

天竜人であるテラのおとうさん――ゾディアックを殴り飛ばした
！！！！！！？？？？

「ごふえっ――！！」

ぶっ飛ぶゾディアック。

「なっ！」

ありえない！！

何を考えているんだ！？

「いかれてる……！」

「キシシ……！マジか……」

「……！！」

ルーキーたちも驚愕している。

「ゾディアック聖!!」

衛兵たちが駆け寄る。

「おぬし、いきなり何を…」

ゾディアックは顔面から血を流している。
どうやら気は失わなかったみたいだ。

「お、俺は…!」

神咲は自分がやった行為なのに信じられないという風に驚いている。

「大將を…」

「大將を呼ぶのじゃ!!!!!!」

ゾディアックの声が響き渡った――

「フフフフ!! 楽しくなるぜえ…!!」

それを引き起こした張本人は大口を開けて笑っていた…

第十一説：バトルロイヤル（後書き）

混迷を極めていくシャボンディ諸島。
どうなることやら…。

第十二説：海軍VS海賊＋天竜人（前書き）

最近戦闘シーンばかりかいてる気がする…

第十二説：海軍VS海賊＋天竜人

シャボンディ諸島のとある無法地帯。

俺、人獣型になっているテラマキアとシャンクス、ミホークは中将サカズキ率いる海兵たちと対峙していた。

「大噴火！！！」

サカズキの膨れ上がった巨大なマグマが拳に形を変えて俺達に迫ってきた！

「うわ！」

「あぶねえ！」

「……！」

俺達は避けてそれぞれの方向に散った。

俺達が避けたその巨大なマグマの拳はそのまま飛んでいき、ヤルキマン・マングローブに当たって焼き折った。

また折れたな！

今日だけで何本、ヤルキマン・マングローブが折られたんだ？

「大砲、てえっ！！！」

海兵たちが見計らって大砲を放ってきた。

サカズキがロギアだからお構い無しかよ！

「？五行の金？」

俺は迫ってくる砲弾に対して手を突きだし、

「物体硬質化！！」

そして砲弾が手に触れた瞬間、能力を発動させた。

砲弾は爆発せずそのまま俺の手に収まった。

「な、何で爆発しないんだ！？」

海兵たちは驚いている。

やっぱり思った通りだ。

物体の硬質化。

それは硬くなるというだけでなく形を保つということ。

本来なら爆発する砲弾もそのままの形を保ち続ける訳だ。

「ほら、返すぞ！」

俺は持っていた砲弾を海兵たちに向けて投げ返した。

「うわあ！」

砲弾は海兵たちに当たって爆発した。

よし、命中！

シャンクスやミホークも難なく砲弾を斬り伏せていた。

「何を油断しとる！相手は能力者だ。甘くみるな！」

そう言いながらサカズキが俺に近づき殴りかかってきた。

まずい、油断した！

避けられない…！

「やらせるかよ！」

俺に殴りかかったサカズキを止めたのはシャンクスだった。

「赤髪い…！」

「悪いな、こいつは殺らせるわけにはいかねえ」

サカズキは歯ぎしりをする。

そのサカズキが袈裟懸けに斬られる。

「むっ——！！」

ミホークか！

しかしやっぱり効いた様子はなく元の形に戻っていく。

「無駄なことを…」

しかしその間に俺達は距離をとり、体制を立て直す。

「助かったよ。シャンクス、ミホーク」

「はっ、気にすんな！」

「ふん…」

やっぱり頼りなるなあ。

そういえばこの二人は将来大きく名を馳せる海賊なんだよな。

その二人と共に戦っているってもしかするとすごいことなんじゃないか？

「たくっ…。わしが命狙うとるんじゃからさっさと諦めんかい…！」

またさっきと同じようにサカズキのマグマが膨れ上がっていく。

「あいつは俺が抑える。《鷹の目》は道を作ってくれ」

シャンクスが剣を構えながらいう。

「貴様に指図される覚えはないのだから…」

そう言いながらもミホークも黒刀を構え直す。

「まずはテラマキア、お前を逃がす。道が出来たら全力で駆け抜ける」

「えっ、でも…」

「あいつに隙が出来たら全力で逃げろって最初に言っただろ？そしてお前は頷いたはずだ」

それは確かにそうだけど……。

「やっぱりシャンクスたちを見捨ててはいけないよ……」

「ありがとな。でもお前は巻き込まれたただけだ。海賊に関係ないお前が頑張る必要はない。それにもし死なれたら俺の夢見が悪くなるしな」

そうだとしてもだ。

「俺達友達だろ！！」

シャンクスは俺の言葉に驚く。
だがすぐ元の表情に戻る。

「だからこそさ」

シャンクスは断固として譲らないつもりらしい。

「…分かったよ」

俺は渋々頷いた。

「茶番劇は終わったか…？」

サカズキがしびれをきらす。

「流星かざ——むっ！」

技を繰り出そうとするサカズキにシャンクスは素早く近づいて覇気を纏った剣を振り下ろす。

サカズキは間一髪のところまで防御した。

「ほう……。わざわざ死にに来たか、赤髪」

「へっ、誰が死ぬかよ」

そのままシャンクスとサカズキは打ち合う。

「フッ！」

ミホークはシャンクスが打ち合っている間に黒刀を振り抜き、渾身の斬撃を放つ！！

その巨大な斬撃は立ち塞がる海兵たちを十人単位で吹き飛ばした！

すさまじい斬撃だな……。

「今だ！行け！」

「甘い！」

俺が走りだそうとしたとき目の前からマグマが噴き出した。

「あぶなっ！」

俺は咄嗟に飛び退く。

その間に海兵たちは体勢を立て直してしまった。

「言つたはずだ。逃がしはせんと…」

「くそっ！」

シャンクスが万事休すかという顔つきになる。

いや、まだ手はある…！

「ミホーク、もう一度同じように斬撃を放ってくれ」

「…何を考えている」

「おもしろいことさ」

俺の答えを聞くとミホークはフツと笑い、

「いいだろう」

と言ってくれた。

「何か考えがあるらしいな…」

「ふんっ、何をしようと無駄だ」

シャンクスとサカズキは打ち合い続けている。

しかし徐々にサカズキの方が優勢になってきている。

「大砲、用意！！」

海兵たちもまた大砲を撃ってくるつもりらしい。

不味いな…

このままじゃシャンクスがサカズキと打ち合って大砲の相手をする暇がないから当たってしまう。

「てえっ！！」

「ハッ！！」

大砲が撃たれたと同時にミホークもまた黒刀を振り下ろした。

さっきよりもさらに巨大な斬撃が生まれる。

「おっと！俺も…」

斬撃と共にダッシュする。

斬撃は全ての砲弾を弾き飛ばしながら海兵たちに迫る！

てかマジすごいな。

剣圧だけで砲弾弾き飛ばすとか。

あり得ないだろ、普通。

まあこのおかげでシャンクスに砲弾が当たらずに済んだ。

そして斬撃が海兵たちを吹き飛ばす。

「同じことを繰り返しても無駄——！？」

俺は斬撃の前に先回りしていた。

そして海兵たちを吹き飛ばした斬撃に触れ、

「？五行の金？物体硬質化！！」

能力を発動させる。

巨大な斬撃は止まり、硬質化して形を保った。

俺はそれをそのまま持ち上げる。

「おおっ！」

「……！」

「なにい！」

「ええええええ！！！」

全員驚いている。

かくいう俺も驚いているのだが。
実際一か八かだったんだ。

砲弾は硬質化で形を保てても斬撃が保てるかどうかは分からなかった。

まあ、現にできてるわけだから可能ということが証明された。

恐らく触れるものであればなんでも硬質化できるのだろう。

改めて思うとすごいな。

この能力。

さてと…

「シャックス、離れてろ！！」

その言葉に瞬時反応してサカズキから離れるシャックス。

「ぬっ！」

「斬撃もう一発！！」

俺は手に持った巨大な斬撃をサカズキに向かって投げ飛ばす。

「むっっ！」

斬撃は命中すると同時に衝撃波を発生させた。

「うわあああ！！！」

海兵たちが衝撃波でまた吹き飛ばす。

どうやら硬質化したことにより威力が増したようだ。

まあ、サカズキには効果はないだろうけど。

それでも逃げる隙を作るには十分だ。

俺は剃を使い、逃げ出す。

「ありがとう！！シャンクス、ミホーク！！」

逃げる途中に俺は聞こえるように大声で礼を言う。

「おおー！！気をつけてなー！！」

シャンクスの声は返ってきたがミホークの声は返ってこなかった。
まあ確かにミホークはこんなことする柄じゃないもんな。

俺は全力で逃げ続けた。

「一人逃がしてしもうたか…」

サカズキが体をマグマに変えながら言う。

「しかしこれ以上はもう逃がさん！！」

「ははっ、お怒りだな」

「……………」

シャunksとミホークも構え直す。

海兵たちも立て直し、大砲を向ける。

「うおおおお!!!!」

無法地帯に轟音が響き渡った。

第十二説：海軍VS海賊＋天竜人（後書き）

キャラ説明が欲しいかのアンケート、まだまだやっています。

第十三説：青き龍（前書き）

いよいよブルーの能力が明かされます。

第十三説：青き龍

無法地帯を抜けた場所。

「ぜえ…ぜえ…」

シャンクスとミホークの協力によりサカズキ率いる海兵たちから逃れた俺は人型に戻り、荒い息をついていた。

「ハア…ここまでくれば…ハア…大丈夫…か」

何とか息を整える。

それにしてもシャンクスにはまた借りができちゃったな。
ソフトクリームを奢ってくれたのと合わせて二つか。
何かの形でちゃんと返さないとな。

その時街の方から何か轟音が聞こえた。

「な、何だ？」

見ると街から何か巨大な長い物が垂直に突き出ているいた。

「何だよあれ。尻尾？」

その尻尾らしきものは垂直から横に倒れ、ぐるりと時計回りに円を描いて回り、街の建物をなぎ倒していった。

ああ！？

何してんだよあれ！

あの街にだって人が住んでるんだぞ！？

「ふざけんなよ…！」

尻尾らしきものは建物をなぎ倒して時計回りに一周を終えると小さくなっていった。

くそっ！

いったい何が起こってるんだ！

俺は尻尾がなぎ倒したその街に向かった。

たどり着いたその街の光景はもはや街とは呼べないほど悲惨なものだった。

さっきの尻尾により街の建物はほとんどが崩壊し、ところどころで人が死んでいた。

誰だ！

こんなことをしたのは！

俺は尻尾が出た辺りを目指して街中を進んでいく。

すると何人か人がいるのが見えた。

だがそのほとんどが膝をついていた。

ていうか膝ついてるの後の王下七武海の三人じゃないか！
あの青い髪の奴、《神咲》のブルーって奴もいやがる。

あれ、よく見たら父様もガイアもいるじゃないか！
俺を探しに来たのか？

いや、だったら何でこんな悲惨な街にいるんだ？

突然、さっきまで膝をついていたブルーが立ち上がった。

何してんだ、あいつ！？

父様の目の前で立ったりして！？

死にたいのか！？

立ち上がったブルーはそのままずかずかとガイアと父様に近づいて、
手前で飛びかかり、そして――

父様を殴った！！！？？

父様はぶっ飛び、場にいる全員がその事態に驚愕している。

だが俺はその光景を見て怒りに震えていた。

「あいつ、父様を……！」

確かに父様は天竜人で以前あいつの恨みを買っことをしたのかもしれない。だかそれであいつがそれで殴ったのだとしても父様は父様なのだ。

天竜人で悪いことしていても俺の好きな父様なんだ！

その父様を殴られて黙っているわけにはいかない！！

「一発ぶん殴ってやる！！」

俺は人獣型になり、ブルーを目掛けて駆けていった。

父様が何か叫んだような気がしたが俺の頭にはブルーを殴ることしかなかった。

「分かりました！急いで海軍本部に連絡をとり大将を呼びます、ゾティアック様！」

衛兵の一人がどこかへ駆けていった。

「ちいっ！退くか！」

「キシシ！今、大将とやり合うのは避けたいな！」

「……」

他のルーキーたちはそれぞれこの場所から散っていく。

「俺は…な、何で…」

ただ一人《神咲》だけは未だに動揺していた。

「お前何のつもりで殴った？」

私、ガイアはそんな奴に詰めよった。

誰も天竜人に逆らわないのは大将が怖いからだ。
なのにこいつは何のためらいもなくテラのおとうさんを殴り飛ばした。

普通では考えられない。

「し、知らない！俺じゃない！」

は？

何を言ってるんだ？

「うおおおおー！」

私は奴が言ってる意味を何とか理解しようしているとそんな大声が聞こえてきた。

この声は――

「テラ！」

テラは人獣型でもものすごい速さでこちら向かってきた。

そしてそこにいた《神咲》に殴りかかる！

その事に気づいた奴は間一髪でそれをかわした。

かわされたテラの拳はそのまま地面に音を立ててめり込んだ。

「あんた…よくも父様を殴ったな…！」

「！！！」

お前、馬鹿か！？

父様なんか言ったら正体バレるじゃないか！

バレたら色々めんどくさいの分かっているはずだろう！？

しかし幸い《神咲》はその言葉を聞く前に逃げ出していた。

「あつ！待てこら…！」

テラが後を追う。

「お前が待て、テラ…！」

呼び止めるがテラは聞かずに行ってしまった。

くそっ！

後を追いたいのはやまやまだがおとうさんを置いていくわけには…

「す…すまぬ、ガイア。テラマキアを追ってくれ…」

なっ、何を！

「で、ですがあなたを置いていくわけには…」

「わしのことはいい…。テラマキアを…あの子を守ってやってくれ…」

「…分かりました」

そこまで言われたら追うしかないだろう。

私はテラが行った方向に駆けていった。

「くそっ！何でこんなことに…」

あまりのことで二日酔いも吹っ飛んじまった。

俺、《神咲》ことブルーは逃げていた。

何故か？

それは天竜人を殴ってしまったからだ。

何で殴ってしまったのか今でもよく分らない。

体が俺の意思に反してやってしまったのだ。

そして今、追手に追われている。

追手の顔は見えていない。

後ろから殺気を感じてそれを避けてそのまま逃げ出してしまったからだ。

追手は恐らく天竜人の手の者だとは思うが。

とにかく早くこの島を離れなければ！

大将が来てしまう！

しかしどうすればいい！？

船で逃げるにしても船は途中で難破してしまってこの島に来る時は飛んできたから船はない。

だからと言って船を買う金もない。

飛んで逃げるにしてもログボースは魚人島を示していて方角が分からないから違う島にはいけない。

仮にいったとしてもそこまで飛んでいく体力がない。

ならばこの島のどこかに隠れてやり過ごすか？

無理だ！

もうこの島には既に中将が来ているらしい。

遅からずそちらにも連絡がいくだろう。

第一、俺は今追われているんだ！

隠れている暇なんて無い。

そもそも大将から逃げ切れる自信がない。

万事休す。

「くそつくそつくそおっ！！！！何で俺がこんな目にあわなきゃならねえんだ！！！」

俺の命運は尽きた。

だったら奴等を道連れにしてやる……！！！！

確か今日は一番GRで大人間オークションがあるんだっただな……

丁度いい。

皆殺しにしてやる。

こんなことになった原因である奴等を。

天竜人を――

俺は能力を発動させた。

俺は父様を殴ったブルーを追っていた。

「絶対に殴ってやる……！！」

俺がそんなことを思っていた時、前を走っていたブルーの形が変わり始めた。

走りながらどんどん形が変わっていき、大きくなっていく。

なるほど、動物系の能力者か。

でもこれ、でかすぎないか…？というか空中浮いてないか？

まだまだ形は変わっていく。

「おいおい、まさかこれって…」

鼻先に生える二本のひよろ長い髭。

頭にあるのは二本の立派な角。

巨大で蛇のように長い体。

全身を覆うは緑の濃い青色の鱗。

そしてそれは空を浮いている。

完全に変わり終えたブルーの姿。

それは青龍だった。

マジですか…

青龍に変わったブルーは空中をすごい速さで飛んでいく。

「逃がすか！」

俺も人獣型から獣型、完全に白虎になり後を追った。

同時刻。

シャボンディ諸島に一人の男が上陸した。

「懐かしい島に着いたと思ったら何か騒がしいことになってるな」

男はため息をつく。

「まったく…。お前が死に際にあんなことを言って焚き付けたからだぞ、ロジャー」

男は空を見上げながら言った。

第十三説：青き龍（後書き）

ついにあの人も現れちゃいました。

第十四説：過剰戦力（前書き）

何かもう色々とやばくなってきたシャボンディ諸島。

第十四説：過剰戦力

「うむむ…。サマルドリア、もうちょっと優しく…」

「我慢しなさい」

優しくないのう。

わしはあの海賊の男に殴られた後、傷の手当てをつけるために屋敷に戻っていた。

わしの傷をみたサマルドリアは驚いていたが、事の顛末を話すと

「あなた、過去にその人に何かしたんじゃないの？」

と疑いの眼差しを向けられた。

失礼な奴じゃ！

まあ、何とか弁解して自分は何もしていないとわかったてもらえたんじゃないが。

「大将、呼んだらしいわね」

サマルドリアが手当てをしながら話しかけてくる。

「ああ、そうじゃ」

「大将だけじゃ足りないとか言ってさらに戦力を要求したとも聞いてるけど」

「ああ、本当じゃ」

「どうして？海賊一人を捕まえるのに大将だけでも過剰なぐらいなのに」

「テラマキアを守るためじゃよ」

「ガイアさんがいるじゃない。信用してないの？」

「まさか。念のためじゃよ」

手当てを終えたわしは立ち上がった。

「行くの？オークションへ」

「ああ。行かなければならんからの」

色々あるからの。

この生活を守るために。

「そう…。いつてらっしゃい」

サマルドリアも薄々分かっているのだろう。

何も言わずに送り出してくれる。

「うむ、行ってくる」

向かうは大人間オークション会場、一番GRじゃ。

シャボンディ諸島のとある場所。

天竜人がいた場所から逃げたバーソロミュー・くまは己の能力で飛ばうとしていた。

彼に船はない。

島を渡るのには必要ないからだ。

ニキュニキュの実。

今までも彼はその己の能力で島を渡ってきた。

今回もそれで赤い土の大陸を越えて新世界へ入ろうとしていた。
レットライン

彼は能力を使い、常人なは見えない程、超人的なスピードで飛ぶ。

瞬間誰かに打ち落とされた！！

くまは突然のことで反応できず、そのまま地面に叩きつけられた。

「ふむ、間に合ったか」

くまを打ち落とした男が地面に降り立つ。

「《暴君》バーソロミュー・くまか」

「お前は…！！」

くまは男の姿を見て驚愕する。

男が羽織っているのは正義の刺繍が入ったコート。

「あいつらは間に合ったのか…？」

その男——海軍大将《仏》のセングクはそう呟いた。

シャボンディ諸島のとある海に面した場所。

いや、もはやそれは海とは呼べなかった。

凍土。

そう呼ぶのがふさわしいくらい見渡す限りの海が凍っていた。

「何だ…これは…！」

クロコダイルは凍った海やここに停泊していた自分の船の惨状を見

て思わず呻いてしまった。

船は周りの海が凍ってしまったせいで全く動けなくなっていた。さらに船にいた船員たちは手やら足やら凍らせて倒れていた。ひどいものは全身を凍り付けになっているのもいた。

そんな中、クロコダイルは船から少し離れた場所でアイマスクして立っている男を見つけた

「誰だてめえ」

アイマスクの男は答えない。

「ちっ！
デザート・スバーダ
砂漠の宝刀！」

クロコダイルはイラついたのか男に向かって砂の刃を放つ。

そして男に砂の刃が当たる。
だが男からは血は出ず砕け散っただけだった。

その砕け散った破片は地面を凍らせ、そこから人の形に戻り始めた。

「ふいー。やべ寝てた」

男は何事もなかったかのように言った。

「自然系か…！」

クロコダイルが呻くように言う。

「んん、お前がクロコダイルだな」

「…お前がやったのか？」

クロコダイルは船の惨状を見て言う。

「ああ、悪いな。逃げられないようにさせてもらった」

「てめえ…」

「そうカッコしなさんな。自己紹介でもして落ち着こうや」

そう言つて男はアイマスクをはずした。

「俺はクザン。海軍中将だ」

シャボンディ諸島のとある無法地帯。

モリアは船を隠した港へと向かっていた。

「キシシ！ 昨日の内にコーティングが終わっていてよかったぜ」

モリアは大将がくるというのに焦りの色も見せず余裕だ。

「君がアゲツコー・モリアだねえ」

そんなモリアの前に突然何の前触れもなくグラサンをかけた足の長い男が現れた。

「あ？お前どこから…」

「んゝ、センゴクさんに言われてるからねえ」

その男おとなしい緩やかな物言いをしながらは足を上げる。その足からはまばゆい光が出ている。

「お手並み拝見させてもらうよオ」

そしてまばゆい光を放つ足を前へと蹴りだした。

その足から一筋の閃光が走る！！

閃光はモリアに直撃し、すさまじい爆発を起こした！

「あつれエゝ。この程度なのかい」

閃光がモリアに直撃したのを見て男はいう。

「手加減したのにねエゝ……」

「バカかてめえ。かわしてるに決まってるだろ！」

モリアは爆発が起こったところから少し離れた場所に立っていた。

そう。

モリアは閃光が当たる瞬間、ギリギリで影法師ドッベルマンと入れ替わり回避したのだ。

「どうやってやったかは知らないけどオ、あの距離でよくかわしたねえ」

「今の技とその顔で思い出したぞ…。てめえ中將のボルサリーノだな」

男はさっきの蹴りで少しずれたグラサンを元に戻す。

「そうだよオ。いかにもわっしが海軍中將ボルサリーノだよオ」

男——ボルサリーノは答えた。

「なるほど…。お前がこの島にいた中將だな」

「いやア、違うよオ。それはサカズキのことだねエ」

「何？」

「わっしたちは天竜人に呼ばれてきたからねエ」

「嘘をつけ！来るのは大將のはずだ！」

「もちろん大將のセンゴクさんも来てるよオ。でも天竜人は相当お

怒りのようですねエ。わっしたち中将まで呼んだんだよ」

「……！」

「つまり今、この島には大将であるセンゴクさんとわっし、サカズキ、クザン三人の中将がいることになるねエ」

「……！！」

モリアはあまりに絶望的な状況に絶句した。

それはそうである。

こんな化け物じみた奴がこの島に三人もいるというのだ。

これだけでも十分絶望だというのにさらに大将までいるのだ。

一つの島に投入するにはあまりに圧倒的に過剰すぎる戦力である。

これはこの島にいる海賊たちにとって間違いなく分かりやすい死刑宣告だった。

「お、そこで提案があるんだなア」

ボルサリーノは絶句しているモリアに言う。

同時刻。

センゴクやクザンも同じように提案があると目の前の海賊に言っていた。

その海賊、クロコダイルとバーソロミュー・くまも絶句していた。

おそらく二人ともモリアが聞かされた話を知ったのだろう。

そしてクザン、センゴク、ボルサリーノはほぼ同時刻にそれぞれの場所と同じことを絶句している海賊たちに言い放った。

「王下七武海に入らないか」

第十四説：過剰戦力（後書き）

個人的にはボルサリーノが好きですね。

第十五説：王下七武海への勧誘（前書き）

今回は少し読みにくいです。

センゴクはくまと。

クザンはクロコダイルと。

ボルサリーノはモリアと。

それぞれ違う場所で話していることを頭にいれつつお読みください。

第十五説：王下七武海への勧誘

センゴクたちが海賊たちに王下七武海への勧誘をしている頃。

白虎化したテラマキアは未だに青龍化したブルーを追っていた。

「この…！ 待ちやがれ！」

待てと言われて待つわけがなく、ブルーはどんどん飛ぶスピードを早めて行く。

「くそっ！ 剃…！」

テラマキアは剃を使い、超スピードでブルーに近づく。

「白虎玉…！！！」

「…！！？」

そして鉄塊をかけてそのまま剃の超スピードで体当たりをかました。体当たりを受けバランスを崩したブルーは思わず人型に戻ってしまい、地面に落ちた。

「ハア…ハア…ちょっとは効いたかこの野郎…！」

テラマキアは人型に戻り、息を整える。

「いてえじゃねえか、クソ野郎…！」

ブルーは憤怒の形相でテラマキアを睨み付けた。

「しつこい奴だな！　どこまでも追って来やがって。俺の邪魔をするなら消すぞ！！」

凄むブルー！。

「やってみるよ」

「！！」

どうやらその一言でカチンときたらしい。

「いい度胸だ……！！　草木の肥やしにしてやろう……！！」

「のぞむところだ……！！　泣かしてやるよ……！！」

白虎と青龍。

四聖獣同士の対決が始まる。

王下七武海への勧誘。

事の発端はセンゴクたちが天竜人ゾディアックに海軍本部で出勤要請を受けた頃に遡る。

部屋にはセンゴクとガープと報告にきた海兵がいた。

「天竜人を殴るとはどんなバカだ…！」

センゴクは報告を聞き、頭を抱える。

「ぶわっはっはっは…！ 気骨のある奴がおるのっ」

「黙っとれガープ…！」

暢気に笑うガープを怒鳴り付ける。

「主犯は《神咲》のブルーは逃走中とのことです」

「サカズキに連絡は？」

「どうやら戦闘中のように連絡がとれないようです」

「何を暴れているのだあの男は…！」

センゴクはイラついて言う。

「とにかく軍艦の出航準備をしておけ！」

「はっ…！」

海兵は敬礼をし、部屋を出ていった。

「しかし天竜人め……。大将であるわしならず中将まで連れてこいとは無理にも程があるぞ……！」

「センゴク！ お前も一枚食うか？」

「黙つとれガープ、貴様ア……！」

煎餅を一枚差し出したガープの胸ぐらを掴み、大声で怒鳴り散らす。

「失礼するよオ。センゴクさん」

「……………」

そのときボルサリーノとアイマスクをしたクザンが部屋に入ってきた。

「何の用だ。後にしてくれ。今は天竜人の件で手が離せんのだ」

「その天竜人の件の話なんですよオ」

「何？」

センゴクはその言葉を聞いてガープの胸ぐらを掴んでいた手を離れた。

「話せ」

「政府から天竜人の要請に従いシャボンディ諸島に大将及び中将二

人の戦力投入を許可すると通達がきました」

「……どういうことだ」

センゴクは考える。

本来なら政府はこんな集中的に戦力を一ヶ所に集めるなど許可しない。

天竜人の要請であろうとも例外でないはずだ。

なのに許可した。

これはいつたい…

「もうひとつ通達があるんですよ」

ボルサリーノには相変わらずの穏やかな口調で言う。

「島に着いたら優先して島にいるルーキーたちを王下七武海へと勧誘をせよと」

「王下七武海…！」

「ほー。前々から聞いてはおったがどうやら本当じゃったらしいのう」

ガープは煎餅をバリバリと食いながら言った。

今まで海軍だけで何とか海の平和を守ってきた。

しかし時代は変わり、今は海賊たちが蔓延る大海賊時代になってしまった。

さすがにこれからは海軍だけでは海賊を捌ききれない。

そこで案として出てきたのが政府認可の海賊。
王下七武海の設立だ。

今、シャボンディ諸島にはこれから的大海賊時代を担っていくだろう海賊たちがいる。

政府はその彼らを使い、後に来る海賊に対する抑止力及び排除をさせるために置くつもりなのだろう。

センゴクは合点がいったように頷いた。

「わっしとしては海賊に手を借りるのは気が引けるんですがねエ」

「仕方あるまい。我々海軍だけでは手に負えないのもまた事実なのだから」

センゴクはそう言って立ち上がる。

「ならば急いで島に向かおう。中將はクザンとボルサリーノ、お前たちを連れていく」

「了解」

「……………」

クザンの返事がない。

クザンの口からはよだれが垂れている。
どうやら寝ているようだ。

「起きろ、クザン！！！！」

「んあ……。すんません」

「ぶわっはっはっは!!」

「笑うなガープ!!」

そして現在に至る。

「……つまり政府の狗になれと？」

王下七武海の概要を聞かされたモリアは言った。

「それはあんたの考え方次第だねエ」

「……………」

他の場所でクロコダイル、バーソロミュー・くまも同じように勧誘を受けていた。

「で、返事は？ くま」

「入ってくれるよな？ クロコダイル」

「どうなんだい？ ゲッコー・モリア」

返事を迫られる三人。

そして彼らは答えた。

「「断る」「」」

「！！！！？？」

「政府の狗になるのは御免だ」

モリアがそう言い、

「それにてめえはうちの船員に手を出した。落とし前はつけさせてもらわないとな」

クロコダイルはそう言い、

「…他を当たってくれ」

くまはそう言い、

王下七武海への勧誘をきっぱりと断った。

「あらら、何か勘違いしてるみたいだね」

「何のためにわっしらが直々に勧誘にきてるのだと思ってるんだい」

「これはお願いなどではない…」

「『脅迫だ』」

センゴクたちはそれぞれの場所で海賊たちに言う。

「政府は大海賊時代が本格的に始まる前に戦力を整えたがっているからねエ」

ボルサリーノは頭を掻きながら言う。

「…つまり入らねえと俺を取っ捕まえるってか？」

「当たり前でしょうが。こんな首を易々と見逃すわけにはいかないからねエ」

あるところは無法地帯で。

「だから少々痛い目みてもらうことになる方がいいのか？」

クザンは片手を凍らせてながら言う。

「ぬかせ」

クロコダイルは右手に小さな砂嵐をつくる。

あるところは海に面した場所で

「ふむ、なら仕方がない」

センゴクは両手の指をパキパキと鳴らす。

「少し灸をすえてやろう」

「……………」

くまは黙って手袋を外した。

あるところは破壊し尽くされた街から少し離れた場所で。

それぞれ戦いが始まろうとしていた。

第十五説：王下七武海への勧誘（後書き）

それぞれの場所の会話を交互に書くのってかなり難しい。

第十六説：中将ボルサリーノVS海賊ゲッコー・モリア（前書き）

また戦いなー。

いったいいくつ戦いが残ってるんだろう？

後、キャラ説明があるかのアンケートにご協力いただいた方、ありがとうございます。

やって欲しいという人が多かったのです。

シャボンディ諸島編が終わってから書くつもりです！

第十六説：中将ボルサリーノVS海賊ゲッコー・モリア

無法地帯において。

王下七武海への勧誘を蹴ったモリアはボルサリーノと対峙していた。

「本当にわっしと戦うつもりなのかい？後悔するよぉ」

「キシシ！後悔なんていちいち感じていたら海賊なんてやってられるか！」

モリアはそう言ってどこからか巨大なハサミを取り出す。

「これから新世界へ入るんだ。てめえの影で戦闘力を底上げさせてもらっぜ」

「やれやれ…。勝ち目のない戦いに挑むなんてまだまだヒヨっ子の証拠だねエ」

ボルサリーノはため息をつく。

「ほざけ！！」

モリアはボルサリーノに突進しようとする。

が、一瞬にしてボルサリーノはモリアの目の前に移動し、既に蹴りの体勢に入っていた。

「！！！！」

「もう終わりだよオ」

モリアは突然のことに反応できない！

ボルサリーノはそのまま頭を狙って光速で蹴り抜いた。

しかしその蹴りはモリアの頭を通り抜けた。

「！？」

これで終わりと思っていたボルサリーノが驚愕する。

モリアの頭は影法師ドッベルマンになっていた。

頭だけすりかえてかわしたのだ。

「キシシ、もらった！！」

モリアはその手に持ったハサミでボルサリーノの影を狙う。

だがボルサリーノはハサミが当たる前に瞬時モリアから距離をとった。

「ちっ！ 後もう少しで影をとれたのに」

「おっかしーねエー。ちゃんと覇気を纏わせたのにねエ」

ボルサリーノは首をかしげている。

「あまりしたくはないけど仕方ないねエ」

ボルサリーノは足を構えて蹴りの体勢に入った。
その足は輝いている。

「またさっきの爆発か！」

モリアは自分から少し離れた場所に影法師^{ドッヘルメン}を出して、かわす体勢を整える。

「キーシツシツシ！！ 何度してもムダだ！」

「違うねエ」

「…何？」

ボルサリーノの足が一際眩しく輝く。

「今度は特大だよオ」

「！！！？」
あまのいわと
「天岩戸」

そして前に蹴りだす！

足からでた一筋の閃光が

モリアのそばの地面に着弾した。

そしてさっきとは比べ物にならない程の巨大ですさまじい爆発がモリアとその影法師を飲み込む！

「おー、こりゃあーやりすぎたねエ」

爆発がおさまった後、そこには巨大なクレーターができていた。

モリアはクレーターの隅に荒い息をつきながら立っていた。

どうやら爆発こそ当たらなかったものの爆風を受けてそれなりにダメージを負っているようだった。

「あれを食らって立つのかい…。しぶといねエ」

「ちくしょう…。化け物め」

「そりゃ心外だねエ。君だってあの爆発から逃げ延びている化け物じゃないかい」

「その爆発を起こしてる奴に化け物なんて言われたくねえな！」

モリアは影法師をだし、それを分裂させた。

ブリック・バット
「欠片蝙蝠」

「！」

ブラックボックス
「影箱」

そしてその分裂した蝙蝠型の影がボルサリーノの周りに集まり、四角い箱を作って閉じ込めた。

「今のうちに近づいて…」

しかしその箱を中から光の剣が切り裂いた。

「！！」

「あまのむらぐも
天叢雲劍」

ボルサリーノのが箱から出てくる。

「小賢しいねエ……」

そう言つてボルサリーノはモリアを指差す。
指先は光っている。

「あつれエ……？」

ボルサリーノの指差した先にはいたのはモリアではなくその影法師
だった。

「かかったな！」

「！？」

モリアはいつの間にかボルサリーノのすぐ後ろにいた。
それは何故か？

モリアは影箱が切り裂かれた後にそれを影法師に戻してボルサリー
ノの後ろに潜ましておき、ボルサリーノがこちらを向いた瞬間に自
分と位置を入れ替えたのだ。

「てめえの影、いただくぜ……！！……？」

しかしボルサリーノには影が既になかった。

「何で影が…」

「残念。それは虚像だよ」

ボルサリーノが突然後ろに現れて、モリアの腹を光速で蹴り飛ばした！

「……！！」

モリアは影法師を使って避ける暇もなくモロに食らって吹き飛び、轟音を立ててヤルキマン・マングローブにぶつかった。

「……！！」

あまりに重い一撃を食らってしまいモリアはもう体が動かなかった。

「君の考えなんてバレバレなんだよ」

ボルサリーノはモリアより一枚上手だったのである。

モリアの考えが分かったボルサリーノは影箱から出たときに自らの能力を使い、光の反射や屈折を応用して自分の本来の位置からずれたところに己の姿を虚像として映し出したのだ。

モリアはそれに見事に引っかけり、その結果が現在である。

「それで、どうするんだい？」

モリアに選択肢は一つしか残されていなかった。

「くそ……入って……やる……よ」

齒を食い縛り、屈辱に耐えながら言った。

「最初からそう言っていればよかったものをねエ」

これにてゲッコー・モリアの七武海入りが決定した。

第十六説：中将ボルサリーノVS海賊ゲッコー・モリア（後書き）

次はクザンとクロコダイルの戦いかな？

第十七説：中将クザンVS海賊クロコダイル（前書き）

やっぱり駄文だな…

第十七説：中将クザンVS海賊クロコダイル

シャボンディ諸島のとある海、否、凍土に面した場所。

クザンとクロコダイルは対峙していた。

「そうカツカせず考え直してごらんよ」

「るせえ！！ てめえのダラダラしたしゃべり方はいちいち癪にさわるんだよ！！」

「そりゃ俺のモットーは『ダラけきつた正義』だからな」

「……ふざけてんのか」

クロコダイルがドスのきいた声でいう。

「おー、怖っ！ 牛乳飲めよ」

クロコダイルはクザンのその一言でカチンときたらしい。

「砂嵐―重―（サーブルス・ペサード）！！」

右手に圧縮した砂嵐をつくり、クザンに向けて放つ。

「おわっ！」

クザンは何とか横にかわす。

圧縮された砂嵐はクザンのいたところの地面をえぐった。

「危ないじゃないか」

クザンはそう言いながらそこら辺に落ちていた木の枝を拾う。

「短気は損気だぞ」

クザンの持つ木の枝がみるみるうちに凍っていく。

「アイスサーベル」

あっという間に氷の刃が出来上がった。

「本当にどうしても入らないっていうんだな？」

「くどい」

クザンの確認はクロコダイルに一蹴される。

「はあ…。入ってくれないと俺が上からお叱りを受けるんだけどな
…」

「知るか」

バツサリと切って捨てるクロコダイル。

「血も涙もないのかい、あんたは…」

クザンはため息をつく。

「じゃあこうしよう。今から戦って俺が勝ったら七武海へ入ってもらう。あんたが勝ったら俺を好きにするといい」

好きにしてい、という言葉に反応するクロコダイル。

「本当か…？」

「ああ。俺の『ダラけきつた正義』にかけて誓うよ」

「……………」

まったく信用できない誓いである。

「まあいい。どちらにしろ負けたやつは勝ったやつの言うことを聞くほかはないんだからな」

そう言ってクロコダイルは構えた。

「それは確かにそうだな」

クザンも氷の刃を構える。

「遅いな」

しかし構え終えるまえにクロコダイルが一気に距離を詰める。

バルハン
「三日月形砂丘…！」

「よっと」

さすがにクザンも中将である。

クロコダイルの突然の奇襲にも焦ることなく余裕をもって氷の刃で受け止める。

しかし氷の刃は水分をとられ元の木の枝へと戻ってしまった。

「あらら。近接戦はちつと分が悪いね」

クザンは残った片手でクロコダイルの腕を掴んだ。

「アイスタ임」

掴んだところからクロコダイルの腕が凍りついていく。

「ぐおっ！」

クロコダイルはあまりの痛み思わず飛び退く。
腕は半分近く凍りついていた。

「降参したほうがいいんじゃないの？」

「ほっとけ……！」

クロコダイルは残った片手で凍りついている腕を触った。

「あらら」

クザンが少し驚く。

なんとクロコダイルの腕は凍りついていたところが砂と化し、元通りとなったのである。

「ちょっとそつと凍らせた程度じゃ無理か…」

クザンは頭を抱える。

「かと言つてもう触れさせてもらえないだろうしなあ…」

「やってくれたな…」

クロコダイルは両手に砂嵐を作り出す。

「お返しだ！ ダブル・サブルス 二重砂嵐！」

そしてクザンに向けて放つ。

繰り出された二つの砂嵐

はなんと一つになり、巨大な砂嵐としてクザンに迫る！

「あれはヤバイな…」

クザンは前に手を突き出す。

「アイス・エイジ 氷河時代！！！！」

突きだした手から出た氷の塊が砂嵐に当たる。

「！！！！」

その瞬間、砂嵐は巨大な竜巻型の氷のオブジェと化した。

クザンはそのオブジェを蹴り飛ばす。

竜巻型のアンバランスな氷のオブジェは蹴られたら当然倒れる。

「返すぞ」

「！！！」

だが倒れる先にはクロコダイルがいた。

「ちっ！砂漠の宝刀デザート・スパーダ！！！」

クロコダイルが生み出した砂の刃はオブジェを切り裂き、その先のクザンに迫る。

「おっと！」

クザンは横にかわす。

その時に凍りついた海が目に入った。

「！……。確か砂は水に弱いんだっけか……」

クザンは何かを思いついたかのように呟いた。

「何をぶつぶついつてやがる！」

クロコダイルは砂漠の宝刀を連続で繰り出してくる。

クザンはそれを全てかわしながら島の淵に立った。
すぐ後ろは凍りついた海である。

「馬鹿が！ そのまま氷を破って海へと突き落としてやろう！」

クロコダイルが手を四つの砂の刃に変えてクザンに迫る！

「砂漠の金剛宝刀！！！」
デザート・ガスバーダ

そしてその手をクザンに突きだした！

「残念だが海に落ちるのはお前の方だ」

しかしクザンはその刃が当たる寸前に氷と化して地面に崩れ落ちた。

「なっ！」

目標を失ったクロコダイルは思わず前へつんのめる。

「そらよ！」

「！！！！」

そこをいつの間にか後ろにいたクザンに殴り飛ばされた。
そしてそのまま凍りついた海に叩きつけられる。

「くっ……！ 嵌められたか……」

その時にピシッと嫌な音が響いた。

どうやら今の衝撃で氷にヒビが入ってしまったようだ。

「くそっ！」

クロコダイルはすぐさま起き上がろうとする。
しかし氷が割れる方が早かった。

「くっ…！！！！」

クロコダイルはそのまま海へと落ちる。

が、半身まで海に浸かった瞬間、周りの海が再び凍りついた。

「何…！？」

てっきり海へ落ちると思っていたクロコダイルは驚いて周りを見る。すると目の前にクザンが立っていた。

「降参するよな？」

「ちっ…。好きにしろ」

これにてクロコダイルの七武海入りが確定した。

第十七説：中将クザンVS海賊クロコダイル（後書き）

次はくまとセンゴクかな？

第十八説：大将センゴクVSへ暴君へバーソロミュー・くま（前書き）

これでようやく戦いが一段落！
と言ってもまだ続くんだけどね。

第十八説：大将センゴクVS《暴君》バーソロミュー・くま

先の戦いによって破壊し尽くされた街から離れた場所。

轟音と共に体は巨大なのに足が短いアンバランスな男が吹き飛び、地面に転がった。

「……！！！」

その男——バーソロミュー・くまは傷だらけだった。

「人の話を聞かないところは確かに《暴君》だな」

そんなくまに近づく男、大将センゴク。

「だが強さは全然だ」

「……！！！」

くまは満身創痍だが何とか立ち上がる。

「まだ諦めないのか？」

「…政府の狗などお断りだ」

そう言つてくまは構える。

「バッド圧力砲……！！！」

そして手のひらの肉球で大気をはたいて、衝撃波とする。
その衝撃波はセンゴクに向かっていく。

しかしセンゴクは当たる寸前に拳でその衝撃波を横に薙いでいとも簡単にかき消した。

くまはそれを見ずに肉球の瞬間移動でここから逃げようとする。
が、いつの間にか近づいてきたセンゴクに殴り飛ばされ吹っ飛んだ。

「逃がしはせん…！」

まともに戦うことも逃げることもさえもできないほど圧倒的な實力差
もはやくまには選択の余地は残されていなかった。

しかしくまには決して降伏も政府の狗になることも頭になかった。
今まで残虐の限りを尽くしてきた《暴君》としてのプライドが誰か
の下につくことを許さなかったのだ。

「……」

くまは無言で立ち上がる。

その姿には覚悟の色が見えた。

「まだ立つか…」

センゴクはため息をつく。

くまはその隙を狙い、センゴクの背後に瞬間移動して至近距離で「
圧力砲」を放つ。

しかしセンゴクはそれすら読んでいたかのようにするりとかわし、
くまの「圧力砲」を放った方の腕を掴んで投げ飛ばし、地面に叩き
つけた！

「……!!」

叩きつけられた衝撃により、地面に亀裂が走る。

まだセンゴクの攻撃はまだ終わらない。

叩きつけられた衝撃の反動によりバウンドしたくまの体を武装色の覇気を纏わせた拳で殴り付ける。

「……!!!!」

ホームランボールのように飛んでいくくまの体はヤルキマン・マングローブに激突して、それをポツキリと折った。

「しまった……。覇気を使う必要はなかったか」

センゴクはやってしまったという顔で呟く。

折れたヤルキマン・マングローブがゆっくりと崩れ落ちる。そんな土煙の中一つの人影が見えた。

「!?」

土煙の晴れたそこにはくまが立っていた。

「驚いた……! タフな奴だ」

もはや立つことすら困難なはずのダメージを負っているのに立っているくまにセンゴクは素直に尊敬の念を送った。

「だがいつまでもおまえばかりに構っているわけにはいかないからな」

センゴクの形がみるみる内に変わっていく。

「悪いが本気でいかせてもらう」

そして大仏の姿になった。

大仏になったセンゴクは超スピードでくまに迫っていく！

くまは言うことを効かない体に鞭打って周りの大気を圧縮し始める。

ウルススショック
「熊の衝撃！！！！」

そして圧縮し終えた大気の爆弾をセンゴクに向かって放つ！

だがセンゴクはそれが爆発する寸前になんと握り潰した！！

そしてそのまま自分の最強の技がいとも簡単に破られたことに驚いているくまの頭を掴み、持ち上げる。

「最後にもう一度聞こう。七武海に入る気はないか」

「ない……！！」

くまはきっぱりと否定の意思を示した。

「……残念だ」

センゴクはくまの頭を地面に叩きつけると同時に衝撃波を放つ！

地面には亀裂が入り、めり込む。

超至近距離で衝撃波を食らったくまはもう動かなかった。

「ふう…」

センゴクは人型に戻る。

そしてある一点を見つめた。

「ずっと見ていたとは悪趣味な奴だな…。ドンキホーテ・ドフラミンゴ！」

そこにはいやらしい笑みを浮かべて近づいてくるドフラミンゴがいた。

「フフフフ…！ さすが大将。とんでもねえ強さだ」

センゴクは身構える。

「おっと、勘違いするんじゃないやねえ。俺は七武海とやらに入るぜ」

「！」

「第一、あんたと戦って得るものなんぞ何もねえ。それに七武海つてものはおもしろそうだ」

その言葉を聞きセンゴクは警戒を解く。

「…なにか引つかかるがまあいいだろう。七武海入りを認める」

これにてドフラミンゴの七武海入りが決定した。

「それより大将さんよ。あんたの後ろに倒れていた奴。どうか逃げたぜ」

「何!」

センゴクは慌てて後ろを振り向く。

そこに倒れていたはずのくまは影も形もなくなっていた。

「ばかな…。まだ動けたのか…」

本来のセンゴクなら気づけたが完全に倒したという油断と一人の海賊を七武海に入らせることができて気の抜けたのが重なって気づくことができなかったのである。

「不覚…!」

センゴクはそんな己を恥じた。

その時、胸のポケットに入っている三つの小電伝虫の一つが鳴った。

センゴクは気をとりなおしてその小電伝虫の受話器を取った。

「ご報告申し上げます、センゴク大将!」

どうやら海兵の一人からの連絡のようだ。

「何だ?」

「はい。只今サカズキ大将が《赤髪》のシャンクス、《鷹の目》の

ミホークと2番GR付近にて交戦中なのですがギリギリと1番GRに移動しつつあるのです！」

「何…？」

「一番GRには人間オークション…あ、いや職業安定所があり、中には多くの貴族や天竜人がいます！ このままだと彼らに被害が及ぶ可能性が！」

「くっ…。サカズキの奴め、何をやっているのだ…！」

この場合、避難させた方が最も手っ取り早いのだが、天竜人のことだから後々海軍がしっかりしていないからとかで難癖をつけてくるに違いない。

行って止めるのが最善だと言える。

「分かった。すぐに行く」

そう言って電話を切る。

次にセンゴクは残りの二つの小電伝虫を取り出してかける。

「おー、こちらボルサリーノオ」

「こちらクザン」

二人の中将が出る。

「センゴクだ。そっちは終わったか？」

「はい。七武海入りを認めてくれましたよ。」

「こっちもです」

「よし。ならば至急一番GRへ向かってくれ」

「どうかしたんですかい？」

センゴクはさつき海兵から聞いた話をする。

「要するに先回りして一番GRに行かせないようにするってことですか？」

「その通りだ」

「分かりました。すぐに急行します。ご安心なすってください」

「りょーかい」

小電伝虫が両方とも切れる。

「フフフフ…。何やら大変なことになってるみたいだな」

「お前には関係ない。七武海の称号の授与については後日、連絡する」

そう言ってセンゴクは行ってしまった。

「フフフフ…！ 一番GRか…」

残されたドフラミンゴは気味の悪い笑みを浮かべた。

「ほう…、一番GRか」

そこから少し離れたところに男がいた。

男はどうかやらセンゴクの小電伝虫の会話を盗み聞きしていたらしい。

「《赤髪》のシャンクスねえ…」

男は一人呟く。

「どれ、助けにいつてやるか」

そう言って歩きだした。

三番GR付近。

テラマキアとブルーは戦っていた。

「くそっ！ てめえさっさとくたばれ！！」

「くたばれと言われてくたばる奴がいるか！」

二人は激しく打ち合いながら少しずつ一番GRに近づいて行った。

「テラ、一体どこへ…」

ガイアはテラを追っていたが途中で見失っていた。
その時、何かが暴れている轟音がした。
ガイアは思わずそちらを見る。

「もしかしてテラの奴、戦ってるのか…」

ガイアはその先を見る。

「あの先は一番GRか…」

ガイアは音がした方向へ走り出した。

「うーむ、まだ着かないのかの？」

「もうしばらくかかります。ゾディアック聖」

従者の一人が答える。

ゾディアックは屋敷を出てから一番GRにある人間オークションを
目指して歩いていた。

「もうオークションは始まっておるというのに…」

これは運命なのか。

はたまた誰かの意思なのか。

皆それぞれ一番GRに意図せずして集まり始める。

事件はいよいよ大詰めを迎え始めつつあった――

第十八説：大将センゴクVSへ暴君バースロミュー・くま（後書き）

いよいよ大詰めだ！

第十九説：集結（前書き）

久しぶりにテラマキアの視点だ！

第十九説：集結

三番GRと一番GRの境目付近。

遠くに人間オークションが見えるところで俺、テラマキアは父様をぶん殴った《神咲》のブルーと殴り合っていた。

「泣かす！」

「くそガキが！」

肉を殴る鈍い音が響く。

俺の拳がブルーの頬に一発入れば、ブルーの拳が俺の腹に一発入る。俺の蹴りがブルーの脇腹に一発入れば、ブルーの蹴りが俺の顎に一発入る。

そんな風に両者ともに一步も引かない攻防を繰り広げていた。

「食らえ！」

俺はブルーの隙を見つけて顔面に拳を打ち込もうとする。が、寸前で拳を受け止められて防がれた。

ブルーは俺の拳を掴んだままフツと不敵に笑って

「うらあっ！」

お返しとばかりに俺の顔面を狙って拳を打ち込んできた。

だがおれも黙ってやられる義理もないのでその拳をさっき俺がやられたように受け止めてやった。

「！ー！」

そしてそのままがつちりと掴んで離さないようにする。

「離せ、こら…！！」

「あんたが離してくれたらな…！！」

お互いに相手の拳を掴みあって離さない。

「ぐぬぬ…！」

「くっく…！」

硬直状態が続く。

その時、横から飛んできた土の塊がブルーを吹っ飛ばした！

「テラ！」

「ガイア！？」

いつの間にか少し離れた場所にガイアがいた。
さっきのはどうやらガイアの仕業らしい。

「アホかア！」

「いてっ！」

ガイアは俺に近づくといきなり俺を殴った。

「いきなり何を…」

「勝手に先走って心配かけさせるな！」

「……ごめん」

まさかそんなことを言われるとは思わなかった。
俺は素直に謝った。

「くそっ！ 二対一は分が悪いな」

吹っ飛ばされて起き上がったブルーは青龍になって飛んで逃げようとする。

「あっ！ 待て！」

俺は慌てて追いかけようとした。

「……………」

が、ブルーは横からきた巨大な斬撃に当たって地面に落ちた！

うわ、ヤバイ。

何かデジャブを感じる。

「いつつ…。一体なん…」

「大噴火アアア！！！！」

さらにブルーは向かってきた特大のマグマの拳に直撃した。
ブルーは悲鳴すら上げずぶっ飛んだ。

そして黒焦げになって地面に転がる。

不幸な奴…！

俺の怒りの念はそれを見て同情の念に変わった。

「おのれ《赤髪》に《鷹の目》。ちょこまかと避けよって…」

「あんたもしつこいな！」

「……………」

やっぱりさっきの斬撃とかは彼らの戦いの余波だったらしい。

てかまだ戦っていたのかよシャンクスたち。

「ん？ テラマキアじゃねえか！ また会ったな」

「ほう……………」

「ぬ！ 一人逃がした奴か！」

それぞれこちらに気づいて三者三様の反応を見せる。

「…なあ、テラ。お前一体何してたんだ？」

ガイアは当然の反応をする。

「まあ、何だ。話せば長くなるんだ」

俺は適当にはぐらかしつつ答えた。

「むっ、ガイア…！」

サカズキがガイアの姿を見て唸る。

「裏切り者め…。こんなところにいたのか！」

裏切り者？

「ガイア？」

「気にするな」

拒絶の声。

俺はガイアを見上げる。

触れては欲しくない部分だったのだろうか。

ガイアは険しい顔をしていた。

「まあいい。お前らまとめてここで引導を渡してくれるわ…！」

またサカズキと戦うのか…。

うんざりする。

サカズキの両手がマグマに変わり、異様に膨れ上がる。

その両手をこちらに向かって突き出す。

「超噴火ア…！！！！！！！」

その両手から異常に膨れ上がったマグマが放たれて一つとなり、あり得ないほど巨大なマグマの塊になって俺たちに迫ってきた！

この辺り一帯を消す気かあいつ！

「周りの被害はお構い無しか…！」

「やばいな…！」

「ふん………」

俺たちは慌てて回避しようとする。

「アイス・エイジ
氷河時代……！」

しかし氷の塊が飛んできて巨大なマグマを一瞬にして冷やし、土の塊に変えた。

「え？」

あまりのことに呆然とする俺たち。
しかしそれだけでは終わらなかった。

「あまのいわと
天岩戸」

その土の塊に一筋のレーザーが当たり、それは木っ端微塵に爆発した。

あまりに規格外すぎる力。

俺はこの力をマンガで見たことがある。

だけどその持ち主がこんなところにいるはずが…。

「あらら、今のはやりすぎじゃないのか？ サカズキ」

「君の能力はただでさえ危ないんだからねエ」

俺の予想を軽く裏切って彼ら——クザンとボルサリーノは現れた。

「何じゃいお前ら！ 何で邪魔をする！？」

「だってあのままいってたら根っこがやられてこのGRが海に沈んでたぞ」

「君ちよつと自重した方がいいよオ。人質の子供まで殺す気かい？」

「あのガキは悪魔の実の能力者の海賊だ！」

「おー、そうなのかい？」

俺たちを無視して話す三人。

おいおい、何で後の大将の三人がいるんだよ？
洒落にならないだろ…！

「これってもしかしてピンチか？」

暢気に言うシャンクス。

「……！」

それとは対照的にミホークは黒刀を構えてピリピリとした雰囲気
纏っている。

「何でお前らここにいる…！」

ガイアが警戒しながら聞く。

「んん？ 天竜人が殴られたこと知らないのかい？」

ボルサリーノがガイアの言葉に反応して返す。

「知ってるさ！ でも来るのは中将じゃなくて大将のはずだ！」

天竜人が殴られたという事実を初めて知って驚いているシャンクス
たちを横目にガイアは言う。

「もちろん私もいる」

「センゴクさん…」

いつの間にか三人の中将の後ろに大将センゴクが
いた。

「大将…センゴク…！」

俺たちに戦慄が走る。

何だよこれ…。

中将三人に加えて大将とかオーバーキルもいいところじゃないか…！

「ガイア中将か…」

「……………」

「噂でどこぞの海賊に負けて奴隷になったと聞いていたが…。嘘だったか」

そして黒焦げになったブルーに目をやる。

「《神咲》は始末し終えたようだな」

「わしの攻撃に勝手に当たってくたばりよった」

「ふむ、そうか……。《赤髪》、《鷹の目》！ お前たち七武海に入らないか？」

「！！！」

シャンクスたちに七武海への勧誘！？

「センゴク！？ 何を…！？」

「口を出すな、サカズキ。これは政府の決定だ」

「……………」

「七武海というのは……………」

そうやってセンゴクは七武海の説明を始めた。

その説明は七武海の義務は程々にして、利点のほうを誇張して語っていた。

そして最後にこれはお願いではなく脅迫であると言って締めくくった。

「断る！」

シャンクスの第一声。

「海賊つてのはやっぱり自由じゃなきゃな！」

シャンクスらしい答えだ。

「……《鷹の目》は？」

「私は別に構わん。だが……」

ミホークは黒刀の切っ先をセンゴクに向けた。

「《赤髪》を捕まえるのであればこの場は敵対させてもらっ

「……」

「まだ決着がついていないのでな……」

こちらミホークらしい答えだ。

「……ハァー……」

センゴクがため息をつく。

「揃いも揃って海賊というのは痛い目見ないと分からん奴ばかりだな」

そう言ってガイアと俺を睨んでくる。

「その二人も逃がすわけにはいかないな」

結局巻き込まれるのか…。

空気がピンとはりつめる。

「おい、テラ」

ガイアが耳打ちしてきた。

「何だよ」

「もう天竜人ってばらしてしまえ。今はそうした方がいい」

「……この状況で信じてくれると思うか？」

「……………」

黙ってしまうガイア。

その時ボルサリーノが蹴りからレーザーを放ってきた。爆発が巻き起こる！

「あぶね！」

「くっ…！」

「おわっ！」

「……！」

俺たちは散り散りにかわす。

「貴様の相手は私だ《赤髪》」

センゴクがシャンクスの前に立ちはだかる。

「大将か…。こりゃキツいな」

「めんどくせえな…。さっさと降参してれないかなー、《鷹の目》」

ミホークはクザンと対峙していた。

「……………」

ミホークは無言で黒刀を構える。

「やっぱり降参するわけないか…」

「どうして裏切ったんだい？　ガイア」

ガイアはボルサリーノと組み合っていた。

「私は私の正義を貫いたまでだ」

「そうかい。ならわつしも自分の正義に従って君を捕らえるまでだねエ」

うわ、みんなそれぞれ戦うつもりか…。

こんなんじゃ俺も引くには引けないじゃないか。

「今度は逃がしはせん！」

目の前には般若の形相をしたサカズキがいる。

俺は人獣型になって構えた。

後の大将と一対一。

勝てる気がしない。

とにかく死にたくはないな…。

第十九説：集結（後書き）

次回はついにあの人が出てくるか…？

第二十説：それぞれの戦い（前書き）

やばい、もうすぐテストだ…！

更新が遅れるかもしれませんがご了承ください。

第二十説：それぞれの戦い

俺の嵐脚の刃とマグマの礫が飛び交う。

「なぜ六式が使える…！」

サカズキが俺の技を見て驚く。

まあ、六式は海軍の体技だしな。

それがただか一介の海賊が使っているんだ。
驚くのも無理はない。

「まあいい。何にせよ骨も残さず消してやろう…！」

おー、怖っ！

俺、テラマキアは只今、後の大将サカズキと死闘中である。
でも全く勝てる気がしない。

「？五行の金？右腕硬質化」

俺は右腕を硬質化させる。

「？飛ぶ？指銃…」

その右腕で指銃の構えをし、

「？白光？…！」

そしてサカズキに向かって撃ち出す！

瞬間サカズキの胸に大穴が空く。
だがすぐに体のマグマが穴を覆い、元に戻ってしまう。

「無駄だ。ロギアにそんな攻撃が通用するわけなかるう……！」

そうなのだ。

奴のマグマに触れないためにもさつきから遠距離攻撃だけをして
いるのだがそれ以前に俺にはまだ覇氣が使えない。

すでに負けが確定してるようなものだ。

ロギアにダメージを与えることができない——いや、方法が
無いわけでもない。

しかしこの技は直接相手に触れなければならない。

土、光などそれ自体に攻撃作用がなければ全然構わないんだけど奴
はマグマだ。

触れば確実にダメージを負う。

まさに諸刃の刃だ。

それ以前に奴は強い。

うまく懐に入れるかすら分らない。

だが今はこちらの攻撃が効かないと思って油断しているはずだから
確実に懐に入れるだろう。

その一発で致命傷を与えなければ完全に俺の負けだ。

奴は二度と油断しないだろう。

つまりチャンスは実質一度だけ。

……やばい。

何だか死亡フラグが立ちまくっている気がする。

「今度はこちらから行くぞ……」

サカズキの右腕がマグマに変わる。

俺は考えることを止めて意識をかわすことだけに集中させる。

「冥狗^{めいこう}!!」

俺の体を削ぎ落とそうと迫ってきたサカズキのマグマの腕をかわしながら俺は思った。

他のみんなは大丈夫かな――

ミホークは黒刀「夜」を振り抜いた。

「あらら」

クザンの体が横に真っ二つになる。

そして地面に崩れ落ちるがその時に凍りついた地面からすぐに再生した。

「なかなか鋭い切れ味だな」

「くっ……!」

ミホークは苦戦していた。
それはそうである。

原作での彼は恐らく覇気を使えたであろうが今は原作の22年前。今の彼は覇気を使うにはまだ未熟だった。

覇気が使えないのならロギアであるクザンに傷を負わせることはできない。

その結果、ミホークはクザンに防戦一方になってしまっていた。

フロツバ兄チザン
「アイス塊両矛槍」

クザンは空気を凍らせて氷の槍をつくり、ミホークに放つ。

向かってきた氷の槍をミホークは黒刀で叩き落とすと同時にいくつもの斬撃を放った。

「アイスタイムカブセル」

クザンはその全ての斬撃に正確に冷気の弾丸を撃ち込み、凍らせた。

ミホークはその間に一瞬にして距離を詰めようとする。

フロツバザントベック
「アイス塊暴雉嘴」

それに気づいたクザンは間髪いれずに氷で作った雉たちを向かってきたミホークに突進させる。

ミホークは動じることなくそれらを一太刀のもとに斬り伏せてクザンに近づき、黒刀を縦に振り下ろし真つ二つに斬った。

さらに見えない程の速さの剣筋で粉々になるほど斬り、そしてこれでもかと言つほど粉微塵に斬り刻んだ。

だが実体のないロギアにはそんなことは当然無駄でクザンは何事もなかったかのようにまた再生した。

「もうさ、諦めようよ。いくらやっても無駄だって分かったろ？」

クザンはミホークに語りかける。

しかしミホークはそれを無視して斬撃を放った。

クザンはそれを苦もなくひよいとかわしながらため息をついた。

「海賊つてのはどうにも強情な奴が多いな……」

戦いは続く――

あまのいわと
「天岩戸」

「大地のうねり（ガイア・ウェーブ）！！」

全てを飲み込まんとする巨大な土の波に一筋の閃光が瞬き、巨大なそれに大穴を空ける。

他の二人とは違い、ボルサリーノとガイアの力は拮抗していた。

一瞬にしてガイアの目の前に移動したボルサリーノは光速で蹴りを放つ。

ガイアはそれに動じることなく反応して能力で錬金したダイヤモンドの籠手に武装色の覇気を纏わせて迎え撃つ。

拳と蹴りが激突する！

すさまじい程の衝撃が大気を揺るがす。

衝撃と反動により両者ともに吹き飛び、空中で体勢を整えて地面に着地する。

「多少は衰えてるかと思ったけどまったくだねエ」

「お前こそ前より断然威力があがっているじゃないか」

お互いに荒い息をつく。

「あまのむらぐも
天叢雲剣」

ボルサリーノは光の長剣を生み出して構える。

「諦めたらどうだい？ あの子供と《鷹の目》は覇気が使えないみたいだし、《赤髪》はセンゴクさんが相手をしているから万に一つの勝ち目もないよオ」

「錬金？ダイヤモンド？ 大地の武具・剣ガイア・ウエボンソードダイヤモンドVer」

ガイアはダイヤモンド製の剣を作り出して構える。

「ほかの海賊はともかくテラは違うさ。何と言っても私の弟子だからな」

「弟子イ？ 君は海賊を弟子にとるのかい？」

ガイアはふつと笑う。

「実はあいつ天竜人なんだ」

そう言つてボルサリーノに突進する。

「冗談キツイよ、ガイア」

ボルサリーノはそれを迎え撃つ。

剣と剣がぶつかり、鋭い金属音が鳴り響く――

「ちょこまかと避けよって…！」

「あぶな！」

俺はサカズキの攻撃を避けながら懐に入る隙を狙っていた。

「さっさとくたばらんか……！！！」

怖い！怖い！

顔が般若を通り越して不動明王みたいになってるよ！
カルシウムとろうぜ！

「……ええい！ めんどくさい！」

サカズキの足元からマグマが膨れ上がっていく。

「流星火山！」

膨れ上がったマグマから比較的小型のマグマの拳が次々と空に向かって放たれていく。

放たれたマグマは小さな隕石となって降り注ぐ。

しめた！

今なら奴は技を出して動けない！

絶好のチャンスだ！

俺は剃を使って降り注ぐマグマの隕石をかわしながらサカズキに高速で接近する。

「むっ！」

サカズキは接近してきた俺に直接マグマを放ってきた！

「！！」

俺は咄嗟に体を捻って避けようとしたが間に合わず脇腹にかすってしまう。

「……っ！！！」

脇腹にあり得ない程の激痛が走る。

だがここまできて引くわけにはいかない……！！

「？五行の金？両腕硬質化……！」

俺は激痛を我慢しながらサカズキの前に踏み込む。

「何を……！」

サカズキは俺の様子がおかしいことに気づき始める。

俺は意識を指先に集中して持てる力を全てを叩き込んだ！

「指銃？白砲？……！！！」

突き出した俺の両指はしっかりとサカズキの体にミシッとめり込む。

「ガッ……！！！！！」

一瞬遅れて衝撃波とともにサカズキがぶっ飛んだ。

「ぐあ……！！！」

熱ッ……！！

俺は指先の熱さによる痛みと脇腹からくる激痛にうずくまった。

何故俺の攻撃がロギアであるサカズキに当たったのか。

答えは俺の能力、？五行の金？を使ったからだ。

俺はサカズキに触れた瞬間、能力を発動させてサカズキを硬質化させたのだ。

硬質化するということは形を保つということ。

つまりマグマはサカズキの形を保った硬い固形物になったのだ。

形ある硬い固形物なら誰にだって触れられるというもの。

ただしこれは決して覇気みたいに悪魔の実の能力を無効化しているわけではない。

いくら硬い固形物になったといってもマグマはマグマなのである。

つまり俺はマグマに素手で直に触れたわけなのだ。

幸いこちらにも腕を硬質化して形を保っていたので腕が溶けるということとはなかったが熱さによる痛みは感じる。

このようにそれ自体が攻撃能力を持つロギアに対しては諸刃の刃なのである。

これが俺がロギア対策用に考えた技。

覇気を使えばロギアに触れるところからとって名付けて？白覇？だ。

…何か中2っぽいな。

「あいてて…」

指先と脇腹が痛む。

ちよつと触れただけでこの痛さ。

もし一撃でも直撃していたら洒落にならなかったな。

俺はサカズキがぶつ飛んでいった方向を見る。

渾身の一撃食らわせたんだからもう立ち上がるなよ…。

「アア…。やってくれたな…」

俺の願いを容易く打ち砕かれた。

それなりのダメージを負っているようだがサカズキは立っていた。

「はは…」

笑うしかなかった。

やっぱり俺の全力ごときじゃ倒せないか。

俺は脇腹の痛みに耐えながら立ち上がる。

その時横からシャンクスがぶつ飛んできて地面に転がった。

土煙が舞う。

「くそっ…！」

「シャンクス!？」

シャンクスはかなりの深手を負っていた。

もはやこれ以上は戦えない程の。

「こんなものか、《赤髪》」

センゴクが土煙の奥から現れる。

「早くやってしまえ、センゴク」

サカズキもセンゴクとともに俺たちに近づいてくる。

絶体絶命……！！
どうする……？

「まあ、そう慌てるな。一つ聞くことがある」

センゴクはシャンクスを
見る。

「最後に一つ聞こう。七武海に入るか？」

そんなものは決まっている。

「……いやだ」

シャンクスは小さい声できっぱりと断った。

「どいつもこいつも海賊と言つのは……」

センゴクは拳を振り上げる。

「……！！」

ここまでか……！

俺はかばうようにシャンクスに覆い被さってギュッと目を瞑った。

鈍い音が響いた――

――あれ？痛くない？

俺は目を開ける。

「あぶないところだったな」

驚愕に染まった顔をしているサカズキの近くには白髪混じりの男が立っていた。

遠くにはセンゴクが土煙の中に倒れている。

「元気だったか、シャンクス？」

男はこちらを振り向きながら言った。
この顔どこかで…。

「レ、レイリーさん…！」

……………マジですか？

第二十説：それぞれの戦い（後書き）

ついにレイリー登場！

第二十一説：後に島の伝説になる絶叫（前書き）

はい、いつも読んでくれているみなさん、ありがとうございます！
今回は重大なアンケートをとりたいと思います。

それはテラマキアを襲ってきたサカズキを

許すか

許さないか

のです。

これによって今後の物語の展開が変わるかもしれませんのでご協力
お願いします！

第二十一説：後に島の伝説になる絶叫

「冥王レイリー…！」

突然現れた伝説の男に他の奴等も戦いを中断してこちらを見ていた。

「酷くやられたな、シャンクス。大丈夫か？」

「レイリーさん。どうしてここに…？」

「ははっ、いや実はな…」

何かを言いかけたレイリーに、サカズキ、クザン、ボルサリーノ三人の中将が瞬時に距離を詰めて一斉に攻撃を仕掛ける。

だが次の瞬間、いきなり三人ともぶっ飛んだ！！

え？

今、何したんだ？

「まったく。せつかちな奴等だな。少しぐらいの話もさせてくれな
いのか」

そう言うレイリーの手にはいつの間にか剣が握られている。

もしかして剣で三人とも弾き飛ばしたのか？

全然見えなかった…。

いつ剣を抜いたかすら分からなかったぞ！？

いや、それよりも後に大将になる三人をまとめてぶっ飛ばすとか
んだけ強いんだよ！

原作でもこんなには強くなかったはずだ！
そういえば今は原作の22年前だったな…。
原作より若いからまだそんなに力が衰えていないのか？

「なぜ貴様がここにいる…、レイリー」

センゴクが起き上がり、レイリーの方を向く。
その姿はいつの間にか大仏になっていた。

あれが《仏》のセンゴク…。
威圧感が半端ない。

「ちょっとした野暮用さ。この場に居合わせたのはたまたまだ」

「なら邪魔をするな」

「とは言ってもかつての仲間を見殺しにするのは私も寝覚めが悪い
んでね」

そう言っただけレイリーは剣を構える。
近づくことさえおこがましいと思わせる程の威圧感が彼から滲み出
る。

「七武海にならないのであればその男を新世界に行かせるわけには
いかない。ルーキーの中でただ一人覇気を使っているのだ。放置し
ておけば間違いなく我々の脅威になる」

「力づくか…」

センゴクは無言で構える。

「すまんが少年。そいつを守ってやってくれないか？」

「え？」

レイリーが突然俺に声をかけてくる。

「頼む」

「あ、ああ」

やばい。

俺、海賊王の右腕に頼まれちゃったよ。

どちらにしろシャンクスには借りがあるからやるつもりだったけど。

「立てるか、シャンクス」

「ああ…、悪いなテラマキア」

俺の支えを受けながらシャンクスは立つ。

「走れるか？」

「なんとか」

俺たちはこの場から離れるために走り出した。

「逃がすか…！」

センゴクが猛スピードでこちらに近づき、衝撃波を放ってきた。

やば…！

しかし次の瞬間、衝撃波は横からきた圧倒的な圧力によってかき消される！

「やらせはせんよ」

レイリーが剣を振るったようだ。
周りが更地になっている。

今の衝撃波をかき消したのって剣圧か…？
どんな速さで剣振ってただよ。
ありえないだろ…！

「レイリー…！」

センゴクは齒軋りする。

「さあ、早く行くだ」

「助かった！ ありがとう、レイリーのおじさん！」

「すみません、レイリーさん…」

俺たちは駆けていく。

「そこをどけ、レイリー！」

「つれないことを言うな、センゴク」

レイリーは再び剣を構える。

「最近暴れ足りなくて少々運動不足気味だね。少し付き合ってくれないか？」

「今度にしろ…！」

「私は我が儘でね…。今がいいんだ…！！！」

レイリーが一気に距離を詰める！

今、世界最高峰の戦いが始まる――

「んゝ、効いたねエゝ…！」

レイリーにぶつ飛ばされたボルサリーノは数秒間意識がとんでいた。たった一撃でこの威力。

上には上がいるものである。

「ん？あれは…！」

起き上がったボルサリーノが見たのは逃げている子供と《赤髪》の姿だった。

「やたのがみ
八咫鏡」

もちろん見つけたからには逃がすつもりは毛頭ない。
が、突然ボルサリーノの前に地面からせりあがった土の壁が現れて
光を阻んだ。

「やっぱり邪魔をするんだねエ、ガイア」

ボルサリーノが後ろを振り向く。
そこにガイアはいた。

「何故だい？ あの子を守るのは分かるけどもう片方の《赤髪》は
君の嫌いな海賊だよ」

「あいつが助けたということは《赤髪》はいい奴だということだ」

「根拠は？」

「私はあいつを信じている。それだけだ」

「……………君も随分、変わったねエ……………」

「……………かもしれないな」

お互いに構え合う――

「まだやるのか？ 《鷹の目》」

「……………」

頭を掻きながら聞いてくるクザンに対してミホークはただ無言で黒刀を構えるのみ。

「《鷹の目》、お前《赤髪》のために命を落とすつもりか？」

「……私はただ奴との決着を、戦いをしたいだけだ」

周りの空気がはりつめる。

「ゆえに死ぬつもりなど毛頭ない……………！！！！」

ミホークの纏う空気が明らかに変わった。

次の瞬間、ミホークは黒刀を振り抜き、

一閃――

比類なき斬撃が地を薙いだ。

剣圧により地面が決れる。

斬撃が完全に消え去った時、辺りは更地になっていた。

「ふいー、危ないね」

クザンは辛うじて回避していた。

ただその頬からは一筋の血が流れていた。

「こりゃ、とんでもねえもん目覚めさせちまったかな…」

鳴り響く衝撃音。

センゴクとレイリー。

彼らの戦いはそれはすさまじいものだった。

レイリーが剣を振るう度に何かが斬れ、センゴクが衝撃波を放つ度に何かが破壊されていく。

彼らの戦いは周りを確実に更地にしつつあった。

そして彼らの技がぶつかりあうと、世界はその衝撃に震える。

彼らの一撃、一撃は

地を裂き――

海を割り――

天を断つ――

圧倒的な次元の戦いだった。

「ふふ、こんなに胸踊る戦いは久々だ」

「さっさと退け！ レイリー！」

「まだまだこれからだぞ、センゴク……！」

俺はシャンクスに肩を貸しながら走り続けていた。

中將による追撃が恐ろしいが今のところ、それはない。

ていうか俺はそれよりもレイリーとセンゴクの戦いが恐ろしい。

だってあんなに離れてるのに戦いの余波がこっちにまで届くんだぞ
！？

物理法則無視しすぎだろ！

とにかく一刻も早くここから離れないと……。

「あぶねえ！」

俺はシャンクスの言葉に反射的に反応してシャンクスを掴みながら
飛び退いた。

一瞬遅れてさっきまで俺たちがいた場所にマグマの塊が落ちてきた。

「惜しいのう…。もう少しでやれたのに…」

そのマグマがサカズキの形をとっていく。

またサカズキか！

しつこすぎるぞ！

「もうそろそろくたばらんかい…！！！」

「っ……………！！！」

お前がくたばれ！

俺は人獣型になる。

「シャックス、先に行け」

「なっ！ でも…」

「あんたには借りがあるんだ。返させてくれたっていいだろう？」

「だけどあいつは中将…」

「いいから行け！」

「…分かった」

シャックスは走り出そうとする。

「最初に言つとるだろ。絶対に逃がしはせんと…!!」

しかしその前にサカズキが立ち塞がる!

その手はマグマに変わり膨れ上がっている。

くそっ、不味い!

俺はシャンクスとサカズキの間にシャンクスをかばう形で割って入る。

「はっ! わざわざ死にくるとは。二人まとめて消してくれるわ!」

ちくしょう…!

「大噴か…! 何をしておるんじゃあああああああ!!」

叫び声が響き渡る。

戦っていたみんなまでこちらを振り向く。

おいおい、この声って…

「貴様、わしのテラマキアに何をしておる!」

父様だ…!!

助かった!

サカズキが慌てて出しかけた技を止めて膝をつく。

「すみません、もしかしてテラマキアというのはその子供ですか?」

第二十一説：後に島の伝説になる絶叫（後書き）

アンケート待ってます！

第二十二説：戦いの終結（前書き）

みなさんアンケートにご協力いただき有難うございました！
なんと30件以上もの返事がありましてびっくりしました。

こんなにたくさん来るとは思っていなかったので作者は感謝感激です！

改めて有難うございました！

それでは結果発表である今回の話をお楽しみください。

第二十二説：戦いの終結

俺、テラマキアは歴史的瞬間に立ち会っていた。

それは皆の死ぬほど驚いた顔である。

シャンクスやミホークも驚いている。

あのレイリーすら口をあんぐりと開けて驚いている。

特にすごいのが海軍サイド。

皆の驚き顔にさらに真っ青な色が加わった顔だ。

サカズキなんて驚きすぎて鼻水がちよつと垂れている。

例えるならあれだ。

空島のエネルギーがルフィに雷が効かないと分かった時ぐらいだ。

やばい…。超痛快。

吹き出しそうだ…！

俺は必死で笑いをこらえる。

遠くで肩を揺らして笑いをこらえているガイアの姿も目に見えた。

漫画でも見たことがないぞこんなの。

激レアだ！

「何とか言わんか、貴様ら…！」

父様の一喝でみんなが我に返る。

「申し訳ございませんでした…！！！」

センゴクがいつの間にか父様の目の前にまできて土下座した。
あれ？

さっきまであんな遠くにいたのに…。

どんな速さだよ！

瞬間移動でも使えるのか？

「何のために貴様らと呼んだと思っているんじゃ！ 海賊達を殲滅させるためじゃろう！！ それを何でわしの息子を殺そうとしておるんじゃあ！！！」

「返す言葉もございません…！！」

三人の中将たちはなにも言わない。

自分が不用意な発言するよりセンゴクに任せることにしたのだろう。

「拳げ句の果てに我が息子を奴隷呼ばわりなどして…！ 覚悟は出来ているんじやろうな……………ん？」

父様が言葉を止める。

何だ？

何か俺の方めっちゃガン見してるけど。

そしてその表情がだんだん憤怒の形相へと変わり始めた。

え、何！？

何か俺悪いことした！？

ふと俺は父様が俺の体のある一点を見つめていることに気づいた。

その視線を追っていくとそこはサカズキのマグマにより若干表面が削りとられた脇腹、端的に言うところ怪我した脇腹だった。

「貴様ら……………！ 傷つけたのか……………！！ 息子を！！」

「あ、いえ、それは……………！」

サカズキが思わずしまったという顔をする。

父様はそれを見逃さずサカズキを指さし、

「衛兵やれ！ やってしまえ！！」

父様が衛兵たちに銃をかまえさせた！

お、おいおい！

「ちょ、ちょっと待った父様！」

俺は慌てて父様とセンゴクの間に割って入る。

「な、何で邪魔をしおる、テラマキア！？ わしはお前のために今からこのヘドが出る程むかつくツラをしたこいつを殺してやろうと

……………！！」

「さすがに殺すのはやりすぎだと思います、父様」

「何を言っておる！ お前はこの男に殺されかけたんじゃぞ！？」

確かに父様の言うことは的を射ている。

俺だって本音を言えばサカズキはあまり好きじゃない。

原作でも色々ひどいことしていたしね。

だがそれはそれだ。

そもそもこの件に関しては俺が悪いのだ。

「元と言えば私がこんな格好で外を不用意にうろついていたのが悪いのです。こんなどこから見ても下々民の子供を誰が天竜人だと思うのですか？」

「む…」

よし。

何とか怒りは鎮まった。

後ろではセンゴクたちがあんどりと口を開けてこちらを見ていた。

まあ、当たり前か。

何せ自分たちが傷つけた天竜人が何故か庇ってくれてるんだもんな。そんな顔にもなるか。

「…しかしそれなら彼らは下々民に危害を加えたことになるぞ？」

「それは私を傷つけた彼と出会ったのは無法地帯だからです。ただの子供が普通はあんな場所にいるわけないですから海賊か何かと間違われても仕方ありません」

俺はサカズキの方を指さしながら言う。

「それなら頷けるのう……。ん？ テラマキア、お前無法地帯になんかに行っていたのか！」

「あつ…」

やべ！

バラしちゃった…！

「あれほど無法地帯には近づくなと言っておったのに！ 馬鹿者め！」

「ご、ごめんなさい父様！ お説教は後で聞きますから！ あ、痛

い！ 拳骨は痛いです父様！」

俺は何とか父様を宥める。

「と、とにかく彼はただ自分の職務を全うしようとしただけですから彼に非はありません」

「ふむ、事情は分かった……………」

父様はゆつくりと膝をついているサカズキに近づく。

そして銃を懷から取りだして銃口をサカズキの頭に押しつけた！

「父様！？」

「じゃが事情がどうであれこいつがわしの息子であるお前を傷つけたのは事実じゃ」

銃を握る手に力が入る。

「親が子を傷つけられて許せると思うか……………！！」

「ち、力が…！」

サカズキがぐったりとしている。

「どうやら能力者じゃったらしいのう。この銃は銃口が海楼石でできている特注品じゃ。故に今、引き金を引けば貴様は死ぬ」

センゴクは止めようにも天竜人に手をあげるわけには行かないのでただ黙って見守ることしかできない。

ガイアも腕を組んでこちらを見ているだけ。

他の全員も展開の早さについていけず放心状態だ。

「父様！ やめて下さい！」

俺は必死に語りかける。

「……………」

「お願いします……………！」

「……………」

「……………私は父様が人を殺すところを見たくはありません……………！！！」

「……………！！！」

俺の言葉に反応したのか父様が一瞬震えたように見えた。

そしてしばらくしてゆっくりとサカズキにつきつけていた銃口を下ろした。

「……………テラマキアに感謝するんじゃない」

「有難うございます……………！！！」

センゴクが改めて土下座をした。
よかった…。

分かってくれて。

「だからと言ってなにも処罰がないと思わないことじゃ！」

「！！！」

まあ、これ以上は庇いきれないな。

「処罰の内容については後日、話し合いの席を設けて決めるとする」

「……分かりました」

センゴクは深く頷いた。

あ、そうだ。

「もう一つ条件つけてもいいですか？」

全員が一斉にこちらを見る。

「何じゃ、テラマキア。お前が言うならなんでも良いぞ。今回の件の被害者じゃからの」

センゴクたちが固唾を吞んで俺を見る。

センゴクたちからしてみれば恐ろしいだろうな。

さっきまで庇ってくれた奴がいきなり条件とか言い出し始めるんだから。

「じゃあ遠慮なく」

俺はこほんと一つ、咳払いをした。

「海賊《鷹の目》のミホークと《冥王》レイリーと《赤髪》のシャンクス及びその一味をこのシャボンディ諸島にいる間は手を出さないでください」

「テラマキア…！？」

シャンクスやミホーク、レイリーが俺の言葉に過敏に反応した。

「……何故じゃ、テラマキア。何故海賊たちを庇う？」

「……彼らには恩がありますから」

「…そうか。ならいいじゃろう」

そう言う父様はセンゴクたちに向き直り、

「今のテラマキアの言葉、絶対厳守するんじゃぞ」

「分かり……ました…！」

サカズキ悔しそうな顔してるなあ。

「あ、ガイアにも手を出したら駄目ですよ。私の奴隷ですから」

「……もう驚くまいよ」

何かセンゴクが一気に老けた感じがする。
大丈夫かな？

その一部始終を見ていた皆はそれぞれ戦闘体勢を解いていく。

「ガイア、まさか君の言っていたことがまさか本当だとはねエ……」

「私が嘘をつかないことは知っているだろう?。」

「あらら、何か唐突な終わりかただったな」

「フツ……………」

「まさかこの年にもなってこんなに驚くことがあるとは…………。やはり世界はおもしろいな、ロジャー……」

「サカズキ……。もう二度と見境なく攻撃するのはやめてくれ……」

「……………」

「テラマキア、お前天竜人だったのか……」

「ああ、隠してて悪かったな……、シャンクス」

「テラマキアの脇腹の傷を手当てせんと。衛兵、薬箱を!。」

はりつめていた空気が緩んでいく。

ここに戦いは終結した。

本当に――？

途端、俺は嫌な胸騒ぎに襲われた。

何だ。

もう戦いは終わったんだ。

何を今更心配する必要があるんだ？

………待てよ？

何か忘れている気がする。

「どうしたんだ、テラマキア」

シャンクスが俺の様子がおかしいことに気づいて声をかけてきた。

「いや、ちよつとな…」

「ふーん？ でも天竜人にテラマキアみたいな奴がいたなんてビックリしたぞ！」

天竜人――

龍――

「！」

俺は忘れていた奴のいる方向に目を向けた。

瞬間、そこから轟音と共に巨大な青い龍が飛び出した！！

全員あまりに突然のことに咄嗟に反応できない！

龍は猛スピードで一直線に大人間オークション会場に向かい、そのまま入り口に突っ込んだ！！

途端、中から多くの悲鳴が聞こえた。

会場は龍の巨体が突っ込んだことにより崩れかけるが、会場の周りから突然生え出した何本もの大木が会場に絡みついて覆っていき、崩れずに持ちこたえた。

そこで皆がようやく我に返る。

「しまった！ 《神咲》のブルーか！」

「しかし奴はわしの攻撃で黒焦げになったはずだ！」

「とにかくこじ開けて早く中に入らないとねエ」

ボルサリーノが会場に向けて、指先からレーザーを放とうとする。

「駄目だよめろ、ボルサリーノ！」

しかしセンゴクがそれをやめさせてしまった。

「何故止めるんですかい？ センゴクさん」

「今、あの会場はあの絡み付いた大木によって崩れずに済んでいる。もし不用意に攻撃して大木が折れたらその瞬間会場は崩れ落ちる…」

…！」

「……つまり容易に手出しは出来ないと？」

「………そういうことだ」

センゴクは頭を抱えた。

「何か大変なことになってんな」

暢気に言うシャンクス。

「テラマキア？ どこじゃ！」

突然ゾディアックが叫び出した。
皆そちらの方を向く。

「どこにおる！ 返事をするんじや、テラマキア！」

辺りにはテラマキアの姿はなかった。

「まさか…」

ガイアは会場を見る。

オークション会場内。

「ふう…。うまくいったな」

会場の中心にはブルーが立っていた。
その体には一切の傷がない。

「……………！」

会場内にいた貴族や天竜人たちは全員、会場の隅で突然現れた男に驚いている。

「でもまさかお前が来るとはな、クソガキ…！」

ブルーが後ろを振り返りながら言う。

「クソガキ言っくな……！」

そこにテラマキアはいた。

事件は本当の大詰めを迎える――

第二十二説：戦いの終結（後書き）

実はまだ終わらなかったりするんです。

第二十三説：一騎打ち（前書き）

シャボンディ諸島編クライマックス！

第二十三説：一騎打ち

オークション会場内。

「まさかお前が天竜人だとは思わなかったぞクソガキ…！」

「聞いてたのかよ…！」

俺、テラマキアは《神咲》のブルーと周りに天竜人や貴族がいる中で対峙していた。

「……一つ聞きたいことがある」

「何だ？」

「あんた何が目的だ…？ わざわざこんなところに立てこもって何がしたい？」

そう、これが一番の疑問である。

こいつにはもう既に父様を殴った罪があるから逃げられない。だから今更何をしようとも無駄なのだ。

この行為も余計に罪を重ねるだけだ。ますます何がしたいのか分からない。

「……もうどうせ俺は助からないんだろ」

「……まあな」

「だから最後に一花咲かせようと思ってな……。天竜人を皆殺しに

して」

「！！！！！！」

会場に戦慄が走る。

こいつ正気かよ……！

「下々民の分際で何を抜かすえ！」

会場に声が響き渡る。

この声は…

「そんなことをすれば海軍大将が貴様を地の果てまでも追いかけて必ずお前を殺すえ！！」

ロズワードさんか！

傍らには妻らしき天竜人の女性とその子供であるチャルロスとシャルリアが見える。

そんなロズワードさんの声を聞いて会場から口々にそうだ！そうだ！とか死にたいのか！などの声が飛び出してきた。

「だからさつきも言っただろうが。俺は助からない。大将はすぐ外にいるから」

「ならば話は早い。貴様はもうすぐ捕まるえ！」

ロズワードさんが勝ち誇った顔で言う。

「でも期待しない方がいいぞ。あいつらは簡単にここに入ってこれないから」

「なっ…！」

「ここは俺が入ってきた時にもう既に崩れかかっているんだ。それを俺の能力で補強して何とか保ってるみたいなものだ。だから無理に扉をこじ開けようとするとそれだけでペしゃんこだ」

つまり外からの助けは期待できないうえにここからの脱出も無理ということか…。

「でもまあ、いずれ何らかの方法でやってくるとは思うがお前らを皆殺しにするには十分すぎる時間だ。ついでに貴族もやつちやつて奴隷解放しようか？」

会場にいる天竜人や貴族たちの顔は絶望に染まっていくのに対して、その奴隷たちの顔は希望に満ちていく。

「あほかお前。俺がそんなことさせるとでも？」

会場にいる奴等が全員こちらを振り向く。
何か圧巻。

「その声に顔…。もしかテラマキアかえ!？」

「はい、そうですよ。ロズワードさん」

って今更気づいたんかい！

まあ、俺は今、防護服もシャボンもしてないうえにさっきの戦闘で

ボロボロだからね。
仕方ないか。

「やっぱり邪魔をするか……」

「当たり前だろ」

まあ、俺は父様と母様以外の天竜人はあまり好きじゃないんだけど、さすがに皆殺しにされるとなれば黙っているわけにはいかない。

「テラマキアお前、死ぬつもりかえ!？」

ロズワードさんが心配してくれる。

下々民に対しては厳しいけど案外天竜人の中では温厚で優しい人なのだ。

「大丈夫ですよ。ロズワードさん。俺は鍛えてますから」

ロズワードさんがは?という顔をする。
いまいちピンときていないらしい。

「おい、あんた! 皆殺しにするならまず俺と勝負してからにしろ!」

「何………?」

「あの時は邪魔が入って途中で終わってしまったけど今なら存分に闘れるぞ」

「……………」

ダメ元で提案してみる。

「……いいだろう。お前も天竜人だからどのみちやるつもりだったし、確かに俺も決着をつけたい」

お、乗ってきた。

言ってみるもんだな。

「何よりお前は何かむかつく」

「奇遇だな。俺もだよ」

俺は軽く足を屈伸をしながら答える。

「おい、お前ら！ 巻き添え食いたくなかったら舞台上に行け！」

会場にいる奴等がブルーの言葉を聞いて我先にと舞台上に上がる。

「何を……？」

「邪魔は少ない方がいいだろう？」

会場にいる全員が舞台上に上がったのを見るとブルーは

「？五行の木？檻壁」

能力で舞台と客席の間に檻状の壁を作って空間を隔てた。

へえ。

律儀なやつだな。

案外そこまで悪いやつじゃないのかもしれない。

「おい、聞こえるか、テラ！」

その時、会場の入り口の扉、今は扉が壊されて絡み付いた大木で閉ざされているが、そこから声が聞こえてきた。

「その声はもしかしてガイアか？」

「やっぱりそこにいたか、テラ」

「テラマキア、無事か！？」

「ちょ、ちょっとおとうさん！ 押さないでくださいよ！」

どうやら父様が俺の安否を心配してガイアを押しつけて聞いてきたらしい。

「ははっ！ 大丈夫です、父様。安心してください」

「そ、そうか。よかった…」

つくづく心配性な父様だ。

でもだからこそ俺は父様が大好きなんだ。

「中の状況はどうなってる？」

再びガイアが聞いてくる。

「ああ、どうやらブルーは自分が逃げられないことを悟ったせいか
天竜人たちを皆殺しにしたいらしい」

「なっ……!!」

向こうにいるガイアたちが絶句しているのが分かる。

「でも俺が奴と決闘するように持ちかけたから今すぐには皆殺しに
されない」

「……そうか」

「だからお願いがある」

「何だ？」

俺は一息つく。

「助けはいらない。手出し無用でお願いする……!!」

「……!!」

向こうが俺の言葉でざわついているのが分かる。

「ダメじゃ、テラマキア！ わしが認めん！」

当然父様は断固反対してくる。

「分かってください父様！ もし戦っている最中に邪魔が入れば奴
は最優先の目的である天竜人の皆殺しを実行してしまうかもしれない」

いのです!」

「……ッ!」

父様は俺の言葉に思わず詰まってしまつた。

「心配しないでください。俺が勝てば万事解決ですから」

「じゃが…」

「勝てるんだな?」

父様の言葉を遮ってガイアが俺に聞いてきた。

「……当たり前だろ。あんたの弟子だぞ!」

「……そうだな。なら私は弟子の勝利を信じて待つとするか」

「ど、どこへ行くのじゃ、ガイア!」

ガイアが扉のそばから離れていくのが分かった。

「おー、何か大変なことになつてゐたいだな!」

「シャックス!」

「何かよくわかんねえけど勝てよ! 俺たちを助けてくれたお礼の宴、準備して待つてからさ!」

まさかシャックスが応援してくれるとは…。

「……ああ、必ず！」

俺は深く頷いた。

「テラマキア聖殿」

「この声はセンゴクさん？」

「はい、数々のご無礼をしたのにそれを庇っていただき、本当にありがとうございます」

「いやいや、気にしないでいいよ。元といえば俺が悪いんだしね」

「今回の件についてはあなたの危惧していた事態が起こりうる可能性があるので我々海軍が介入することは非常に難しいです。だから恥を承知で頼みます」

センゴクはそこで一拍おいて

「勝ってください……！！」

そして言った。

「分かってますよ」

何か未来の海軍元帥に頼まれちゃったな。
まあ、言われなくても勝つつもりだ。

「テラマキア……！！」

再び父様の声。

「お前本当にやるつもりかの…？」

「はい。必ず勝ちます」

「しかし…」

「父様。私はあなたの息子、テラマキアです」

「！……！」

「息子を信じてください」

「……………」

黙ってしまう父様。

「……………子供にそこまで言われて親が信じないわけにはいかないのう」

「父様……………！」

「必ず勝つんじゃぞ…！ テラマキア！」

「はい…！」

「話は終わったか？」

見るとブルーは既に戦闘準備を終えていた。

何で俺が白虎なんだよ！

普通は天竜人である俺が龍だろうが！

調子のもてんじゃないぞこら！！

俺は大声とともに完全なる私怨を込めた拳をブルーの頬にぶつけてぶっ飛ばした！！

ブルーは轟音とともに客席に突っ込む！

舞台の人々は突然の大声と俺の強さに驚いている。

「あゝ、すっきりした！」

「意味分らない……」

ブルーがガラガラと音をたてながら瓦礫と化した客席から出てくる。

「まあいい。今度こそ草木の肥やしにしてやろう！！」

「絶対泣かす！！」

第二十三説：一騎打ち（後書き）

次回、いよいよ青龍と白虎のガチバトル！

第二十四説：白虎テラマキアVS青龍ブルー（前書き）

青龍と白虎のガチバトル！

これからテスト一週間前だから更新が遅れるかもしれませんがご了承ください。

第二十四説：白虎テラマキアVS青龍ブルー

「ふんっ！」

「鉄塊！」

ブルーが俺の脇腹を殴った瞬間、鈍い音が響く。

「っ！！！」

ブルーは拳の痛みに顔を歪めて一瞬、硬直する。

「指銃！！！」

俺はその隙を見逃さずに奴の脇腹を目掛けて指銃を繰り出す。

「！！！」

しかしブルーは反射的に足で俺の腕を蹴りあげて指銃の軌道をずらした。

「くっ！」

そして後ろに飛び退いて距離をとる。

「させるか！ 嵐脚？地走り？！！！」

俺の神速の蹴りから出た斬撃が地を這ってブルーに迫る！

「ちつ。？五行の木？壁木！」

ブルーの前に突然、木製の壁が地面から競り上がって斬撃を防いだ。

「変な体術使いやがって、クソガキが……！」

「クソガキ言うな！」

俺、テラマキアはオークション会場にてブルーとの激闘を繰り広げていた。

とは言ってもまだお互いに人獣型にすらなっていないが。

でもあいつ人型なのに五行の力を使っていたな……。

俺も頑張れば使えるってことかな？

「……………！！！！」

舞台にいる人々は俺たちの戦いを見て、ただただ驚くばかりである。そりゃそうか。

天竜人の子供が億超えの賞金首と互角以上に渡りあってるんだからな。

天竜人が戦っているというだけでもあり得ないのに。

「…………お前何で天竜人のくせにそんなに強い？」

「あ？ 天竜人が強くて悪いかな？」

「…………お前の言い方はいちいちムカつくな……！」

ブルーが青龍の人獣型へと姿を変える。

いよいよ能力を使ってくるか……。

ならばこちらも…！

俺は人獣型へと姿を変えた。

舞台の方から悲鳴があがる。

あ、そういえば俺が悪魔の実の能力者だってことは何かと不都合だから バラしてはいけないって父様が言ってたな。
なるほど。

今ならその理由がよく分かる。

「ば、化け物…」

「恐ろしや…」

舞台にいる人々は貴族や天竜人に関わらず怯えた目でこちらを見ていた。

「報われないやつだな…」

「同情はいらない」

ブルーは憐れみの感情でこちらを見てきたが、俺はそれを突っぱねた。

「ならば遠慮なくいかせてもらっ」

言い知れない圧迫感が俺を襲った。

肌で分かる。

サカズキ程じゃないけどこいつ強い…！

「？五行の木？青縄あおなわ…！」

瞬間、ブルー周りの地面から草のツルが飛びだして俺に迫る！

「うおっ！」

俺は瞬時その場を飛び退く。

ツルはさっきまで俺のいた場所に勢いよく突き刺さった。

おいおい…。

ツルって突き刺さるもんなのか？

俺はそのまま距離をとろうと後ろへ跳躍する。

が、何かに引っ掛かって遮られた。

「なっ！」

それはツルでできたネットだった。

ゴムのようになやかな性質だったらしく俺が勢いよく引っ掛かったせいでその反動で俺を前へと押しだそうとしている。

そして目の前にはいつの間にかブルーが迫っていた。

「しまっ…！」

勢いよく前へと押し出される俺。

そこにブルーの拳が脇腹へクリーンヒット！！

「！！！！」

前に押し出された勢いが加わった威力は半端ない。

俺はそのままぶっ飛ばされて壁に絡みついた大木に激突した。いつてえ…！！

舞台から再び悲鳴があがる。
ブルーはさらに追撃する。

「？五行の木？大木掌！！」
たいぼくしょう

地面から巨大な大木が俺を目掛けて突き出してくる。

俺はかろうじてそれかわす。

しかし大木の側面からいきなり枝が勢いよく生えてきて俺に突き刺さった！！

「っ！！」

あ、り、か、そ、ん、な、の、！、？

「なんて恐ろしい光景……！」

「化け物同士で相打ちしてくれないかえ……？」

そんな声が舞台から口々に飛び出す。

[illegible]

突然大声が響き渡った。

「さっきから聞いていれば好き勝手に言いよって……」

ロ、ロズワードさん？

「あの子は、テラマキアは私たちのために戦ってくれておるんだえ

「!!」

「化け物だろうと何だろう関係ないえ!!」

「侮辱する奴はこの私が許さんえ!!」

舞台から飛んでいた声はピタリと止んだ。

「テラマキア!! そんな下々の者に負けるんじゃないえ!!」

……頼もしい人だな。

俺は立ち上がる。

ありがとう、ロズワードさん。

「がんばれー!!」

「勝ってくれ!」

そのかわりに応援の声が聞こえてきた。

「まさか天竜人のくせにこんなことがあるとはな……」

「あるさ。俺たち天竜人だって人間さ」

「そりゃ初耳だ……!」

ブルーの近くの地面からツルが飛びだして俺に巻きついた。
そしてツルを引っ張って俺を引き寄せる。

「おわっ!」

そしてそのままブルーは回転する。

どうやら尻尾で俺をなぎ払うつもりらしい。

「？五行の金？物体硬質化」

俺はツルを硬質化させる。

ツルはそのまま形を保ったために俺は尻尾が当たる直前で急停止する。

「なっ！」

ブルーは攻撃する目標を失って思わず体勢を崩す。

俺はすかさず硬質化を解いて巻きついたツルをちぎった。

「嵐脚？白爪？！！」

そしてそのまま至近距離で白虎の鋭い爪から強力な斬撃を繰り出す。断然かわせる道理はない。

「ぐおっ…！」

肉の切れる小気味良い音。

ブルーは斬られた胸を押さえながら後ろに飛び退いた。

舞台から歓声が聞こえた。

「いつまでもやられてると思うなよ…！」

「ちっ、少々なめすぎていたか。だが…」

ブルーは胸を押さえていた手を離れた。

「!!!!??」

おいおい、嘘だろ…！

何でいまさっきつけた傷がもうふさがりつつあるんだよ!?

「五行の木の真髄は？成長？細胞の活性化だ」

「……なるほど。つまり細胞を活性化させて驚異的なスピードで傷を治癒させているというわけだ。あのときマグマを食らって黒焦げだったのに立ち直ったのはそういうわけか…」

「そうだ。だからお前の勝つ確率はゼロだ、クソガキ…!」

「あんたが勝手に俺の勝ち負けを決めるな!」

俺は剃で一気に距離を詰める。

「？五行の金？右腕硬質化」

「？五行の木？青竜刀」

「指銃？白弾?!」

「はっ!」

ブルーの出した木製の鋭い薙刀は俺の肩に突き刺さり、俺の能力で強化した指銃はブルーの脇腹に突き刺さる。

「……っ!!」

「くっ…!!」

お互い一步も引かない。

「嵐脚?白迅?!」

「?五行の木?青竜槍!」

袈裟懸けに繰り出した蹴りの斬撃でブルーの胸に深い切り傷を負わせるが代わりに木製の槍で左足の脛をを貫かれた。

「くそっ…!!」

足をやられて体勢を崩してしまう。
相手はその隙を見逃すわけではない。

「?五行の木?青竜刀乱舞!!」

地面から次々と木製の薙刀が飛びだして俺に突き刺さる!!

舞台から甲高い悲鳴が聞こえた。

やばい…!!

痛みで意識がとびそうだ…!!
だがここで諦めたら奴に与えたダメージが全て無駄になる!

俺は残った右足でもいつきり踏み込んでブルーに突っ込む。

「！！！」

「？五行の金？両腕硬質化！」
食らえ！！

「指銃？白砲？！！！」

残った力を振り絞って俺の最強の技を繰り出す。

「！！！」

ブルーは突然の不意打ちに反応できず、モロに食らってぶっ飛んだ！
そして壁に激突する。

「やった……か……！！！」

瞬間、横から突然飛び出してきた大木に俺は弾き飛ばされた。
そして舞台と客席を隔てている木製の檻状の壁に激突する。

「テラマキア！」

ロズワードさんの声が聞こえた。

何とか立ち上がる。

くそ……！

さすがに体がもう……！！！！

どこからともなく出てきたツルに俺は巻きつかれて拘束された。

「だから言っただろうが。お前の勝つ確率はゼロだって」

ブルーがゆっくり歩みよってくる。

その胸の傷は完全にふさがっていた。

「まあ、よくがんばった方だ。ゆっくり休め」

「貴様テラマキアを離せ!!」

「?五行の木?大木封印」

地面から出た四つの大木が俺を四方から押し潰すように当たる!

「がはっ……!!」

あばらが……!

「破」

ブルーがそう言い放った瞬間、四つの大木から無数の枝が鋭く生え出して俺に突き刺さった。

「テラマキアアアアアアア!!」

ロズワードさんの絶叫が聞こえたような気がした。

第二十四説：白虎テラマキアVS青龍ブルー（後書き）

敗北してしまったテラマキア。
どうなる！？

第二十五説：戦う理由（前書き）

更新が遅れてすみません！

テスト前なものでなかなか執筆ができません。

来週の土曜日にはテストが終了するので前の更新速度に戻したいと思います。

第二十五説：戦う理由

オークション会場内。

テラマキアとブルーの死闘により所々が壊れているその場所はある負の感情で満たされていた。

それは絶望。

舞台上にいる人々は物言わぬ骸と化したテラマキアを見て誰もがその感情を露にしていた。

それは例えるなら暗闇の中に見えた一筋の光明がさらに真つ黒な闇に塗り潰されたようなものである。

対して奴隷たちは心の内から沸き上がってくる笑みを抑えるのに必死だった。

自分達が奴隷から解放されるのはもちろんだがそれ以上に天竜人がボコボコにやられたのがいい気味だったのだ。

彼らはいずれも全員天竜人に憎悪を抱いていたから例えそれがまだ子供だったとしても関係なかった。

子供は子供でも天竜人なのだから。

「ご苦労様つと……」

自分がズタズタにしたテラマキアを見ながらブルーは言った。

「許さんぞえ……！！ 貴様！」

そんなブルーをロスワードは怒りを込めて睨み付ける。

「おいおい、お前立場わかってんのか？」

ブルーは首をコキコキと鳴らす。

「お前これから死ぬんだぜ？」

ブルーが放った濃密で圧倒的な殺気。

「っ！！」

それを受けてロズワードどころか会場にいる人々全員が怯み、顔が恐怖に染まる。

「そうだな…。まずは最初に俺に上等決めてくれたお前だな」

ブルーはロズワードを指差した。

「俺の理不尽な人生の最後の八つ当たりってな…」

「大丈夫かのう……？ テラマキアは……」

「安心してください。テラは強いですから」

オークション会場から少し離れた場所。

そこにゾディアックとガイア、冥王レイリーに海軍大将センゴクと三人の中将たちがいた。

シャンクスは宴の準備で、ミホークはどこかに行ってしまったてここにはいない。

「わははは……。まさかお前の目の前でのんびりと酒が飲めるとは思わなかったぞ、センゴク」

「……………」

不機嫌なセンゴクを前にしてレイリーはどこから持ってきたのか酒瓶を片手に上機嫌だ。

「ほら、お前もそんなムスツとしてないで一緒にどうだ？」

「いらん！」

センゴクが不機嫌になるのも当たり前である。

何せ今は天竜人であるテラマキアが戦っている最中なのだ。

勝てばいいのだが負ければ天竜人の皆殺しは必至。

大将と中将三人もいながらこんな事態を引き起こしてしまったこと自体も十分失態なのにさらに天竜人の皆殺しまでされてしまえば海軍はどうなるか……………。

考えたくもないだろう。

さつきからこのことがセンゴクの頭を占めていて気が気でないのだ。

「すまん、センゴク。わしがあの時完全に消しておれば……………」

「今さらグチグチ言ったって仕方ないよオ、サカズキ」

センゴクに詫びるサカズキを諫めるボルサリーノ。

「そうだぞ。なってしまったものは変えられない。それに責任は
前一人ではなく、油断していた我々全員にあるのだからな」

ふと、気づく。

「クザンはどこだ？」

「むっ、そういえば…」

「さっきまでここにいたのにねエ」

辺りを見回してみる。
そして見つけた。

「おっ、この酒うまいねレイリーさん」

「ほう、分かるか。なかなかの酒通だな」

「クザアアン！！！！！！」

センゴクの怒声が響いた。

「暢気な奴等め…。海軍に限っては恩人であるテラマキアが戦っておるのになんだあの態度は！ 少しくらい心配せんのか！」

「まあまあ、落ち着いてください。おとうさん」

センゴクたちを見て憤慨するゾディアックをガイアは宥める。

「ガイア、本当にテラマキアは大丈夫なんじゃな？」

「はい」

「……………わしに気をつかわんでいい。包み隠さず申せ」

「……………」

しばしの沈黙が流れる。

「……………正直なところを言うと分かりません」

「そうか…」

「客観的に見ればむしろ負ける確率が高いです」

「……！」

ゾディアックは非難と憎しみを込めてガイアを睨み付けた。

「でも私はあいつが勝つと信じています」

「…………根拠は？」

「あいつが、テラが勝つと言ったからです」

「……………」

ゾディアックはその言葉を聞いて顔を緩めてフツと笑った。

「……………わしも信じると言ってしまったし、どちらにしろ後には引けんしのう」

そして二人してオークション会場を向く。

「絶対勝てよ、テラ」

視界が暗い――

俺はいたい――

ぼんやりとした意識の中、俺は順を追って思い出していく。

そうだ――

俺は戦っていた――

《神咲》のブルーと――

何かを守るために――

たぶん父様と母様だろう――

だって俺が強くなったのはそのためなのだから――

ぼんやりとした意識が徐々に覚醒する。

それと共に猛烈な痛みまではつきりしてきた。

そういえば俺はとどめを刺されたんだっけ――？

無理に動いて激痛を感じないようにそつと体を見る。

俺を押し潰すかのようにしている大木から無数の枝が生えて俺に突き刺さっていた。

しかし実際突き刺さっていたのは十数本である。

その中でもしつかり刺さっているのは僅か数本だった。

殆どの枝は俺に刺さる直前でポツキリと折れていた。

恐らく攻撃を受ける瞬間、無意識に能力を発動して全身を硬質化させたのだろう。

しかしそれは不完全なものだろう。

もし完全であれば一本も刺さるはずがない。

今まで自身の体で硬質化できたのは両腕だけだったのだ。

いかに命の危険が迫ってできなかった全身の硬質化ができてても不完全なのは当たり前だ。

しかし結局動くことはできない。
枝が刺さった云々の前に大木に四方から押さえつけられて全く身動きがとれないのだから。

不意に強烈な殺気を感じた。

傷を痛めないようにゆっくりと顔をあげてそちらを見る。

そこにはたぶん殺気の主であるブルーと木製で檻状の壁を隔てて沢山の貴族や天竜人たちがいた。

天竜人――？

そうだ、思い出した――

俺は天竜人の皆殺しを防ぐためにブルーと戦っていたんだ――

――あれ？

どうして俺は天竜人なんかのために戦っているんだ――？

俺は父様と母様をマリージョア襲撃事件から守るために強くなったんだ――

それがどうしてほかの關係ないクズの天竜人たちを守るために深手を負うほど必死になっていたんだ――？

彼らには助ける義理も何もない――

むしろこのまま皆殺しにされたほうが世の中のためじゃないか――
――？

だって彼らは父様や母様と違って平気で人を殺す――

自分に触れただけでも殺す――

目の前を横切っただけでも殺す――

意見を少し述べても殺す――

拳げ句の果てにムカついたから殺す――

権力を笠に着て傍若無人で傲岸不遜で暴虐の限りを尽くす――

世界の害悪――

冷静に考えると彼らを守る必要なんてこれっぽっちもないのだ――

うん、そうだ――

皆殺しにされるべきなのだ――

それが世界のため――

「うわああああああん!!」

突然、子供の泣き声が聞こえた。

「わああああああん!!」

それはロズワードの妻に抱かれたチャルロスだった。

「ああああああん!!」

他のあちこちからも子供の泣き声が聞こえてくる。
さっきのブルーが放った殺気の影響だろう。

ああ――

何て馬鹿なことを考えていたんだろう――

天竜人の子供たちの泣き声――

それは普通の子供たちと変わらない――

天竜人だからといって関係ない――

嬉しいことや楽しいことがあれば笑う――

悲しいことや怖いことがあれば泣く――

優しくて親切してくれる人もいる――

残酷で悪い人もいる――

何も人と変わらない――

天竜人が悪なわけじゃないんだ――

どうしてこんな大切なことを忘れていたんだろう――

でも二度と忘れない――

体の奥底から何かが沸き上がってくる。

だから戦おう――

彼らの未来を――

沸き上がる何かは俺を満たした。

守るために――

そして俺はそれを解き放った。

俺が放った殺気のせいで会場にいたガキどもが一斉に泣き出しやがった。

「わああああああん!!」

煩いっただらありやしない。

俺に上等かましてくれたこいつは後回しにしてガキからやるか？

瞬間、すさまじい轟音と共に衝撃波が後ろから俺を襲った!!!

「!!!!!!」

突然のことで受け身もとれずに壁に激突する!

いったい何が……?

「なっ……!!」

俺は目を疑った。

会場内に強烈な風が吹き荒れているのだ。

もはやそれは暴風の竜巻。

その竜巻は俺が天竜人のクソガキにとどめを刺した大木をバラバラにして巻き上げていた。

「……………もう迷わないさ」

そしてその中心にあの忌々しいクソガキが立っていた。

「さて、一回戦を始めようぜ」

第二十五説：戦う理由（後書き）

次回、いよいよ決着！

第二十六説：長い一日の終わり（前書き）

みなさんお久しぶりです！

ようやくテストが終わった！！

執筆できる！

とはいってもひさしぶりに書いたらちよつと手間どっちゃった。

これからまた徐々に慣らしていこうと思います。

それでは長らくお待たせいたしましたシャボンディ諸島編の完結話をお楽しみください。

第二十六説：長い一日の終わり

会場内に暴君のように荒れ狂う竜巻。

その勢いは全く衰えるところを見せない。

その中心には止めを刺されたはずの俺は人獣型になって超然として立っていた。

「テ、テラマキアアアアア！」

無事である俺の姿を見てロズワードさんが感情が極まったのか涙声で俺の名を呼んだ。

ほかの人たちも全員、俺を見て呆気にとられている。

俺をというより俺に渦巻く竜巻を見てだろうが。

しかしネコネコの実モデル？白虎？に風を操る能力があるのは分かっていたけどまさかここまでとは思わなかった。

むしろ五行の金よりこっちの方がメインなんじゃないのか？

「クソガキ、お前まだ動けたのか……！」

ブルーがそれだけで虫を殺せそうな程の威圧を込めて俺を睨んでいた。

しかしその言葉には称賛の響きが含まれているように聞こえた。

「あのまま寝てればいいものを……」

ブルーは再び人獣型になる。

「いいだろう。完膚なきまでに叩き潰して草木の肥やしにしてやる」

「残念だけど、」

俺は荒れ狂っていた風を自分の周りに収束させた。
端から見たら風がなくなっただよに見えているはずだ。

「あんたは俺に勝てないよ」

それは直感だった。

さっきはあんなにボロボロにされて負けたのに何故か今は不思議と
負ける気がしなかった。

「へえ……。ずいぶん自信だな。ついさっき俺にやられたのにもう
忘れたのか？」

奴の周りの地面に亀裂が走っている。

恐らくあそこからあの大木が出るのだろう。

わざわざ待つてやる必要もない。

こちらから先手を仕掛けてやろう。

腰を落として体勢を整えてから俺は跳んだ。

「!!!!??」

次の瞬間、俺は驚異的なスピードで一瞬にしてブルーに近づき、そ
の顔面に膝蹴りをぶちこんでやった。

予想もしなかった攻撃にブルーはロクに防御もとれず、吹っ飛んだ！

速さはそのまま攻撃の重さに比例する。

驚異的なスピードは驚異的な威力を生み出す。

「っ……………！！」

吹っ飛んだブルーは壁に激突した。

大木に補強されたおかげで今までどんな衝撃を受けてもビクともしなかった会場がミシリと音をたてて揺れる。

「……………てめえ、本当にさっきのクソガキか……………！！」

疑うのも無理はない。

死に損ないだった奴がありえない速度で動いたのだから。

タネ明かしするとさっきのは足の裏にあの風を圧縮させてから解き放ち、その反動によりあんなスピードで動けたのである。

「くそっ！　調子に乗るな！」

ブルーの声と共に地面から次々と大木が突きだして俺を押し潰そうと迫ってくる！

「ふう……………」

俺は心を落ち着かせて神経を研ぎ澄ます。

「紙重」

そして大木の一つが俺に当たる瞬間、反射的にその大木の上に飛び乗った！

「なっ！？」

そしてそのままブルーを目指して大木の上を走り出す。

「ちいつ！」

ブルーが俺に手をかざすと前から両横から大木が俺を狙って突きだしてくる。

しかしそれら全てを紙一重でかわしつつ、俺は着実にブルーへと近づいていった。

「させるか！」

後一步のところで俺にツルが絡みつこうと地面から飛び出してくる。

「邪魔だ！」

俺はツルが絡みつく前にあの風を操ってツルをバラバラに斬り捨てた。

「くそがつー！」

ブルーはツルを斬られるやいなや自分の前に何本もの大木を作り出して俺の攻撃に対して防御姿勢をとる。

「？五行の金？右腕硬質化」

俺は能力で腕を硬質化させるのと同時に指先に風を圧縮させる。

「指銃？圧風白弾？！！！」

俺の指銃はブルーが防御のために出した大木を全て叩き折り、ブル

ーへと貫通した！！

「！！！！！！」

大木のせいで威力が弱まってぶっ飛びこそしなかったが、ブルーは致命傷を受けていた。

ブルーは傷を癒そうとして後ろに跳び、距離をとろうとする。しかしそんなことをみすみす見逃すわけにはいかない。

「？五行の金？両腕硬質化」

俺は硬質化した両腕の指先にさっきと同じように風を圧縮してさらに足の裏にも圧縮させた。

ブルーの方を見る。

そして足の裏に圧縮させた風を解き放ち、一直線へとブルーに向かって驚異的な速さで跳んだ。

「！？」

ブルーは慌ててかわそうとするが間に合わない。

「指銃？旋風白砲？！！」

「！！！！！！」

圧倒的で強烈な一撃。

指先に骨が折れた感触が伝わってくる。

そしてブルーは為す術もなくぶっ飛んで地面へとめり込んだ。

俺は地面へと着地する。
ブルーがめり込んだ地面からは何の動きもなかった。
舞台から歓声上がる。

「やったぞ！」

「助かったんだ！」

終わったのか……………？

「グオオオオオオッ！！！」

瞬間、雄叫びと共にブルーがめり込んだ地面から青龍が飛び出してきた！

舞台の歓声が悲鳴に変わる。

「ちっ、…………俺ってやつは…………最後まで…………ついてねえ…………」

しかし青龍となったブルーの体は致命傷だらけで治癒が追いつかず満身創痍だった。

「俺の治癒もこんな傷じゃすぐには治らねえ…………」

そんなブルーの周りから数えるのも馬鹿らしい程の大木が突きだしてこちらを向く。

大木はいずれも先が鋭く尖っている。

「だがこの勝負だけは負けられねえ…………！」

ブルーもとぐろを巻いてこちらを睨み付けてくる。
どうやらこれで決着をつけるつもりらしい。

「……………？五行の金？両腕硬質化」

俺は両腕を硬質化してから指先に風を圧縮し、腰を落として迎え撃つ体勢をとる。

「終わりだ、クソガキ…！」

「クソガキ言っ…！」

ブルーは若干溜めてから、

「？五行の木？千青龍槍…！」

そして大量の大木の槍と共に一斉に俺を目掛けて突っ込んできた！

「指銃？旋風白砲？…！」

それを現時点最強の技で迎え撃つ！

そして激突——！！！！

すさまじい衝撃波が会場を揺らす！！

いくつもの大木の槍と青龍の突進。

白虎の能力と圧縮した風の全力の突き。

その威力は拮抗していた。

しかし徐々に俺は押し負けつつあった。

「くっそ！」

「おおおお！」

本来なら拮抗するはずの力。

故に生まれたその差は俺に無いもの、積んできた経験の違いだった。

「ああああああ！」

「ジュン……！」

さらに劣勢になる。

もう駄目だ……！

俺の負け

「勝つんだえ、テラマキアアアアアアアアア！！！！」

!!!

「負けるなあああ！！」

「いけえええ！」

そうだ。

俺は守るって誓ったじゃないか！

挫けてたまるか！

もう揺るがない！！

勝てる、勝てないじゃない！！！！

……勝つんだ！！！！！！

「っ……！！」

俺は刺さっている右手の指を抜いて瞬時、風を圧縮してもう一度刺した！

「！！」

次に左手も同じように抜いて瞬時、風を圧縮してもう一度刺す！

「！！！！」

さらに右手、左手と交互に同じことを繰り返してその間隔を狭くしていく。

「うっ おおおおおお！！！！」

猛烈な指銃の嵐！

「おおおおおおおお！！！！！！」

ありつたけの力を込めて叩き込む！！

叩き込む！！！！！！

叩き込む！！！！！！！！

「ああああああ！！！！！！！！」

もはやブルーを完全に押し返している！！！！

「ぶっ飛べえええええ!!」

そして俺はとどめの一撃を放つ！

「指銃？烈風白蓮？！！！！」

「さっきからひどく揺れておるが大丈夫かのう……？」

「あいつは必ず勝ちますよ」

オークション会場の外。

ひどく揺れだした会場にガイアやゾディアック、レイリーにセングク、三人の中将たちは全員、注目していた。

そんな中、一際会場が大きく揺れたかと思うと突然、風の竜巻と共に巨大な龍が会場の入り口辺りの部分をぶち破ってぶっ飛んできた！！！！

「！！！！！！」

龍は地面に落ちる間にシュルシュルと縮んでいつて人の形となった。

「こいつは《神咲》のブルー……!!」

センゴクはその人を見て言った。

「つまりテラマキアが勝ったということじゃな………?」

「そういうことです」

ガイアからその答えを聞いてゾディアックの顔は徐々に笑顔になっていく。

「でもあんな出方したら会場が崩れちゃうんじゃないのかい……?」

ボルサリーノの言葉に一斉に会場の方を振り向く。
しかし会場は崩れてはいなかった――

半壊したオークション会場内。

俺は人獣型のままで膝について床に手を当てていた。
そう。

会場が崩れないのは俺が能力を使って硬質化して会場の形を?保つて?いたからである。

ブルーが入り口をぶち破ってぶっ飛んでいった瞬間、床に手をついて能力を発動させたのだ。

とは言うものもはや俺の体力も限界だ。

早く逃げてもらわないと…………。

「全員、ここから逃げて！」

しかし全員、戦いが終わって気が抜けたのか放心している。

「早く！」

俺の怒声によりやく反応して動き出す。

幸い木製の檻の壁は俺とブルーの技のぶつかった時の衝撃波で壊れていたので逃げるのには手間取ることにはなかった。

「ありがとう！」

「助かりました」

「感謝するえ！」

貴族や天竜人たちが俺のそばを通りすぎる時に口々にお礼を言うていく。

「テラマキア、お前も早く逃げるえ！」

ロズワードさんも声をかけてくれた。

「…………すみません、ロズワードさん。後で俺も行きますんで…………先に行ってください」

でも俺はまだ行けない。

俺が行ってしまえば会場が崩れてしまう。
俺が行くのは全員が出てからだ。

「しかし……」

「大丈夫です。先に行ってください……！」

「……分かったえ。でも必ず逃げるんだえ！ 色々とお礼をしたい
んだから」

そう言ってロズワードさんは行ってくれた。

さて、全員が逃げるまでもってくれよ、俺の体。

オークション会場の外では逃げてきた貴族や天竜人で溢れかえっていた。

「役立たずの海軍め！」

「この事態をどう責任をとるえ！」

「ですからその件については……………」

海軍サイドのセンゴクたちは天竜人や貴族のクレームの対応に追われていた。

それを酒を片手に楽しそうに見る《冥王》と呼ばれた人物が一人。

「テラマキア！ どこにいるんじゃない！」

「テラ！」

ゾディアックとガイアはテラマキアの姿を探していた。

「チャルロス……………」

そんな中、慌てた声上がる。

「チャルロス！ どこにいるんだえ！」

再び半壊したオークション会場内。

もはや俺の体力はなかった。

能力でこの会場を保つのも限界だった。

「全員、無事に逃げきれたか……」

不意に子供の泣き声が聞こえてきた。
その方向を見る。

「チャルロス……！」

それはロズワードさんの息子、チャルロスだった。
どうやら逃げる途中でこけたらしい。
膝に擦り傷があった。

母親とは逃げる時に人波ではぐれてしまったのだろうか。
逃がしてやりたい。
だけでもう体が……。

「こうなったら……」

俺は人型に戻って能力を解除し、最後の力で剃を使ってチャルロスに近づき、庇うように上に覆い被さった。

能力が解除されたことにより会場が一気に崩れだす！

俺は守るって決めたんだ！

命を懸けてでも守ってやる。

俺は覚悟を決めて目を瞑った。

「……………」

——不意に体に何かが巻きついたかと思つと突然引つ張られて浮遊感を感じた。

すぐさま何かが崩れ落ちる音がした。

そして何か弾力性のあるものの上に落ちた。
そつと目を開ける。

「あ……」

俺とチャルロスはツルのネットの上にいた。
そしてそこは会場の外だった。
こんなことができる奴は一人しかいない。

「どうして助けた、ブルー……！」

目の前には大の字になって寝ているブルーの姿があった。

「……勝負にお前は勝って俺は負けた。勝者が損をするのは……
……間違ってるだろ……？」

「……何というか、

「あんた本当に律儀な奴だな……」

やっぱりこいつ悪い奴じゃない。

「チャルロス！」

ロズワードさんが走り寄ってきてチャルロスを抱き締めた。

「よかったえ……！ 本当に感謝するえ、テラマキア！」

いや、実質助けたのは俺じゃないんだけどね。

「テラマキアアアアアアアアアア！」

「わっ！」

突然、横から誰かに抱きつかれる。

「おお…、こんなに傷だらけになって……！」

「父様！」

父様はくしゃくしゃに顔を歪めながら涙を流していた。

「心配、かけました……」

「まったくじゃ！ 無茶ばかりしおってからに……」

まあ、でも大切なことを思い出せたし、よかった。

「テラ」

「ガイア……」

ガイアがいつの間にか俺のそばに立っていた。

「俺、勝ったぞ」

「当たり前だ」

俺はフツと笑う。

「そう、だな……」

これにてシャボンディ諸島の長い一日は幕を閉じた――

――数日後。

家の屋敷にて。

「さっさと傷を治せ、クソガキ。お前と勝負が出来ねえじゃねえか
」！

「どうしてわしがこんなことに……」

「まあまあ、サカズキ。これからお互い奴隷になった海軍本部中將
として仲良くしようじゃないか」

「……………どうしてこうなった？」

第二十六説：長い一日の終わり（後書き）

なぜこんなことになったのか。
詳しいことは次回です。

第二十七説：事件の後日談（前書き）

テストが返ってきたぜ！

かなりやばい点数だった……。

でもめげずに頑張る！

第二十七説：事件の後日談

あのシャボンディ諸島を揺るがした事件から数日経った。

俺の傷も大体は癒えてきた。

ていうかあんなに大怪我したのにたった数日で歩けるまでに回復するとか俺も本当に化け物染みてきたな。

「ふう……、気持ちいい……」

そして俺は今、屋敷の庭の芝生の上で仰向けに寝転がって日向ぼっこをしている。

どこまでも澄みきった青い空。

たびたび吹くそよ風。

……………平和だ。

「ぎやはははははは！！ マジかよ、おっさん！ クソガキに手を出して奴隷とか超ウケる！」

「灰にするぞ、貴様ア！！」

「待て待て待て！！ サカズキ、マグマを出すな！ 芝生が燃えるから！ テラも寝てないで止めてくれ！」

前言撤回。

家は全くもって平和じゃない。

「離せ、ガイア！ わしの正義が奴を消せと言うつるのだ！」

「お願いだから落ち着いてくれ！ おい、ちょっと何だその右手のマグマの大きさは！？ この辺り一帯を消す気かお前は！」

「ぎゃはははは、ごほつごほつ、ははははは、ごほつ……！」

笑いすぎてむせてるし。

「はあ………」

どうしてここにブルーとサカズキがいるのか。
それはあの事件が終息を迎えた直後に遡る。

「やばい、マジで疲れた………」

「テラマキアアアー！」

「父様、泣き止んでください」

「傷だらけだな、テラ」

「ガイアも見えてないで父様を宥めてくれよ…」

俺とブルーの戦いで全壊したオークション会場前。

俺は歩くことができないほど消耗していたので病院への搬送待ちだった。

ガイアが連絡してくれて患者が天竜人と聞いてすぐに行かせていただきます！　と言っていたらしいがそれでもここに来るまでに15分以上はかかるらしい。

まあ、ここ無法地帯だしね。

「てか父様、いいかげん本当に泣き止んでください」

「う、うむ。すまん、テラマキア」

ふう。

ようやく泣き止んでくれた。

まあそれだけ心配させたということなのだろう。

確かに無理しすぎだな。

「さて、わしのかわいいテラマキアにここまで怪我をさせたこいつはどうしてくれよう?」

そう言っただけで父様が目の前に大の字になって寝ているブルーを睨み付ける。

ブルーはどうやら力尽きて気絶してるみたいだから父様の言葉に反

応しない。

ていうか父様かわいいとか言わないでください。
凄く恥ずかしいです…。

「ふふふ、テラマキアに手を出した罪は重いぞ…。死ぬより苦しい
目にあわせてやろう」

怖っ！

父様からどす黒いオーラが出てる！
何か口調も変わっている気がするし！

「覚悟はいいか……？」

あ、ちよつと！

やばい、やばい！

「ちよつと待ってください、父様」

「何じゃ、テラマキア…？ 今、こいつにどうやって絶望を与えようか考えていたところなんじゃが？」

あれ？

何かデジャブを感じる。

まあいいや。

「こいつを俺の奴隷にしたいです！」

「なっ！？」

分かるんだ。

こいつは根は悪いやつじゃない。

助けてくれた恩もあるし、死なせるのは少し酷いかもしれない。
父様は少し驚いたが、すぐにしかめっ面になる。

「奴隷にするのは構わんが、テラ。お前は奴隷だからといって何か酷い事をするわけではないだろう？」

「いえいえ、ちゃんとそれなりの報いは受けさせるつもりですよ」

できるだけ凶悪そうな笑みを浮かべて言うが、もちろん嘘だ。
奴隷にした後は隙をみて逃がすつもりだ。

「本当かのう？」

「本当です」

じっと父様の目を見つめる。

「……………分かった。奴隷にするに当たっての話はわしがつけておく」

「ありがとうございます！ 父様」

ふう、よかった。

でもなんだかんだ言っても父様は真剣に頼めば最終的には俺の願いを聞いてくれる。
いい父親だ。

「はあ……………」

「ん？ ガイアはこいつを奴隷にすることについては何も言わないのか？」

「………… お前が天竜人の枠から外れてるのは知ってるから何も言わないよ」

「どうやらガイアは俺のブルーを奴隷にすることの真意に気づいてい
るようだ。」

さては見聞色の覇気だな？

「やあ、大丈夫かい？」

「ん？」

うおっ！レ、レイリーのおっさんだ。

「ほう、君はテラマキアが恩があるから庇った海賊じゃな？ 息子
が世話になったのう。感謝する」

レイリーのおっさんは父様の言葉に驚いた表情をしたがすぐに顔に
笑みを浮かべた。

「なるほど。この親にしてこの子ありということか」

「な、何か用ですか？ レイリーさん」

「はっはっは！ 今さら畏まらなくてもいいさ。君がシャンクスを
連れて逃げる時に私のことを呼んだだろう？ その名で構わん！」

………… 気さくな人だ。

「じ、じゃあレイリーのおっさん。一体どうしたんだ？」

「うむ。シャンクスから伝言を頼まれていてな」

「伝言？」

「ああ。お礼の宴をする場所と日時さ」

そして俺はレイリーのおっさんから宴の日時と場所を聞いた。

「その頃なら傷も癒えているだろう？」

「ああ、たぶんな」

イマイチ自信がないが、まあどうにかなるだろう。

「それから個人的に礼を言わせてもらおう」

「え？」

「ありがとう。おかげで助かった」

「あ、ああ」

海賊王の右腕にお礼をいわれちゃったよ。
何かすごい恐縮するな。

不意に辺りが騒がしくなった。
何だ？

「海軍は能無しの集団かえ！」

「誠に申し訳ございません……！」

どうやらセンゴクたちが天竜人たちに詰め寄られてるみたいだ。
まあ、あんなことがあったのにも関わらず、海軍全く役に立たなかったもんな。

天竜人たちに何か言われるのは当たり前か。

「海軍には罰が必要だえ！」

「そうだえ！　こんな能無し軍団には罰がいるえ！」

「！！！」

あれ？

何か雲行きが怪しくなってきたぞ？

「そうだな……。このムカツク顔をしたこいつに決めたえ！」

そう言っただ竜人の一人がサカズキを指さした。

「お前を処刑するえ」

「なっ！？」

はあ！？

なに言ってるんだよ！

これじゃ俺が許した意味がないじゃないか！

「どうかお情けを……！」

センゴクが土下座をして許しを請う。

「ふんっ、いやだえ」

当たり前のように一蹴する天竜人。

そして土下座しているセンゴクの踏みつけた。
そのままぐりぐりと踏みにじる。

「能無しの言うことなんか聞く価値もないえ！」

俺は――

俺はこんなのが見たくて彼らを助けたんじゃない！

天竜人たちがサカズキを見る。

「死んで償え！」

「処刑！」

「処刑……！」

「処刑……！」

「処刑……！」

まあ、そんなわけで勢いでサカズキを奴隷にしてしまった。
父様はかなり渋い顔をしていたけど。

天竜人たちは俺がそう言うならいいだろうということで引き下がってくれた。

俺は彼らにとって命の恩人にして英雄だからだろう。

それに奴隷と言えば死ぬより辛いことだと彼らの認識ではなっているはずだからな。

世界政府も条件つきで認めてくれた。

その条件は緊急時においては秘密裏に召集するというもの。

だから普段は普通の奴隷と変わらないのだ。

恐らく世界政府は失うよりかはマシと考えたのだろう。

あのまま俺が奴隷にするって言わずにいつてたらマジで処刑されてたかもしれないしな。

センゴクにはすぐくお礼を言われた。

海軍本部中將を奴隷にするのにお礼を言うってどうよ？

後、ブルーについてだが

こちらはわりとすんなり奴隷になった。

天竜人は前述した通りで何も言ってこなかった。

世界政府も当たり前だがブルーは海賊なので何も言わない。

ここまではよかった。

問題はここからだ。

俺は奴が目覚めた時に大方の事情を説明した。

そして俺が奴に逃げるように促すと、あろうことかこんなことを言

い放った。

「クソガキ！ てめえ、さては勝ち逃げする気だな？」

はあ？ と思った。

何やら未だに俺に負けた事を根に持っているらしい。
あの風を出して今すぐ勝負しろとか言い出し始めた。
俺は怪我してるのにお構い無しかよ。

それ以前に俺にはもうあの風は使えなくなっていた。
出そうにも出し方が分からないのだ。

あの時も勝手に出てきた感じだったしな。

俺がその事を説明するとじゃあ使えるようになるまで待つとか言う
始末。

結局ブルーはここにいることになった。

それが未だにブルーがここにいる理由だ。

そうそう。

俺の悪魔の实の能力が天竜人たちにバレた件だがあの事件で天竜人
たちを救ったのとロズワードさんのおかげで蔑まれるのではなくて、
逆に尊敬されるようになってしまった。

その子供たちにも憧れの英雄みたいに見られている。
チャルロスもその例外ではない。

父様と母様はこのことに対して泣くほど喜んでいた。

俺が蔑まれるのを覚悟していたんだから当然か。

「ぎやははははは！！ やべ、腹筋壊れる……………！！」

「殺す！ 絶対殺す！！」

「やめろって！ これ以上は本当に洒落にならないから！」

しかし一気に賑やかになったな…。
二人増えるだけでここまで変わるとは…。

「ぎやはははは、あ!？」

ブルーが何かに躓いたのか後ろに仰向けで倒れる。

「好機！ 離せガイア！」

「だから落ち着け！」

サカズキとガイアが揉み合ってサカズキの右手のマグマが飛び散る。
飛び散ったマグマは運悪く仰向けに倒れていたブルーの股間に当たった。

「ぎゃああああああ!!!!!!」

ブルーが白目を剥いて悶絶した。

そう言えばブルーについてはもうひとつあった。
そう。

ブルーは超絶に運が悪いのだ。
今さっきのことともそうだが、あの事件の時に俺から逃げる途中にあいつはミホークの斬撃とサカズキの大噴火を運悪く直撃していたし、俺との戦いの時だって運悪く俺の風を操る能力が発現して負けてしまったしね。

そして極めつけは体が勝手に動いて父様を殴ったことだ。
ブルー曰く、本当に体が勝手に動いたらしいのだ。

まるで誰かに操られるみたいに。
こんな律儀な奴が嘘をつくとは思えないし、それに誰かを操る奴には心当たりがある。

ドンキホーテ・ドフラミンゴ。

十中八九、こいつだろう。

あいつもちようどルーキーとしてこの島に来ていたはずだ。
にしても本当に運が悪い奴だ。

ドフラミンゴに目をつけられて、さらに天竜人を殴らせられるなんてな。

ブルーの懸賞金が高いのもたまたま島を襲っていた海賊をやっつけたら、避難していた島民に運悪くお前も島を襲いにきた海賊だな！
と勘違いされてたりなど、そんなことが色々積み重なって今の懸賞額になっただけらしい。

もう不憫すぎて泣けてくる。

それでもブルーは全てを自分の運の悪さのせいにならず、己の力が足りなかったからだと考えているそうだ。
やっぱりこいつ普通にいい奴じゃないか？

「おおおおお……………！！！」

「ふんっ、いい気味だ」

「……………」愁傷さま

まだ悶絶しているブルーをふんぞりかえって見ているサカズキと脱力しているガイア。

「はあ……………」

明日はレイリーに言われた宴の日だったな。
楽しみだ。

第二十七説：事件の後日談（後書き）

次は宴の話かな？

第二十八説：海賊と天竜人と奴隸の宴（前書き）

今回は難産だった……。

更新遅れてすみません！！

第二十八説：海賊と天竜人と奴隷の宴

日が暮れた頃。

シヤボンディ諸島のとある無法地帯。

「カーッ！ 夜は冷える！」

「ならわしがマグマで暖めてやろうか？ ん？」

「あほか、おっさん。そんなことしたら俺が死ぬだろうが」

「だからこそだろう？」

「……おっさんまだ俺が昨日、大笑いしたこと根に持ってたのかよ」

「当たり前だ。お前はいつかこの手で消すと決めとるんだからな」

「はあ……。しつこい奴は嫌われるぜ、おっさん。あ、やべ、思い出したらまた笑えてきた……！！」

「……よし。やっぱり今、消してやろう」

「あーっ、もう！ うるさいお前ら！」

俺はさつきから何十回と続いているサカズキとブルーのやりとりに関わらずつっこみをいれてしまった。

「お？ 何だクソガキ。俺と闘りたいのか？」

「誰が鬨るかバカ。ていうかそのクソガキっていうのもう止める。
お前一応、俺の奴隷ってことになってんだから誰かに見られたら俺
はもう庇えないぞ?」

「は? 別にいいじゃん、クソガキ。」

「………… お前全っ然理解してないだろ」

「やめとけテラ。そいつらに何を言っても無駄だから」

ガイアが俺の肩に手を置きながら言う。

おい、何だ。

その悟ったような穏やかな顔は。

「まあ、とにかくだ。せつかくこれから宴をやるうって時にくだら
ないことでうだうだ言うのは止めにしよう」

そう。

俺たちは今、シャンクスに招待された宴に向かっている途中なのだ。
最初、宴に行くことは父様たちに反対されたが、ガイアたちを護衛
として連れていくことで何とか説得した。

何せ全員が能力者だ。

しかもその内の二人は元海軍本部中将で自然系。

余程のことが起こったとして大丈夫だろう。

しかしサカズキはずいぶんと宴に来るのに嫌がっていた。

原作で海賊を絶対悪だと思っているのは知っていたけどそこまで海
賊と一緒に飲むのが嫌なのか。

最後にはあんまりやりたくないのだが仕方ないので天竜人として命
令して無理矢理連れてきた。

連れてきたはいいけどブルーとの口喧嘩が絶えなくていいかげんう

んざりしてきている。

「くだらなくはない！ わしの正義がかかっておるのだからな！」

「ずいぶんくだらないことにかけてんなー。おっさんの正義」

「お前はいちいち人の神経を逆撫ですることを言いよるな……！！！」

「……………」

「一体何でもここまで仲が悪いんだ、こいつらは？」

おい、ガイア。

だからそんな悟ったような穏やかな顔でこっちを見るな。

「お、あれか？」

そうこうしている内に明るい大きな焚き火の火が見えてきた。
こっちに向けて手を振っている人影が見える。

「おーい！ こっちだテラマキア！」

どうやらシャンクスらしい。

手を振り返す。

「ちっ……………」

「こらサカズキ！ お前舌打ちしただろ！」

「ふんっ、海賊と飲む酒なんぞ不味くて虫酸が走るわ」

「だからといってシャunksたちに危害を加えたら本気で怒るぞ…
…!!」

「……………」

サカズキは腕を組んでそっぽを向いてしまった。

「ありやりや。拗ねちまった」

「拗ねてなどおらん！」

「おー、怖っ！」

「全くサカズキは……」

それぞれがサカズキを呆れた目で見る。

「はあ……………。とにかく行くぞ」

俺たちはシャunksたちの元に急いだ。

「おう、元気にしてたかテラマキア。傷はどうだ」

「ああ、シャンクス。順調に回復してるよ」

挨拶をかわす俺とシャンクス。

「あんたがうちの船長を助けてくれた奴だな。礼を言う」

シャンクスの後ろに控えていた仲間たちから一人の男が出てきて礼を言ってくれた。

漫画で見たことがある。

確かベン・ベックマンって人だ。

シャンクスの海賊団の副船長だっけ。

道理でシャンクスに次いで威圧感がある人だと思った。

「へえー、マジで天竜人かよ。船長の言うこと本当だったんだな」

仲間の内の一人の肉に食いついている太った男が笑いながら言う。
あの人は確かラッキー・ルウって人だな。

「やあ、また会ったな。テラマキア君」

「あ！ レイリーのおっさん」

手を上げて俺に挨拶をするレイリーのおっさん。
その隣には見覚えのある男が立っている。

「あれ？ もしかしてミホークか？」

「……………」

その男――「ミホークは腕を組みながら目を瞑っていた。

「おう、そうなんだよ！ その辺にいたから誘ったんだよ」

「……おれとしては貴様と早く決闘の続きがしたいのだがな。《赤髪》」

「今はいいだろう？ 《鷹の目》。せっかくの宴なんだからさ！」

「ふん………」

ミホークはそれきりでまた黙ってしまった。

「わはははは！ おもしろい海賊と縁を持ったものだな、シャンクス！」

「まったくですよ。レイリーさん」

シャンクスはふと俺の後ろに目を向けた。

「お、何だ。テラマキアも連れがいたのか………ってあんたは確かあの事件の時にいた元海軍中将の………」

「やめてくれ。もう私は海軍中将ガイアだったのはもう昔の話だ。今はこのテラマキアの奴隷兼師匠のガイアだよ」

シャンクスの言葉に苦笑しながらガイアは自己紹介した。

「ん？ 奴隷で師匠っておかしくないか？」

「まあ、あまり細かいことは気にするな。それに元海軍中將というなら彼の方が合ってるさ」

そう言つてガイアは自分の後ろをあごで指す。

「……………」

そこには相変わらず腕を組んでふて腐れているサカズキの姿があった。

「ああ!! あんたはあの時のマグマ中將!」

「彼も今じゃ私と同じ、テラマキアの奴隷さ」

ガイアの奴隷という言葉が気に入らなかったのかサカズキは舌打ちした。

「へえー、レイリーさんの言っていたこと本当だったんだ。最初、聞いたときは大声を上げて驚いちまったけど正直、半信半疑だったからな。まさか助けるために奴隷にするとは……………」

奴隷の主旨が間違つてないかとシャックス。

「なあ、おっさん。いつまで拗ねてんだよ。そろそろ機嫌直そうぜ」

「うるさい!」

「やれやれ……………」

ブルーはお手上げのポーズをとる。

「ん？ そいつは？」

そんなブルーを見てシャンクスは疑問の声を上げる。

そういえばシャンクスはまともにブルーの顔を見たことがないんだっけ？

「こいつはブルー。ほら、あの事件で天竜人を殴った奴さ」

「ああ、あの天竜人を殴った奴ね……………って何でそれで無事なんだ？ まさかそいつも……………」

「ああ、俺の奴隷さ」

「やっぱり……………！」

「ええ！？ 俺って奴隷だったのか！！？」

「…………今更気づいたのかよ！！！！……………」

その場にいる多数の人からつつこみが入る。

「へー、俺、奴隷だったのか。あれ？ でも俺今まで奴隷みたいな扱いされたことないぞ？」

「…………なあ、テラマキア。お前奴隷の意味知ってるか？」

「知ってるよ！！！！……………」

シャンクスにバカにされたような感じがしたから思わず言い返してしまった。

「まあ、主賓もきたことだし、これでようやく宴を始められるな！」

シャンクスの仲間たちから酒を手渡される俺達。
無論、俺はジューズだ。

「さあ、野郎共！！ 酒の準備はいいか！！」

「「「「「おお！！！！」」」」」

シャンクスの仲間たちは酒を上にとって応答する。

ガイアやブルー、レイリーもだ。

ミホークは酒を小さく酒を上にとって、サカズキも嫌そうな顔をしながら場の空気に合わせて酒を上げている。

もちろん俺も酒ではないがジューズを上げている。

「宴の始まりだあああああああ！！！！ 乾杯！！！！いい！！！！」

シャンクスの声と共に騒がしい宴は始まった。

「君ってマジで天竜人なんだってな！」

「まさか天竜人にいいやつがいるなんて思いもしなかったなあ。それも子供だし」

「よく言われるよ」

「あんた天竜人を殴ったんだってな！　すげえ根性あるな！」

「そ、そうか？　俺ってすげえ奴か？」

「ああ！！　すげえよ！」

「ギャハハハハハ！！　なんか照れるな！！」

「おう、楽しんでるか？　《鷹の目》！」

「ああ、それなりな。《赤髪》」

「そつか！　よかつたぜ」

「……たまにはこういうのも悪くないものだな」

「だろ！」

「ほらほらあゝ、しょんなしけた顔してないでさあ、シャカズキも飲もうぜエ」

「おい、ちょ、こらガイア！　お前もう出来上がりつつあるだろ！」

「わはははは！！　あれだけ嫌がっていたのに楽しそうだな！」

「《冥王》！！　誰が貴様ら海賊と飲んで楽しめるか！！　っておいガイア！！　無理矢理飲ますのはやめっ……！！！」

「いい飲みっぷりどうわなあゝ、シャカジュキ。ほら、もっと飲め！！！」

「……！！……！！！！」

「わはははははは……！！」

「ふう……。もう腹一杯だ」

宴が始まって数時間後。

俺は皆から少し離れた場所で一息ついていた。

「にしてもすごいな。海賊の宴ってのは」

正直なめていた。

でも実際はやばかった。

あいつら俺にはちゃんと酒じゃなくてジュースなんだと油断していたら俺の杯に酒混ぜようとしてきやがった。

中には無理矢理飲まそうとしてくる奴までいる始末。

一応、俺は天竜人なんだけどな。

あいつら絶対忘れてるよ。

ていうか本当に元気だな。

ブルーたちは何かやってるし。

「ギャハハハハハハ！！　一発芸やるぜえ！！」

そう言うとブルーは能力を発動して青龍になってとぐろを巻いて、

「うんこー！！」

……あほだろ。

「いいぞー！！ もっとやれー！！」

……全員あほだろ。

「うおおおおおー！！」

その時、宴の中心から拳型の巨大なマグマが飛び出してきた！

「うわあっ！！ マグマ中將が酔って暴れたしたぞー！！」

あのバカサカズキ！！

何やってんだよ！！

「わしゃあのう、わしゃあのう、己の正義に従ってがんばってきたんじゃあ！！ それが何で奴隷にならなきゃあいかなのだ！！」

何で愚痴ってんだよ！？

「分かった、分かった！ お前の悩みはよーく分かったぜシヤカジユキ！ だから飲もうぜ！ 飲めばなんとかなる！」

「おおう、ガイア！！ わしのことを分かってくれるのはお前だけじゃー！！」

そして何でそれで納得する！？

てかガイアもベロベロに酔ってるじゃないか！！

「わははははは！！ こんなに楽しい宴は久しぶりだ！」

「同感だよ、レイリーさん！ 《鷹の目》もそう思うだろう？」

「……………ああ」

「ははは！ やっぱりな！ あっ、おーい！ テラマキアもそんなところにいないでこっちに来いよー！」

「ああ、今行くー！」

本当に賑やかで楽しくて騒がしい宴だな。

俺はシャunksたちの元に向かって走り出す。

そうやって宴の夜は更けていった。

——翌日。

「悪いな、わざわざ見送りにきてもらって」

「いやいや、気にしなくていい。俺が来たくて来たんだからな」

俺はシャunksたちの出航の見送りに来ていた。

「そついえばガイアたちは？」

「ああ、あいつらなら今ごろ屋敷で二日酔いに苦しんでるよ」

昨日の夜は馬鹿みたいに飲んだからな。

あいつら酔いつぶれちゃったから、俺が白虎になって運んで帰るはめになってしまった。

一応護衛として連れてきたんだけどなあ。

まあ、そのせいで父様と母様に物凄い剣幕で怒られていたけど。

「シャンクス、ミホークとレイリーのおっさんは？」

「ああ、レイリーさんならこの島での用事は済んだらしいから行っちゃったよ。何やら冒険の思い出巡りしてるらしいんだ。《鷹の目》については知らないな」

「そつか……。行き先は魚人島だよな」

「ああ。そのための船のコーティングも終えてるから準備万端だ！」

確かにシャンクスの船はゼリー状の膜に覆われていた。

あれがコーティング船か……。

「おっと、そついやお前に渡したい物があるんだった」

そつ言つてシャンクスは自分のそばに置いてあつた箱を俺に渡してきた。

「これは改めて俺を助けてくれたお礼だ。受け取ってくれ！」

「ええ！？ いいのか！？」

「ああ、俺たちにとっちゃ必要のない物だしな」

うーん、折角くれるって言ってるんだし、断るのも失礼だな。

「なら遠慮なくもらうよ」

「ああ！！」

満面の笑みで喜ぶシャンクス。

「んじゃ、そろそろ行くな」

「ああ」

シャンクスは船に乗り込む。

「船長、浮き袋を外しました！」

「おう、ありがとよ」

途端に船をシャボンが膨らんで覆っていく。
それと同時に船が沈み始める。

「」「またなーーーー！！！！！！」「」「」

シャンクスやその仲間たちが手を振ってくれる。

「ああ、元気で!!」

俺も負けじと振り返した。

船は完全に海へと沈み、見えなくなった。

「……また会おうな、シャンクス」

……さて、屋敷に戻るか。

「ん？」

振り返った時、自分のそばにある箱が目についた。
そうだ。

シャンクスからお礼をもらっていたんだっけ？

「いったい何なんだろう？」

俺は箱の蓋を開けて中身を見た。

中には縞模様の入ったメロン？らしき果物が一つ入っていた。

おいおい、これって…

「悪魔の実じゃないか…」

シャンクスたちは必要ないって言ってたけど俺にも特に必要ないんだけどなあ。

父様に渡して売ってもらうか？

いやそれよりも…

「これって何の悪魔の実なんだ？」

どこかで見たような気がするんだが…。
確か屋敷に悪魔の実の図鑑があったよな。
それを見れば分かるかもしれない。

「そうと決まれば急ごう」

俺は急いで屋敷に向かった。

「ん、この本だな…」

帰った俺は早速、自室にこもって本棚から目当ての本を見つけた。

「悪魔の実の図鑑……」

箱から悪魔の実を取り出して横に置き、本のページをめくる。

「えーと……これは違うな……これも違う……」

そして何十ページかめくった頃にそれは見つかった。

「あつた、これだ！」

そのページに描かれていた悪魔の実と今、横にある悪魔の実の色も形も全く同じだった。

「えーと何々、この悪魔の実はゴムゴムの実……？」

ゴムゴムの実……

マジ………？

第二十八説：海賊と天竜人と奴隸の宴（後書き）

根本から原作崩壊WWW

次からはしばらく日常編かな？

間説：キャラ説明（前書き）

はい、だいぶ前から予告していたキャラ説明です。
原作から立場の変わったサカズキについても一応、説明しています。
その他、質問などあれば感想にてお待ちしております。

間説：キャラ説明

名前：テラマキア

立場：天竜人

容姿：髪型は他の天竜人とは違って普通にショート。

髪色は金髪。

顔は並み。

能力：ネコネコの実 モデル？白虎？、六式

この二次創作の主人公で転生者。

現在の年齢は8歳。

4歳の頃から元海軍本部中將のガイアに鍛えられたおかげでかなりの強さになっている。

性格は普通で良いことは良いこと、悪いことは悪いことと分別できる人間。

ただし転生してから天竜人として生きてきたのでどうしても天竜人よりに考えがよってしまうことがある。

母親のサマルドリアから？どんな人からでも恩を受けたら必ず返す？ことを教え込まれており、たとえ魚人だろうが犯罪者だろうが恩を受けたら返すことを信条している。

白虎の能力の？五行の金？は未だ完璧に使いこなせておらず自身の体では両腕の硬質化、硬質化できる物体は一つが限界。

覇気も使えないが？五行の金？を駆使して自然系の流動する体を一時的に硬質化して実体を保たせ、攻撃を通すことができる？白覇？を編み出したので自然系の能力者とも戦える。

白虎にはもうひとつ隠された能力である風を操る能力があるが無意

識で発現したりと、全く自由に制御できていない。

六式も全て使える。

ちなみに六式で一番得意なのは指銃。

シャボンディ諸島で起きた天竜人襲撃事件において、天竜人たちを救ったので彼らから英雄視されている。

名前：ガイア

立場：元海軍本部中将でテラマキアの奴隷兼師匠

容姿：髪型は五分刈り。

髪色は黒。

顔は並みの上。

能力：ツチツチの実、六式、武装色と見聞色の覇気

テラマキアの奴隷で相棒にして師匠という色々複雑な元海軍本部中将。

無名の海賊に負けて人間オークションで売られていたところをゾディアックに買われてテラマキアの奴隷となった。

その後、テラマキアに頼まれて師匠になってテラマキアを鍛えてい

る。

元海軍本部中将だけあってその強さは本物。

ロギア的能力に加えて六式、覇気まで使えるので海軍に所属していた頃にも上から数えた方が早い実力を持っていた。

性格は礼儀正しく義理堅い。？人々のための正義？という信念を胸の内に秘めており、人々を傷つける輩であれば海賊だろうが海軍だろうが立ち向かう覚悟を持っている。

テラマキアを鍛えあげるという名目で闘い、ボコボコにしてストレス発散し、スツキリするのが密かな楽しみでもある。

かつての同僚たちであるサカズキやボルサリーノたちからなぜか裏切り者

と呼ばれていた。

過去に何かあったと思われるが詳細は不明。

名前：ブルー

立場：元海賊でテラマキアの奴隷

容姿：髪型はロングヘアで紐で一本に括っている。

髪色は青。

顔は上の中。

なかなかのイケメン。

能力：ヘビヘビの実　モデル？青龍？

初代の超新星の一人にしてシャボンディ諸島で起きた天竜人襲撃事件の犯人。

その時にテラマキアと対決し、敗北してテラマキアの奴隷となった。性格はかなり律儀。

ただし勝負事の勝ち負けに関しては執念深く、勝ち逃げされることを嫌っていて常に最後には自分が勝たないと気がすまない。

だからといって卑怯な手を使うわけでもなく、正々堂々と闘って勝とうとする普通にいい奴。

その強さもなかなかのもので青龍の能力である？五行の木？を駆使してグラウンドラインの前半の海をたった一人で勝ち抜いてきた強者？五行の木？の真髄である成長、つまり細胞の活性化で自身の傷を素早く再生できるので長期戦に強い。

極度の不幸体質であり、今までの航海で色々と災難に合ってきたらしい。

そのせいか最近に名を上げたにも関わらず、懸賞金が1億8000万ベリーとかなり高い。

今はあの風的能力を使うテラマキアにリベンジするためにテラマキアが完璧に風的能力を使いこなせるのを奴隷（本人に奴隷という自覚は全くないが）として側にいて待っている。

名前：サカズキ

立場：元海軍本部中將でテラマキアの奴隷

容姿：原作と同じ

能力：マグマグの実、武装色と見聞色の覇気

天竜人であるテラマキアに手を出してしまったことと天竜人襲撃事件の責任によりテラマキアの奴隷となってしまった。

正式には奴隷に身分を偽って海軍からの緊急召集時には秘密裏に応じる予備戦力ということになっているので厳密に言えば奴隷ではない。

原作と同じく海賊を絶対悪だと信じているが、天竜人に関してはテラマキアを見たことにより若干偏見が薄くなっている。

強さは現時点では原作より前の年なので原作のサカズキよりかは弱い。

それでもマグマグの実の脅威は健在なのでそんじょそこの海賊にはまず負けない。

元海賊であるブルーを嫌っており、口喧嘩が絶えない。

たまに口喧嘩から殴り合いに発展しそうになるので周囲が更地になるのを防ぐためにそれを止めるのにテラマキアやガイアは必死である。

名前：ゾディアック

立場：天竜人、テラマキアの父親

容姿：髪型は原作の天竜人と同じ。

髪色は金髪。

顔は上の上。

かなりイケメン。

能力：特になし

テラマキアの父親。

これでもかというほどテラマキアを溺愛している。

端から見れば他の天竜人よりちょっとマシという程度だが実際は人間たちにほとんど偏見を持っていない。

かつては他の天竜人よりも残虐だったが今の妻であるサマルドリアと出会ったことにより自分の考えの愚かさに気づかされてその後、徐々に影響されていつて今の性格になった。

サカズキとブルーに対しては今でも快く思っておらず、テラマキアが信用していなければ今すぐにでも奴隷としてこきつかってやろうという勢いである。

異端者であるサマルドリアとその子供であるテラマキアを守るために色々と汚いことをしてしまっている。

テラマキアはまだこの事を知っていない。

名前：サマルドリア

立場：天竜人、テラマキアの母

容姿：髪型は原作の天竜人と同じ。

髪色は金。

顔は上の中。

普通に美人。

能力：特になし

テラマキアの母親。

天竜人にしては珍しく芯の通った女性。

かつて人さらいにさらわれそうになった時に人間の男に助けてもらったが、お礼に屋敷に招いた時にその人間の男は天竜人である自分に触れたということで親に殺されてしまった。

故に自分のせいで人間の男を殺してしまったことを深く後悔し、罪滅ぼしのために？どんな人からでも恩を受けたら必ず返す？ことを心に誓って生きることを決意した。

そしてその人間の男から受けた恩を返す代わりに他の人間に施しを

しているところを他の天竜人に見られて異端者扱いされてしまい、自分の家からも勘当されてしまう。

その時に今の夫であるゾディアックと出会い、助けられて今に至る。人間たちに対して全く偏見を持っておらず、奴隷であるガイアたちにも快く接している。

彼らのことは奴隷というよりも家族として接している感じである。

サカズキやブルーは自分の子供を傷つけた者たちであるが、その子供のテラマキアが彼らのことを信用しているから無条件で信用するというお人好し親バカ。

奴隷という制度を嫌っており、故にこの屋敷にはほかの天竜人のところと比べて極端に奴隷の数が少ない。

基本、家庭はかかあ天下ではあるが大事なときにはちゃんと夫のゾディアックをたてる良妻賢母。

第二十九説：天竜人テラマキア（前書き）

ようやく次の長編の構想が固まってきた！
更新遅れてすみません！

第二十九説：天竜人テラマキア

ああ……

大変なことになった…

朝食の席。

俺は盛大に負のオーラを放っていた。

「うん？ テラマキア。気分が優れんのか？」

「あらあら、まだ病み上がりなんだから無理してはいけないわよ」

「いえ、大丈夫です。父様、母様」

嘘です。ごめんなさい。

俺は朝食を食べながら昨日のシャンクスからもらった悪魔の実のこ
とを思い出していた。

ゴムゴムの実——

言わずと知れたこのワンピースの世界の主人公、モンキー・D・ル
フィの食べた悪魔の実である。

それが何の因果か、俺の手元に来てしまった。

確か原作ではシャンクスたちが持ってきたこの悪魔の実をルフィは
勝手に食べてしまったことでゴム人間になっていた。そしてルフィ
はその能力を駆使して、立ちは大抵の数々の猛者を打ち倒してきた。

その猛者の中にはゴム人間でなければ勝てない者もいた。

それ以前にゴム人間でなければ冒険の中で何回も死んでいるはずだ。いくら悪運が強いからってそれだけで渡っていけるほどグランドラインは甘くない。

つまり何が言いたいのかというとルフィはこの悪魔の実がなければほぼ確実に死ぬということだ。

俺の手にゴムゴムの実がある以上、ルフィは能力者にはなれない。あんなにいいやつが死ぬのも嫌なのだが、それ以上に嫌なことがあるのだ。

それはルフィが漫画で行ってきたことが起こらない可能性があることだ。

ルフィ率いる麦わら海賊団は原作で様々な事件に関わり、それらを乗り越えてきた。

中にはたくさんの人々を救ったこともあった。

例を出すとかの空島の冒険でエネルを倒したことにより、スカイピア消滅を防いで沢山の人が救われたことだ。

それらのことが起こらなかった場合、本来なら死ぬはずのないその沢山の人々は救われず、死んでしまうのだ。

どのみちルフィがゴムゴムの実なしで何とかやってこれたとしても、確実に空島でエネルに負ける。

あれに勝てたのはルフィが運良くゴム人間だったからだ。

それ以前にクロコダイルに勝てるかすら分らない。

一応、奴も自然系の能力者なのだ。

生身の人間が勝てる確率は限りなく低い。

とにかくこのままではルフィは間違いなく死ぬだろう。

つまりまとめるとルフィがゴムゴムの実を食べなければ確実に多くの人々の命が失われるのだ。

最悪、人々を救うのは俺が直接行って防いでもいいのだが父様や母様に対して行くために説得する口実がない。

父様は何か呪詛らしきものを繰り返していた。
怖っ！！

「あら、楽しそうね」

「どこが！？」

母様も相変わらずである。

その時、誰かが食堂の扉を開けて入ってきた。

「テラ、支度をしろ」

ガイアだ。

「支度？ どこに行くんだ？」

「忘れたのか？ お前の日課だった鍛練だよ」

ああ！

そういえばあの事件があつてからしばらくしてなかったな。

「怪我もして恐らく鈍ってるだろう？ リハビリも兼ねてるんだからやらなければいけないぞ」

「ああ、そうだな」

俺は急いで残った朝食を口にかきこんで胃におさめた。

「よしっ！ それじゃあ支度をするか」

「無理をしては駄目よ。まだ傷も完全に治っていないんだから」

「デス、デス、デス、デス……」

母様は心配の声をかけてくれる。

父様は未だに呪詛を口から垂れ流している。

その内、悪魔でも召喚しそうな感じた。

「あなた、いいかげんうるさいのよ!!」

「ほげえっ!!」

母様は堪忍袋の緒がついにキレたのか父様を思いつきり殴った。

しかもグーで。

なんか人を殴ったとは思えないような音が聞こえた気がしたんだが、空耳だよな……？

「ふう……、スッキリした!」

「……………」

母様が晴れやかな顔をしている横で父様はピクピクと痙攣していた。

前から思っていたけど、母様のパンチって常人のそれを越えてるよな……

いくら何も鍛えてない父様といえども、一発KOは普通ありえない。

「……………ああ、そういえば彼らも連れていくことにした」

ガイアはそんな光景を横目に俺に言う。
もはやこんなことは日常茶飯事なので全然気にしていない。

「彼ら？」

するとガイアの後ろからブルーが現れた。

「ぷっ、ぎやははははは！！ 朝から何だよその格好は、クソオヤジ！！」

ブルーは現れるなり父様の惨状を見て大笑いをし始めた。
あいつ本当に自分が奴隷っていう自覚ないな。

ちなみにクソオヤジは俺の父様のことでクソガキのオヤジだからクソオヤジと呼んでいるらしい。

やめさせようとしたが一向にやめる気配がないので諦めた。
父様がブルーを目の敵にしている理由の一つである。

「ぎやははははあああああああ！！！！」

ブルーの笑い声が突然途中で悲鳴に変わって床をのたうちまわった。
うわ、顔がただれてる……！！

「朝っぱらからうるさいんじゃないやあ、お前は」

その横にはいつの間にかサカズキが立っていた。
どうやらサカズキがブルーの顔にマグマを押しつけたらしい。

「顔がア！！ 顔がああああああ！！」

でもあまり心配はしていない。

どうせ能力ですぐに治癒ができるからな。

「何でこいつら連れていくんだ？」

「サカズキは俺と同じ海軍本部中将だったからお前の鍛練を手伝ってもらおうと思ってな。そっちの男はただ単にお前の鍛練が見たいらしい」

「ふーん……」

サカズキが鍛練を手伝ってくれる、ねえ……。
よく承諾してくれたな。

あいつ、俺のことはそんなによくは思っていないはずなのにどういう風の吹き回しだ？

まあ、ブルーはどうせただの興味本位だろう。

サカズキを見る。

「……………」

顔を背けられてしまった。

うーん、何を考えてるのかさっぱり分からない。

まあ、いいや。

何にしろ手伝ってくれるんだ！

感謝しないとな！

「顔があああああー！」

「お前うるさい。じゃあテラ、屋敷の庭で待ってるぞ。」

そう言うとガイアは喚いているブルーを引きずってサカズキと一緒に部屋から出ていった。

さて、俺も支度しないとな。

「じゃあ母様、支度して行ってきます」

「あら、いつてらっしゃい」

「……………」

母様は挨拶を返してくれたが父様は相変わらず倒れたままだった。

……………生きてるよな？

あの天竜人の小僧の鍛練場である小島に向かう小型船。

わしは今、まさにその鍛練場に向かうためにその船に乗っていた。
わしの他に同乗者は三人。

さっき言った天竜人の小僧と認めたくはないがわしと同じ元海軍本部中將のガイア。

そしてあの忌まわしい海賊の《神咲》である。
わしがなぜこの船に乗っているのか？

それはあの天竜人の小僧の鍛練を手伝うためということになった
が、本来ならわしはこんなことをする気はなかった。

する気になったのは小僧に聞いてみたいことがあったからだ。

あの天竜人らしくない天竜人の小僧に。

「何たそがれてんだよ、おっさん。ダサイぜ」

「死ね」

マグマの拳で思いっきり殴る。

悲鳴が聞こえたような気がした。

島に着いたらさっそく小僧の鍛練が始まった。

最初は島を何十周かしてその後、腹筋やら腕立て伏せやらを何百回
とするそうだ。

これでリハビリというのだから純粹にすごい。

いつもはこれを何セットか繰り返すらしい。

なるほど、だから子供の割にやたらと強かったわけだ。

海軍の兵士たちに見習わせてやりたいもんじゃのう。

「ふーん、クソガキやるじゃねえか」

横の海賊も称賛クズの声を上げていた。

そしてそれらの鍛練が終わるとガイアが小僧の前に立った。
どうやら組み手を始めるつもりらしい。

砂浜の上でにらみあう二人。

小僧が悪魔の実の能力を発動させて人獣型になる。

それを見たガイアは嵐脚を放った。

小僧は余裕を持ってそれを跳んでかわす。

が、かわした先にガイアが先回りしていて蹴りを食らわせられた。
砂浜に小僧が落とされて砂埃が舞う。

ガイアの奴は明らかに手加減をしとるのう。

悪魔の実の能力は使わず、六式と覇気だけで闘うつもりらしい。

その後も小僧とガイアの闘いは続いたが、小僧の攻撃はガイアにか
することもなく、軽くあしらわれて終わった。

「ハア…ハア…ガイアはやっぱり……強いな…」

「いつもより動きにキレがなかったが、病み上がりだし仕方ないか」

一旦、休憩ということでその場に小僧は座りこむ。

「おいおい、クソガキ！俺と闘った時はこんなもんじゃなかった
だろう！あの風出して闘えよ！」

「無茶言つなよ。あれは自由に使えないって前に言っただろう？」

「風？ テラ、お前一度も使えなかったあの風を出せたのか？」

「ガイアには言っでなかったっけ？ あの時はずいぶん出たんだ。まあ、今は出しかたが分からないから無理だけど」

「ふむ、そうか……」

しばし考え込むガイア。

「……まあ、今はそのことは置いておくとしてテラ。次はサカズキと組み手をしろ」

！

「……ガイア、俺を殺す気か？」

「手伝ってもらって言ったんだろう？ 私ばかりと闘ってもバリエーションがないからな。文句を言うな」

「いや、だってあいつマグマだぞ！ 触れたら死ぬって！」

「お前あの事件の時、闘えていたじゃないか。心配するな。流石に能力を使っただけの攻撃はさせないから。サカズキもそれでいいだろう？」

「かまわん。だが……」

そう。

わしは聞きたいことがあった。

わしには考えても到底分からなかったこと。

「その前に小僧。聞きたいことがある……」

それが今日ここに來た理由でどうしても聞きたかった。

「…………どうしてわしを助けた？」

あの小僧は自分の激昂した親からわしをかばい、さらにわしが天竜人たちから処刑されそうになっているところを奴隸にすることによって助けた。

わしはあいつを殺そうとさえしたのに一度ならず二度も助けたのだ。奴隸になった後も何かするわけでもなく、逆に何かをしてくる小僧の親からかばってくれとる。

わしにはあいつのことが全くわからなかった。本当にわからなかった。

沈黙が場を支配する中で小僧が口を開いた。

「何でそんなこと聞くんだった？」

「わしはお前を殺そうとしたんだぞ！」

「あれは俺が変装してたからであんたのせいじゃないって言うただろ？」

「しかし…………」

「それに俺は目の前にいるやつを見殺しになんてできないしさ」

とんだお人好しじゃのう……。

どうしてそんなことが言えるのか……

「わからんのう……。憎むべきものをどうして…」

「憎む？　なんで？　あんたいいやつじゃん」

「は？　何を根拠に……」

そして小僧は

さも当然のここのように

「だって俺の鍛練を手伝ってくれるんだろ？」

そう、言った。

「…………ふ」

なるほど、なんてことはない。

「…………ふふふ」

こいつはお人好しなんかではなくて、

「わーはっはっはっはっ！……！！」

とんだ大バカもんだっ たわけだ！

「はっはっはっは！……！！」

まさかこんな、それだけで人をいいように思えるバカもんがいるなんてのう……！

「え？ 何で俺笑われてんの？」

「ああ、気にするなテラ。それでこそのお前なんだから」

「なあ、クソガキ。お前バカだろ？」

「え？ 意味分らない……？」

「はっはっはっ……！」

ちよつとだけ…

ほんのちよつとだけ…

ガイアがこの小僧を気に入っているのがわかった気がする。

「ふう、スッキリしたのう……」

「わかっただろ、サカズキ」

「ガイア……」

「これが天竜人テラマキアさ」

「……………」

天竜人テラマキア、のう……………

「……………おい、こら小僧」

「え？」

「さっさと立て。始めるぞ」

「あ、ああ……？」

……悪くない。

第二十九説：天竜人テラマキア（後書き）

あともう一本日常編をいれようかな？
誰かリクエストありますか？

第三十説：シャボンディパーク（前書き）

日常編が日常編じゃなくなった……。

第三十説：シャボンディパーク

溢れかえる人々。

子供連れやカップルの上にあるシャボンの線路をコースターがかなりの速度で走っていく。

コースターの線路にもシャボンが使われているようにいずれのアトラクションもシャボンが使われている。

そしてそこは楽しそうな声で満たされていた。

「いつ来てもここは賑やかだなー」

「やべ、テンション上がるー！」

「まさかわしがこんなところに来ることになるとは……………」

「右に同じだよ」

そう、俺達はシャボンディパークにいた。
なぜこんなところにいるのかというと、

「久々に鍛練が休みだからというて行きたいところがシャボンディパークとは。子供っぽい奴じゃ」

「いや、俺まだ子供だからね？ 子供っぽいとかじゃなくて」

「曲がりなりにも海軍中将と闘りあえる奴を子供とは言わないさ。
それより私たちまで連れてくる必要なんてないはずだが？」

「仕方ないだろ？ 父様がお前ら全員連れていかないと納得しなか

「つたんだから」

「おいおい、テラ。それはお前が天竜人として行きたくないと言ったからだろう」

「しょうがないだろ！ 天竜人として行ったらほぼ貸切状態になるに違いないから嫌なんだよ！ 俺はこのみんなが楽しそうにしている雰囲気を楽しむながら楽しみたいんだよ！」

そう言う俺の格好はどこにでもいそうな普通の子供の格好していた。他の三人もそれなりの庶民的な服装に身を包んでいる。

「それと特にブルー、お前は気をつけるよ。世間的にお前は奴隷になつて本来ならこんなところにいるはずかないんだからな。もし誰かに正体がバレたらめんどくさいことになるぞ」

あの天竜人襲撃事件は世間も震撼させた。

たった一人で天竜人たちを皆殺ししようとしたかつてない事件は様々な人々に知れ渡っており、当然のその犯人であるブルーの顔も新聞の記事に手配書の顔写真が載っていたので知っている。

なぜか俺の活躍はあまり詳しく書かれなかったが。

ていうか名前すら書かれておらず『天竜人』としか表記されていないかった。

まあ、恐らく詳しいことを取材できなかったからだろうが、天竜人のことを取材なんて何されるか分からないからできるわけないか。とにかくブルーが天竜人の奴隷になったことは世間も周知の事実なのでこんなところにいるのがバレたら騒ぎになるに決まっている。そのためブルーにだけは変装のために黒のかつらを被ってもらっていた。

ちなみにサカズキの一件は海軍にとって都合が悪かったのだろう、政府が世間に表沙汰にさせることはなかった。

父様はこのことに抗議に行こうとしたが俺がサカズキも奴隷になってるんだし十分罰は与えたはずだと言って説得した。

大体あの俺をサカズキが襲った件はくどいようだが俺が俺が変装していたから悪いのだ。

それに海軍だって他の天竜人たちにクレーム食らって堪えているはずなんだから追い打ちかけるのもどうかと思うしね。

「おい、クソガキ！ 早く行こうぜ！ 俺アあのコースターに乗りてえんだ！」

「俺より子供かお前は！？ ああ、分かった分かった。ガイアとサカズキはどうする？」

「遠慮しとくよ」

「わしも同じだ」

「そうか……わわっ！？」

「行こうぜ行こうぜー！！」

「だから俺より子供かお前は！？」

「ほら、行つてこい」

「あ、ああ！ 行つてくる！」

一声ガイアたちに声をかけてから俺はブルーに引つ張られてコース

ターの順番待ちの列へ向かっていった。

「ほんとに元気じゃのう、あいつは」

「ああ、天竜人と言っても誰も信じないんじゃないか？」

「……………わしは現に信じられなかったからな」

「ははは……………」

走っていくテラたちを見送りながら私とサカズキはそんな会話を交わしていた。

ふと近くのベンチが目についた。

「おい、あそこに座って待たないか？」

「む、あのベンチか？ いいじゃろう」

私たちはベンチに向かい、腰を下ろした。

「それにしてもお前鍛練のとき何で能力使ったの攻撃禁止って言うてるのに能力使ったんだよ？」

「ああ！？　しょうがないじゃろ！　わしは昔からやられたらやり返すという性分が身に染み付いておるのだからのう……」

「……お前全然変わらないな。けどお願いだからどうにかしてくれ。じゃないと本気でテラマキアが死んでしまうからさ」

「無理だ」

「即答か……。もう少し考えたりしないのか？」

「そんなことせん。それよりお前に聞きたいことがある」

「いや考えろよ。で、何だ？」

「何で裏切った？」

その言葉を聞いた瞬間、私は自分の体がこわばったのが分かった。

「何故だ？　わたしたちの中で一番お前が秀でていたからアレ（・・・）を見せられたのだろう？　そのお前がなぜ……？」

「……だからこそだよ。私にはアレ（・・・）は受け入れられなかった」

「……なるほどな……」

「……もういいだろう？　俺達はもう海軍じゃないんだからさ……。今さら終わってしまったことを言うのはやめにしないか？」

「……ふん、まあいいじやろう」

サカズキは腕を組んで下を向いてしまった。
そんなサカズキを見て私は思った。

「……丸く、なったな……」

「む？」

「昔のお前ならもつと何か言ってきたはずなんだが……」

「……………」

「これもテラのおかげかな？」

「違うわい！ 誰があんな小僧に影響されるか！」

「ははははは！」

サカズキが来てから半年しか経っていないというのにここまで変わるとは……。

テラ、すごいなお前は。

……本当に。

「……ったく。わしには今でも小僧がなんであそこまで人を信じきれぬのかわからん」

サカズキは今にも下りようとしているコースターを見上げる。

「そんな奴は天竜人はおるか普通の人間にだって一人も見なかったことがなかったのう…」

コースターが勢いよく下り始めると同時に悲鳴と歓声が聞こえだす。

「そういう奴なんだよ、テラは……。私るときも初めて会ったときにいきなり私の海楼石の手錠を外したりして逃げられるかもしれないのに私のことを逃げないと信じているみたいなことを言っただけ…」

懐かしい思い出に遠い目をしながら私は言う。

「やっぱりバカもんじゃのう、あいつは」

「………違うない」

俺とブルーはコースターに乗った後も色んなアトラクションに乗り続けた。

「いやー、高えーな！ 能力を使って空を飛んできるときと同じような風景だけどこんなにゆったり見るのは初めてだ！」

「うん、いい眺めだ！」

そして俺達は最後の締めとして観覧車に乗っていた。

「はあー、楽しかったな！」

「お前、今日一日俺よりはしゃいでいただろ？」

「あ？　なんか悪いかな？」

「いや、悪いというか大人のお前が何で子供の俺よりはしゃいでんだってことだよ」

「あほか、クソガキ。こちとら元と言っても海賊だぜ？　楽しければしゃいじまうってもんよ！」

「……そういうものなのか？」

「そういうもんだ！」

「はあ……。まあ、いいけどさ……」

とにかく今日はたくさん楽しめた。

コースターにお化け屋敷とか色んなものが充実していてそれらほぼ全てにシャボンが使われているのには驚いたな。さすがにシャボンディパークというだけはある。

……楽しい一日もこれで終わりか……。

俺はシャボンの窓から外を見る。

建物や人がとても小さく見えた。

「ん？」

そんな中、何かシャボンディパークの空を飛んでいるのが見えた。それはだんだんと観覧車に近づいてきた。どうやらボンチャリに乗っているようだ。

「あれって喧嘩してんのか？」

ブルーも気づいたらしい。

そしてブルーが言っている通り、ボンチャリに乗った二つの集団が争っていた。

「てめえ、そいつは俺が先に見つけた獲物だぞー！」

「はっ、先に捕ったもん勝ちなんだよー！」

片方が何やらもぞもぞしている袋を抱えていて、その袋をもつ片方が奪おうとしている。

袋が動いているということは中身は……

「人さらい屋が獲物の奪い合いをしてるみたいだな」

どうやらそうらしい。

そしてついにキレたのか袋を持っていない側のリーダーらしき人物が手持ち大砲を構えた！

「死ねやあああああー！」

そして容赦なく引き金を引き、砲弾を撃ち出す。

「当たるか、バーカ！」

袋を持っている側のリーダーは難なくそれをかわした。しかしそれは最悪の展開だった。

「おいおい、嘘だろ……！」

かわされた砲弾の先にはちょうど俺たちがいる観覧車の部屋があったのだ！

そして逃げる隙もなく、砲弾は直撃した。

「そんなことがあるか普通……！」

「実際あったんだから仕方なかるうが！」

私たちは観覧車の乗り場に向かってダッシュしていた。

なんの因果か、よく分からない集団の砲弾の流れ弾がテラたちの乗っている観覧車の部屋に直撃してしまった。

その砲弾を撃った奴らはそのまま行ってしまうていて後を追いたい

のはやまやまだがまずはテラたちの安否が気になるので観覧車に向かっているのだ。
と、その時

「どいてどいてー!!」

という声が空から聞こえてきた。
空を見上げる。

すると落ちてくるテラとブルーの姿が見えた。

テラはそのままひらりと地面に着地したが、ブルーは不格好なままで地面に激突した。

「てめえ、クソガキずるいぞ！ お前だけ妙な体術使ってキレイに着地しやがって！」

が、すぐに起き上がってテラに文句を言い始めた。
うん、大丈夫そうだ。

「？月歩？のどこがずるいんだよ？」

こちらも全く問題なさそうだ。

「おい、とにかく場所を変えるぞ。ちよつとまずくなってきた」

周りの人々はテラたちが無事なことに驚いていた。

そのせいでかなり注目されつつある。

そしてブルーのかつらがさっきの爆風で頭からはずれてしまい、完全に青い髪が衆目にさらされていた。

これでは気づかれるのも時間の問題だ。

「いや、それなら俺をこんな目に合わせた奴らを追おう。ちょっとばかり懲らしめてやらないとな」

そう言つてテラがある方角を見る。

その先にはかすかだがあの集団の姿が見えた。

シャボンディパークから少し離れた場所。
相変わらず人さらい屋の彼らは獲物を奪い合っていた。

「よこせやあああああ!!」

「誰がよこすかあああああ!!」

怒声と共に鉛玉が飛び交う。

彼らの争いは殺し合いに発展していた。

しかし彼らは知らない。

この後、自分たちに地獄が待ち受けていることを。

そしてその数分後、彼らは見事に地獄を味わうことになった。

「ちょっとは反省したか、この野郎!!」

「いや、もう全員気絶してるから聞いてないって、ブルー」

「ふう……、久々にスッキリしたのう」

「サカズキ、お前ちゃんと手加減したんだよね……?」

その辺り一面はまさに死屍累々だった。

倒れている彼らはボロボロなのに対して立っている俺たちは全然傷の一つどころか服の乱れさえない。

「ちょっとやりすぎたかな……?」

「そうか? 別にそうでもないと思うけど。それよりこれ、どうするんだ?」

ブルーの目線の先には彼らが奪い合っていた獲物の入った袋があった。

今でももぞもぞと動いている。

「まあ、もののついでだし逃がしてやろう」

俺は袋に近づいてその口を開けた。

「おわ！」

途端、中にいたそれに思わずのけぞってしまい、袋を落としてしま
う。

袋が落ちた拍子に中にいたそれも出てくる。

「おいおい、これは…」

「なるほどのう…。奴らが奪い合つのも合点がいく」

「俺、初めて見たな！」

「マジか……」

それは人魚の女の子だった。

可哀想なぐらいに怯えきっていてぶるぶると震えている。

「……………！！！！」

奴らにされたのか口にテープを貼られて声が出せないようにされて
いる。

「どうする……？」

「いや、とにかく口のテープを剥がしてやらないと！」

俺はテープを剥がすために近づこうとすると、女の子は何をされる
のか分からないのかいやいやと首を振る。

「大丈夫。怖いことはしないから」

そう言い聞かせながら何とか近づいて口のテープを剥がした。

「ごめんなさい……許して………！」

剥がした途端に口から出てくるのは怯えからくる謝罪の言葉。
余程恐ろしかったのだろう。

俺は優しく女の子を抱きしめる。

「ひっ」

女の子が恐怖で一瞬、硬直する。

「大丈夫、大丈夫だから。俺たちは何にも怖いことはしないから」

俺は優しく女の子の背中を叩いて落ち着かせようとした。

「……………本当に？ 人間なのにな？」

「え？」

そういえば魚人や人魚たちは人間たちから迫害されていたんだっけ。
その子供たちが怯えるのも無理ないか……。

「うん。本当に何もしないよ。だから安心して」

「……………」

すると女の子は俺に抱きついて嗚咽をもらし始めた。

本当に……怖かったんだろうな……。

「この光景を見てると改めてお前が天竜人だなんて信じられなくなるな」

ガイアが近づいてきて声をかけてきた。

「で、どうするんだ？ その子」

「どうするって帰してやるしかないだろ？」

「お家に帰してくれるの？」

俺の言葉に反応したのか人魚の女の子が顔をあげる。

「私を捕まえたのにどうして優しくしてくれるの……？」

「へ？ 違うよ？ 捕まえたのはそこら辺に倒れている奴らさ」

女の子がキョロキョロと辺りを見回して倒れている奴らを目にする。

「助けてくれたの？」

「ああ、そういうことになるのう」

サカズキが言葉を返すと人魚の女の子はひしつと俺に抱きついて震えていた。

「はは、おっさん怖がられてやんの！」

「うるさい、バカタレ！」

また喧嘩を始めやがった……。

「まあ、幸い海も近いし、このまま連れて帰してあげようか」

俺は人魚の女の子を抱いて立ち上がった。

「わわ、私と同じくらいの子供なのに力持ちだね」

「まあ、鍛えてるからね」

俺たちは海に向けて歩きだした。

「……ねえ、あの人たちは友達？」

歩き始めてから最初に口を開いたのは意外にも人魚の女の子だった。
でもその質問は際どかった。

「！ いや、友達と言うかなんと言うか……」

うつっ、どつしよっ。

正直に奴隷なんて答えたらせつかく信用してもらったのが台無しになっってしまう。

何て答えれば……

「あ？ 何どもってんだクソガキ。俺たちはお前の奴隷ってことになっただろ？」

「「「空気読めやあああああああああ！！！！！！」」」

俺とガイアとサカズキの三人が思わずつつこみを入れた。

「えっ、奴隷……？」

ああ……終わった…。

「……嘘でしょ。だって奴隷だったらクソガキとかいう悪口なんか言えないもん」

あれ？

「やっぱり友達なんだ」

よく分からないけど助かった……………。

「ブルー、お前帰ったらおぼえとけよ……………！！」

「は？ 何を？」

…………泣かす！

絶対泣かす！！

「私も手伝おう、テラ」

「わしもやるぞ」

ああ、同志よ……。

「……人間にこんな人がいるなんて知らなかった」

「ん？」

「人間はみんな悪いやつばかりだって兄さんが言ってたから……」

「へえ……、お兄さんがいるんだ」

「うん、とっても強いんだ！ ちょっと怖いけど……」

「ふーん……お！」

そうこう話している内にいつの間にか目の前に海が広がっていた。

「さて、ここでお別れだ」

「うん………」

名残惜しそうに呟く人魚の女の子。

「……君は魚人島から来たんだろ？ 何で捕まったんだ？」

「この島にお友達と一緒に来た時にいきなり……」

「友達！？ その友達たちは無事なのか？」

「うん。私だけ逃げ遅れて捕まったから」

ほっ、よかった。

「でもおかしいな。この島で奴隷売買が行われているのはいくら子供だろうと知っていたはずだ」

ガイアが横から疑問の声をあげる。

「……………」

「危険なことを承知で来たのか？」

女の子はしばらく黙っていたがやがて口を開いた。

「…………この島のあの、遊園地が見たかったから」

「！……！」

なるほどね…………。

……………よしっ！

「行きたいか？ 遊園地に」

「行きたい！ でも私は……………」

そっ言い淀んで自分の下半身を見る。

「なら明日またこの場所においで」

「え？」

「連れていつてあげるよ。遊園地に」

「……本当に？」

「ああ」

「本当の本当に？」

「ああ！」

「本当の本当の本当に？」

「ああ！！！」

人魚の女の子はぱっちり目を開いたかと思ったたらクシャッと歪めて泣き笑いのような顔になり、そして

「ありがとうっ！！！！！」

と言った。

そんな後ろではガイアはお手上げのポーズを取り、サカズキは腕を組んでため息をつき、ブルーはニヤニヤしていた。

「そう言えばまだ名前聞いてなかったな。俺はテラマキア。君は？」

「私は……」

しかしその声は次の瞬間に起こった波しぶきの轟音とそれと共に聞こえてきた大声にかき消された。

「シャアアアリイイイイイイ！！！」

危険を感じ取った俺は人魚の女の子を抱えたまま瞬時、その場から飛び退いた！

一瞬遅れて何かがその場を突っ切って行った。

「何だ！？」

「ニユゥ、？六刀流？蛸足奇剣！！！」

「！！！」

しまった、後ろか！！

「鉄塊！！！」

鋭い金属音。

どうやらガイアが受けてくれたようだ。

「下等種族が……！！よくもシャーリーを……！！！」

「兄さん！」

えっ？ 何だって！？

俺は人魚の女の子の目線を追う。

そこにいたのは……

「てめえら全員、サメの餌にしてくれる……!!」

アーンだった――

第三十説：シャボンディパーク（後書き）

補足しておきますが主人公のテラマキアは頂上戦争編しか原作知識がないので現在の漫画の魚人島編は一切知りません。
故にシャリーリーのことも全く知らないです。

第三十一説：VS魚人海賊団（前書き）

何か微妙にスランプだった。

第三十一説：VS 魚人海賊団

今日、鍛練が休みだったからシャボンディパークに遊びに行ったんだ。

それがどうして――

アーロンにものすごい形相で睨まれることになるんだ？

「下等種族が！！ 捻り潰してくれる！！」

「水中で息もできない人間ごときが俺たちの同胞、ましてやアーロンの妹をさらうとは上等かましてくれる……！！」

「にゅー、シャーリーちゃんをさらうなんて許せない！！」

「海の藻屑にしてやるっチュツ！！」

拳げ句、幹部であるハチ、クロオビ、チュウまでいるし。そしてオマケに、

「クズどもめ！！」

「人間は死ね！！」

何だこの魚人の多さは？

アーロンの奴、一味まるごと連れてきたな……！

「ちょっと、兄さん聞いて……」

「待ってるよシャーリー！！　今、そいつをギタギタにしてやるからな！」

ああ、こりや完全に勘違いされてるな。

しかも頭に血が昇ってるのか人の話を聞きやしない。

ていうかこの子のお兄さんってアーロンだったのか！？

アーロンに妹がいるなんて初めて知ったぞ……。

「おい、テラ。これはもう……」

「ああ、分かってるよガイア」

これはもう絶対止まらないな。

闘るしかないか……。

「シャーリーちゃん、だっけ？　君のお兄さんたちは止まりそうにないからすまないが、頭を冷やさせてくるよ」

俺に抱えられた人魚の女の子、シャーリーは俺の言葉を聞くと驚いた様に顔をあげる。

「駄目よ！！　兄さんたちはとっても強いよ！！　いくら強くて
も人間の君じゃ殺されちゃうー！！」

あれ？　そっちの心配？

あ、そりゃそうか。

こんな子どもが魚人に勝てるなんて誰も思わないわな。

「大丈夫だよ、鍛えてるから」

俺は彼女を地面に降ろす。

「ここから動いちゃダメだよ。サカズキ！」

「なんじゃい！」

「この子を死守しろよ。後、能力使って攻撃するな」

「うむ、分かった……って何で能力を使っではいかんのだ!？」

「いや、お前の能力普通にオーバーキルだからな。絶対に殺すなよ」

「ぐぬぬ……!」

「ぎゃはは、おっさんざまあみろ!」

「よし、あとでお前を使っつて憂さ晴らしするでしょう」

「うわっ! それは勘弁!」

俺はそんな会話を尻目に再びアールンたちの方を向く。

「ほう……、わざわざ人質を放すとはな。どうやら死ぬ覚悟ができたらしいな」

「死ぬ覚悟? んなもんお前らがしろよ」

「っ……!」

おいおい、何で煽ってんだよブルー！
めんどくさいじゃないか！

「……そんなにミンチになりてえようだな」

アーロンが片手をあげる。

「死んで詫びろ、下等種族が！！」

そしてその手を振り降ろすと同時に、

「……うおおおお！！！！」

大量の手下の魚人たちが一気にかかってきた。

俺は構えて迎え撃つ姿勢を取る。

しかし

「？五行の木？大木地雷」

「……ぎゃあああああゝ！！！！」

地面から次々と飛び出した大木にそのほとんどが弾き飛ばされた。

「手加減しろよブルー！！」

「あほか、クソガキ。俺はかかってくる奴には容赦はしないんだよ
！！！！」

「いや、だから手加減しろって言うてるだろうが！」

魚人の（気絶して倒れた）死体が量産される。
おいおい、今ので半分はやったんじゃないか？

「水鉄砲！」

「！！ おわつと！」

ブルーが突然飛んできた水弾に反応してかわす。

「お前、悪魔の実の能力者かつチュッ」

「へえ……。多少はできる奴がいるじゃねえか」

さっきの水弾はどうやらチュウの仕業らしい。

さすがに幹部だけはあるらしくブルーの技を受けずに無傷でこちらにたどり着いたらしい。

ブルーは目を爛々と輝かせながら嬉々として人獣型へと変わった。
バトルジャンキー
戦闘中毒者かあいつは。

「たこはちブラックオンザロック！！」

「！！」

よそ見をしていた隙にいつの間にかハチが近づいてきて、口に吸い付けた石を俺にぶつけようとしていた。

まずい、油断した……！

「指銃」

「ニユツ!？」

瞬間、横から伸びてきた手がハチの口についた岩を破壊する。

「油断しすぎだ、テラ」

「悪いガイア!」

「いくら力量差があるからって油断していたら足元をすくわれるぞ」
俺を助けてくれたガイアはハチと向かい合う。

「ニユ、もう少しいけたのに。まあいい、お前からこの六刀流の刀の錆びにしてやる」

「錆びになるのは御免だな」

ガイアが闘るのか……。

まあ、それなら心配はないだろう。

「ぬ、暇じゃのう。なぜガイアがよくてわしがダメなんじゃあ!」

「いや、お前の能力、洒落にならないからね!？」

サカズキは向かってくる魚人たちを殴り飛ばしながら愚痴をもらす。
そんな様子をポカンとした表情でシャーリーは見ていた。

「すごく……強いんだね……」

「ふん、こんなヒヨっ子どもにやられるほどわしも落ちぶれちゃいんわい」

瞬間、魚人たちの軍勢の中からいきなり一人の魚人が飛び出して一直線にシャーリーの元に向かう！

「サカズキ！」

「わかっておる！」

サカズキは素早くそれに反応して殴り飛ばす。

が、その魚人は寸でのところで防御していたらしく、さらに衝撃を和らげるために後ろに跳んでいた。

「ぬう、少しはマシな奴がいるみたいじゃのう」

「くっ……。貴様、本当に人間か……？」

その魚人、クロオビはサカズキから受けた拳の重さに驚愕していた。うん、クロオビ。同情するよ。

「さてと……」

みんなはそれぞれの奴と闘ってるみたいだし…。

俺はある方向を見る。

そこに待ち受けるはアローンの姿。

人間ごときに苦戦するとは夢にも思ってもいなかったのだろう。

あれは大分、頭にきている顔だな。

「死ね人間!!」

魚人たちが飛びかってくる。

「嵐脚?三日月?」

それを神速の回し蹴りで放った三日月状の斬撃で一気に蹴散らした。

「来いよ、アールン」

片手でクイクイと手招きして挑発する。

それが最後の引き金となったのかいよいよアールンが動き出した。

「調子に乗るなよ、下等種族が……!!」

アールンはその手に水気帯びさせる。

「種族の違いというものを教えてやろう!!」

そしてアールンはその手を振りかぶる。

「ふんっ!!」

そのはずみで散った水滴が驚異的な速度で俺に向かって飛んでくる!

「っ! 鉄塊!!」

本能で危機を感じ取った俺は反射的に鉄塊を発動させる。
飛んできた水滴は俺の皮膚の表面を削った。

どんな水だよ！

散弾銃か！

ていうか鉄塊してるのにも関わらず俺の皮膚の表面削っていくとか普通の銃弾よりやばいんじゃないか？

「死ね小僧……！！！」

とか何とか考えていたらいつの間にかアーロンに懷に入られていた。

「やべっ……！！！」

続けざまにそのまま鉄塊を発動する。

が、俺は甘かった。

「うらあっ！！！！」

アーロンが力の限りに俺をぶん殴る！！

魚人の力は単純に人間の十倍。

ガイアに比べて未熟な俺の鉄塊はいとも簡単に破られた。

「！！！！」

殴られた力に逆らわずそのままぶっ飛ばされる。

「シャーハッハッハ！！ 思い知ったか！ これが種族の違いだ！」

いてて、くそ！

なんちゅう馬鹿力だ……！！

鉄塊破るとか半端じゃないぞ！

「おいおい、何やってんだよクソガキ！　しっかりしろよな！」

少し遠くの方でブルーが叫んできた。

「うるさい……。ちょっと油断しただけだ！」

ブルーはため息をつく。

「じゃあさっさとしろよ！　こっちはもう終わって暇なんだからさ！」

「え？」

思わずそちらの方を見る。

その光景はまさに死屍累々だった。

いたるところに魚人たちが倒れていて立っている魚人は一人もいなかった。

無論、ハチ、クロオビ、チュウの三人もブルーたちにやられてのびている。

しかもうまい具合に致命傷を負っている奴が誰もいなかった。

「案外、あっけなかったのう……」

「ふあゝあ……、欠伸が出るぜ……」

「油断するなと言っただろう、テラ。明日の鍛練はいつものメニューの5倍だからな」

「それだけはやめてえー！ー！！」

立っている三人にはやはり疲れが見えない。

俺が言うのも何だけどやっぱりあいっすら化け物だ。

「ふええ……」

シャーリーも目を丸くしている。

「なんだと…！？」

その惨状を見てアーロンが絶句する。

そして再び俺の方を向いて、

「殺す！！」

と言った。

おー、怖っ！！

アーロンは自分の口に手を突っ込んで次の瞬間、歯を無理矢理引っこ抜いた。

痛くないのか、あれ。

しかしすぐさま新しい歯が生え出してあっという間に元通りになった。

右手には引っこ抜いた自分の歯。

その歯を手に嵌めてこちらに跳んでくる。

トウース
「歯ガム！！」

その歯はズブリと俺の肩に食い込

——まなかつた。

「なっ!?!」

「悪いな、あっちがもう終わってるんじゃない、あまり時間はかけられないんでね。少しだけ本気でいかせてもらおうよ」

俺の体に変形していく。

それに伴って俺に食いついていた歯がぼろぼろと崩れていく。

「?五行の金?左肩硬質化」

ダイヤモンドですら砕くほどの硬質化にたかだか魚人の歯ごときが叶う道理はない。

アーロンが後ろに飛び退く。

「悪魔の実の能力者か…!」

完全に人獣型になった俺を見てアーロンが呻くように言う。

「だが何であろうと貴様ら下等種族に負ける道理はない！！ お前を殺った後はあいつら全員を皆殺しにしてやろう！！」

負ける道理はないって現に負けてるし。

現実見るよ。

それにシャーリーを助ける目的が何か俺たちを殺すことにすりかわってるし。

色々ツツコミどころがあるな。

アーロンが低く姿勢を取り、驚異的な速度でしかも回転を加えながら突っ込んできた。

「鮫・ON・齒車^{トウース}！！！」

「？五行の金？両腕硬質化」

俺は落ち着いて硬質化した両腕を前に出す。

そして回転突撃してくるアーロンが俺に当たる瞬間、反射的にその鼻を掴んでやった。

「！！！？」

アーロンが驚愕に目を見開く。

本来なら素手なんかで掴めば手がズタズタになるのだが、生憎俺は能力で硬質化しているのでそんなことにはならない。

結果、アーロンの突撃は俺によって見事に止められていた。

「やっぱりお前カルシウムとった方がいいと思うぞ」

「アア！？」

俺は右手を拳にしてそれに鉄塊で固める。

無論、鉄塊以前に硬質化しているのでその強度は計り知れない。

そしてそれをアローンの鳩尾に向けて指銃の速度で振り抜いた！！

「シュゴン
獣巖」

「！！！！！！」

クリーンヒット。

アローンはその場に崩れ落ちた。

第三十一説：VS魚人海賊団（後書き）

久々にちゃんとした戦闘描写。
うまく書けたかな？

第三十二説：和解？（前書き）

うむむ、最近更新速度が遅い。

前は約一日ぐらいで更新してたのに……。

頑張らねば！

第三十二説：和解？

「うしっ！　これで終わりっ」と

ブルーが能力で出したツルでアーロン一味を縛り上げる。

「お前の能力って便利だな。ときどき羨ましく思える」

「おいおい、テラ。ブルーの能力の五行はお前の五行と相性悪いんだぞ？」

「マジで？」

「……自分の能力ぐらい把握しておかんかい」

そんな何気ない感じで雑談する俺たちをシャーリーは呆けたように見ていた。

「人間ってこんなに強いんだ……」

「あ、いや違うよ？　こいつらは人間でも化け物だからね？」

「「お前も十分化け物だ」」

失礼な奴等だ。

魚人たちをあつという間に制圧するような奴等に化け物呼ばわりされる筋合いはない。

「8歳で魚人倒してる子供の方が化け物だと思うが」

「何だと!？」

そつえばそうだ。

子供のくせに魚人倒していたら十分化け物じゃないか!

このくらい当たり前だと思っていたけど、いつもあいつら化け物相手に鍛練してるから一般人の強さの基準からずれてしまったか!?

「うつ……くそっ……」

ん?

魚人の誰かが目覚めたみたいだな。

「ちくしょう…、殺してやるぞ下等種族が……! 　ん? 何だこれは!？」

自分が縛られていることに気づいて戸惑っている。

うわ、アーンかよ。

ていうかさっきのしたのにもつ目覚めたのか。

さすが魚人。

タフだなあ。

「兄さん!」

シャーリーが目覚めたアーンに這いよる。

「シャーリー! 無事か!? どこも怪我はないか!？」

アーンはそこまで言ってシャーリーの後ろに控えている俺たちの

姿に気づいた。

「くそっ！ この縄をほどけシャーリー！！ 今すぐそこにいる下等種族どもをぶち殺してやる！！」

「ちょっと兄さん落ち着いて！」

うーん、すっげー剣幕。

でも鍛練の時のガイアやサカズキに比べたら全然だな。
あいつらは何かこう、威圧感がハンパないから怖がることすらできないんだよ。

「シャーリー！ 早く縄を……」

「兄さん、落ち着きなさい！！」

「アア……！！？」

「私の話を聞いて」

そう言っただけでシャーリーはアロンに俺たちに助けられた経緯を話し始めた。

いやー、激昂しているアロンが妹に怒鳴られて宥められるシーンとか結構レアじゃないのか？

「何か面白い構図じゃん」

「強面の魚人が小さな人魚の女の子に怒鳴られて宥められているシーンか……」

「……………!!」

何かサカズキが下を向いて肩を震わせている。
変なところでツボに入るんだな。

「おっさん、笑い方きめえ」

「死ね」

瞬間、ブルーは地面に伏していた。

肉の焦げる臭いが漂うが

、俺たちは全然騒がない。

もはや無視である。

「——というわけなの。あの人たちは私の恩人だから喧嘩とかし
ちゃだめだからね!」

「……………」

シャーリーが一通り話し終えたらしい。

アーロンはしばらく黙っていたがやがて口を開いた。

「ちつ……、何を話すかと思えばくだらねえ……。やつら人間がお
まえをさらったんなら同じ人間がその後始末として助けるのは当た
り前の話だ。あんな下等種族どもに恩なんか感じる必要はねえ……
!!!」

「兄さん……………!」

「それに見てる。今にこの人間どもは捕まえた俺たちを人間オークシヨンか海軍に引き渡すに決まってる！」

まあ、大方アーロンのことだからこうなることは予想はできたけどさ。

襲ってきたのにわざわざ手加減してやって致命傷がないようにしてやったのに下等種族とか罵倒されるのはムカつく。

うーん、ちょっとアーロンの鼻を明かしてやろうかな。結構、屁理屈かもしれないけど。

「おい、アーロン」

「アア！？ 何だてめえ！？」

敵意丸出しにして俺を睨むアーロン。

こいつ今、自分が捕まえられていることを分かってるのか？

「お前言ったよな？ 人間がさらったんなら同じ人間がその後始末として助けるのは当たり前だって」

「ああ、言っただぜ！！ てめえら下等種族がそうするのは当たり前だっただてな！」

「悪いけど俺はそれに当てはまらないぞ？」

「は？」

「ぬう？」

「なるほど……」

「ふえ？」

「何だと……？」

それぞれ色んな反応を見せる。

ガイアには分かったか。

ていうかブルーもう立ち直ったのか。

相変わらず脅威的な治癒力だな。

「だって俺、天竜人だからな」

一瞬の沈黙。

「ぷっ、ぎやははははははは！！！ そっかそっか！ お前は確かに人間じゃなくて天竜人だもんな、クソガキ！！」

そして一番最初に口を開いたのはブルーだった。

「……………！！！！！！」

サカズキも下を向くどころか後ろを向いて肩を震わせていた。

「ふむ、素晴らしい屁理屈だな」

何で冷静に評価をしてるんだ、ガイアは？

「……………天竜人って何？」

シャーリー知らないのかよ！？

「天竜人だと？ あの下等種族の中でさらに屑な奴等か……」

アーロンはやっぱりそういう認識か…。

「はっ、何を寝ぼけたこと抜かしてんだ下等種族が！ あの屑どもはいつも絶対に意味分からん服を着こんでんだよ！ てめえはそんな服着てねえじゃねえか！」

まあ、そうなるよな。

この場で一応証明できると言えばできるんだが、それは使いたくないなあ。

「おい、鮫野郎！」

「ンだところ！！」

ブルーが横からアーロンに声をかける。
「というか鮫野郎って。」

「このクソガキは信じられないだろうけどマジで天竜人だぜ？ その天竜人を殴ったらどうなるか知ってるよな？ おい、クソガキ！ お前あれ持ってたんだろ？ あれで大将でも呼んでやれよ。そうすれば嫌でも信じるって」

「あほか。気軽に言うけどそんな簡単に呼べるわけないだろ！」

ブルーが言っているあれ。

それはセンゴクからもらったセンゴクの電伝虫に直通できる小電伝虫のことだ。

あの天竜人襲撃事件が一段落した直後にサカズキを助けてくれたお礼としてもらった。

もらう時に何か困ったことがあればかけてくるといいと言われたが確かに今は困ってるけどさすがに呼ぶのは気が引ける。

「ニユッ……」

「う……く……」

「何だっチュッ……？」

ん？

ようやく他の魚人たちも目覚めたみたいだな。

「糞が！！ 仮にてめえがああ屑どもだったとしてもだ！ 俺たちを拘束してるってことは海軍に引き渡すか、オークションに売るかどちらかってことなんだろ！！」

あつ、おいアローンの馬鹿！！

そんなことをこのタイミングで言ったら……！！

「ニユッ！？ 俺たち売られちまうのか！？」

「何だと！？ むっ、いつの間にか縛られている！？」

「くそっ！ 人間め、これでも食らえっチュッ！！」

チュウが水鉄砲を放ってくる。

が、慌てず鉄塊で固めた拳で叩き落とす。

「くたばれ人間！」

「至高種族である我々に害を為す下種め！」

罵詈雑言を喚き散らす魚人たち。

「あーもう、うるせーなー！」

「これだから魚人と人は歩み寄れないのだろうな……」

「ぬう、小僧。こやつら黙らせていいか？」

確かにうるさい。

よくも次から次へとそんな罵詈雑言が出てくるな。

「みんな、やめてよー!!」

シャーリーの必死の叫びも彼らには届いていないし。
さて、どうしたもんかな。

まず、何故彼らが俺たちの話を聞かないのかだ。

これは俺たちが信用できないからだろっ。

この信用できないことの大部分が俺たちが人間だからだな。

まあ、俺は違うけど。

シャーリーを助けたのに警戒されっぱなしなのもこれだろう。

でもだからと言って俺たちが人間であるという事実は消せない。
なら他の方法で信用してもらっしかない。

人間でも信用してもらえるように。

そのためにはどうすればいいか？
簡単な話だ。

彼らを信じればいい。

彼らを信じて行動すれば必ず心を開いてくれる。
今までだってそうだったんだから。

何があっても彼らを信じよう。

人間関係の第一歩は信頼から始まるのだから。

私、ガイアは魚人たちの罵詈雑言を聞き流していた。

「あいつら、草木の肥やしにしていいいか？」

「いや、消し炭にするほうがいいはずじゃ」

他二人はずいぶん頭にきているようだが。

テラは人魚の女の子の隣でさつきから何かを考え込んでいる。

おそらく私の考えが正しければあいつはそろそろやらかす（……
）だろう。

その時、考え込んでいたテラが不意に顔をあげた。
そしてスタスタと魚人たちに歩みよっていく。

「何だガキ？ 貶されて頭にきたか？」

ニタアつと邪悪に顔を歪ませるアーロン。
しかしテラはそんなことを気にせず、アーロンを締め上げているツルを手にとって、

そしてそれを手刀で断ち切った。

その瞬間、私とテラを除いた全員が呆けた顔をした。
ふむ、サカズキもブルーもまだまだ考えが甘いな。
このぐらいのことは普通にやってのけるぞ。
あの馬鹿は。

その間もテラは次々と魚人たちをツルから解放していく。

そこでようやくアーロンが我に返った。

「てめえ……、これは何の真似だ……？」

「ん？ 見て分らないのか？ 解放してるんだよ、お前らを」

「だから何でそんなことをするのかって聞いてんだよ……！」

アーロンがイラついたのか怒鳴りながら立ち上がる。

「だってお前ら、俺たちが海軍に引き渡すとかオークションに売りつけるとか思ってるんだろ？ だからそうじゃないってことを信じてもらおうって」

「……てめえは馬鹿なのか？ 無防備に背中見せやがって。解放された俺たちが襲うって可能性を考えねえのか……！」

テラはそう言われながらもアーロンに背を向けながら魚人たちを解放し続ける。

いくらテラと言えども今、アーロンに後ろから襲われればただではすまないだろう。

「信じてるからさ。お前らをな」

「アア……？」

「お前らはそんな卑怯なことはいしない。ちゃんと面と向かって闘る奴らだつてな」

「……………！！！」

絶句する魚人たち。

「……いたい何を根拠に……」

「だって現に襲ってきてないだろ？」

「……………」

再び呆けた顔をする一同。

ははっ、懐かしいな。

私と初めて出会った時もありつは同じようなことを私に言っていたような気がする。

「……意味わかんねえぜ、てめえはよ。人間から忌み嫌われ、蔑まれ、恐れられている俺たち魚人をどうして……………」

「あほか、お前。魚人とか関係ない。俺はお前ら（・・・）を信じてるんだ。魚人だからとかいうくだらないことは寝言で言え」

「……お前は何なんだ？俺たちのことをそこまで信じられるお前はいい……」

「最初の方に言っただろ。俺は天竜人だよ」

そう言って最後のツルを断ち切った。

「……………」

沈黙が場を満たす。

「……………ちっ、てめえと話したせいで調子が狂っちまった」

沈黙を最初に破ったのはアールンで、未だに呆けている人魚の女の子に近づくとそのまま抱き上げた。

「引き上げるぞ、野郎共!!」

ほう、引き上げるか…。

テラとの会話で何か思うところがあつたらしいな。

「アールンさん!? 人間どもは!?!」

「ほつとけ。今はそんな気分じゃねえんだよ」

魚人たちは皆、微妙に納得がいかなさそうな顔をしながらアールンに続いて行った。

「ニユ、不思議なやつだなお前」

「ふん、俺は信用せんからな!」

「意味わかんねえっチュツ」

幹部らしき魚人たちもそれぞれ海へと入っていく。

「改めてクソガキの馬鹿さ加減を思い知ったぜ……」

「馬鹿だ馬鹿だとは思ってはいたがまさかここまで馬鹿だとはもう

……」

馬鹿馬鹿言い過ぎだ。

その時にようやく人魚の女の子が我に返った。

「あ、また明日！　ちゃんとシャボンディパークへ連れて行ってね！　約束だよ！」

「おう、分かってるよ！」

瞬間、魚人たちは硬直した。

「……シャーリー、どういうことだ？」

「え、明日あの人にシャボンディパークに連れて行ってもらうんだけど……どうかした？」

「どうかしたとかじゃないだろてめえは！！　またさらわれたいのか！？　駄目だ！　絶対に行かせねえからな！」

……まあ、当たり前だな。

シャボンディパークに人魚を連れていくなんてさらってくださいと言っているようなものだ。

「でもテラ君が強いし………」

テラ君って。

新鮮だな。

「テラ君！？ 誰だそいつは！？」

人魚の女の子がテラの方を見る。

アーロンもその目線を追ってテラを見た。

「アア！？ ダメだダメだ！ あんな貧弱野郎にお前が守れるわけないだろー！」

「でも兄さん、テラ君に負けたじゃない。兄さんよりテラ君の方が強いってことでしょ」

「うぐー！！」

痛いところをつかれたみたいだな。

「……と、とにかくダメなものはダメだー！」

「何よ、兄さんのケチ！」

「ダメなものダメだー！！ ダメったらダメだー！！！」

「……兄さんなんか」

人魚の女の子は下を向いて震えている。
あれは怒ってるのか？

「兄さんなんか大っ嫌い！！！」

「……！！」

アーロンがガンという感じの顔をする。
何かコミカルだ。

「シャ、シャーリー…?」

「ふんっ!」

「……………」

完全に機嫌を損ねてしまったようだ。

「ニユ、アーロンさん……」

タコの魚人がアーロンの肩に手を置いて頷いている。

「やめろ、ハチ! 余計惨めになるだろうが!」

そんなアーロンはハチと呼ばれたタコの魚人の手をはたき落とした。

「あー、わかったよ!! 行きやあいいだろ、行きやあ!」

「本当! ありがと兄さん!」

「だが俺もついていくからな!」

は?

「いいよいいよ! 兄さんも来た方がおもしろいもん!」

へ?

「ニュッ!? ア、アーロンさんが行くなら俺も!」

「俺もだ！」

「俺も行くっ
ちュッ！」

h?

「そんなことだつたら俺も行かせて下さい！」

「はい！俺も行きたいです！」

あれ？

「んじゃ、みんなで行こうよ！ いいよねテラ君！ じゃあまた明日！」

そして彼ら、魚人たちは海に潜っていった。

.....

私たちは顔を見合わせる。
そして言った。

「いいわけあるかああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

第三十二説：和解？（後書き）

今回は外伝として魚人たちのシャボンディパークかな？
その外伝の次回に長編を始めようかと。

第三十三説：魚人の夢見たシャボンディパーク（前書き）

すいません！

かなり難産だった上に、長編の構想を練り直していたら更新が遅くなってしまいました。
ごめんなさい！

第三十三説：魚人の夢見たシャボンディパーク

あのシャーリーの無茶な頼みから翌日。

昼から夕方に差し掛かるうとする時に俺、ガイア、ブルー、サカズキのフルメンバーは昨日、魚人の彼らが帰っていった海の近くで待っていた。

「遅いな……」

「ああ……、しかし本当に大丈夫なのか？ シャボンディパークにあんなことをして」

「大丈夫さ！ たぶん……」

「莫大な金がかかったんだろ？ クソガキ。これであのオヤジに頭が上がらないな？」

意地の悪い笑みを浮かべるブルー。

「うっ、痛いところをつくなよ……。確かにかなりの無茶だとは自覚してるけど……」

「かなりどころか超ド級の無茶だと思うがのう、わしは」

無茶とは言えども約束してしまったのは破るわけにはいかない。

それにあの子の楽しそうで期待に溢れた瞳を見たらやらざるおえないだろう？

はあ、子供ってのはいつの時代、どのような人種でも抗えないな。

「爺かお前は。お前もそのガキだろうが」

確かに……。

なぜか最近よく自分が子供であることを忘れがちだな。

ガイアたちと対等に話してるからか、自分が子供であるって思えないんだよ。

そういえば俺の前世って何歳まで生きたんだろう？

前世で得た知識は覚えているのになぜか自分のことやその周辺のこととは全く分らない。

まあ、今となつてはどうでもいいことだけど。

「なあ、クソガキ。前に天竜人を見た時から気になってたんだけどよ……」

「ん？ 何だよ」

「それ、暑くないのか？」

ブルーが指摘した俺の服装。そう。

俺は多くの天竜人が着ている服に身を包んでいた。

「……ああ、暑いぞ。かなり暑いぞ。めっちゃめっちゃ暑いぞ！ お前も味わってみるか……？」

「無理」

即答。

当たり前か。

普通はこんな服、誰も着たがるわけがない。

前にも言ったがこれを着る天竜人たちは尊敬に値する。

着てみたら分かる。

マジでやばいから。

まあ、いつもはこんな服なんか着たくない俺が何で着ているのか。それには海よりも深い理由が……

「あるわけないだろ馬鹿め。天竜人としてここにいるからだろう？」

黙っているから何を考えているのかと思えば阿呆なことを……、と呆れるガイア。

ひどい、ひどいよガイア。

人がこれから言おうとしているセリフを奪った拳げ句、馬鹿だの阿呆だのひどすぎる。

見聞色の覇気はやっぱりチートだよ！

……気をとりなおそう。

さっきガイアが言った通り、俺は天竜人として来ているため、その証明としてこの防護服を着ているのだ。

ぶっちゃけ一番これが手っ取り早くて見ただけで天竜人って分かるからだ。

彼ら魚人たちは大勢で来るのだ。

とても魚人であることを隠してシャボンディパークにたどりつけるわけがない。

絶対どこかでボロがでる。

だったら最初からバラして俺が天竜人として行ったほうがいい。

そのほうが人々が魚人たちを天竜人の何かだと思って手を出したり罵声を浴びせたりすることはないだろう。

代償として汗疹になるけど。

「お、来たみたいだぜ」

ブルーの声に俺たちは一斉に海を見る。

海の中に見える黒い影。

それを徐々に大きくなっていき、そして海面にそれらが出た。

海面に出てきたそれらはもちろん魚人たちだった。

中には人魚もいた。

あれ、人魚？

何でだ？

昨日、シャーリー以外に人魚いたっけ？

「……何か昨日とメンバー変わってないか？」

確かにブルーの言う通りである。

明らかに海賊じゃなくてカタギの人もいるし、さらに子供たちまでいる。

……行くやつ増えてるのか？

そして彼ら魚人たちはこちらを見て揃って硬直した。

「え？ 何だ？ いったいどうしたんだ？」

「小僧……、今の自分の格好を考えると……」

あ、そうか。

俺は今、天竜人の格好をしてるのか。

ああなるのも無理ないか。

魚人たちは分かりやすく怯えていた。

「おーい！ テラクーーん！」

が、その中の一人で友人らしき子たちに囲まれたシャーリーが手を振ってきた。

それを見て周りの魚人たちはぎょっとしている。

シャーリーの友人らしき子たちはシャーリーに何かを言つて諫めていた。

時折、馬鹿シャーリーなどの言葉が聞こえてくる。

しかし俺はそんなことはお構い無しに

「おう！」

と、こちらも手を振って返した。

[illegible]

案の定、魚人たちはめっちゃめっちゃ驚いた。

しかしこんなことは想定内なのでガイアたちは全く動じない。

ブルーなんかは暇なのか顔が劇画風にして、

「おっさんの真似」

「死ね」

とかサカズキとお馴染みのやりとりをしている。

今回は焦げるのではなくて上半身が地面に埋められて下半身だけが突き出ている状態である。

まあ、そんなことは無視してシャーリーを見ると、にこにこしながら

らこちらに向かって泳いできていた。

そして海面から飛びはねて俺のところに落ちてくる。

「おっと」

受け止めた。

シャーリーが顔をあげる。

「遅くなつてごめんなさい！ テラ君！ ちょっと色々あつて……」

「ああ、気にしないでいいよ。俺としても遅い方が都合よかったしね……。それより――」

そこで俺はこちらに注目している魚人たちを見た。

明らかに数が少ない。

昨日、見た魚人海賊団の人数より今いる魚人たちの数が少ないのだ。特にあのついていく言ったアーロンがいないのだ。

それにさっきも言ったようにカタギらしき人たちまでいる。どういうことだ？

「あつ、テラ君。行くのは少し待ってね。兄さんがほかのみんなを連れてきてる途中だから」

「ほかのみんな？」

「うん。昨日、シャボンディパークに行くことを魚人街のみんなに言ったら一緒に行きたいって人が意外に多くてね。兄さんたち魚人海賊団が行くから自分達も行くーだって」

「へえ……」

俺は再び魚人たちの方を見る。

未だにこちらに疑いの眼差しを向けている。

半信半疑なんだろうな。

ていうか天竜人がわざわざ世間から蔑まれている自分達をシャボンディパークに連れていってくれるなんて裏があると思えないよな。

あれ？

じゃあ何で彼らは来たんだ？

自分で言うのもなんだけど怪しさプンプンなのに。

「最初はね、みんな反対して行かせてくれなかったの。行かせてくれるって言った兄さんまでそれに乗じて反対してきたの。ひどいと思わない？」

「あ、ああ……」

プンプンという擬音が似合う怒り方をするシャーリー。
何か和む。

「だからね、予言したの。私の運命を。行っても大丈夫なことを証明するために」

「予言……？」

何だ？

なにやらいきなりきな臭い言葉が飛び出してきたぞ？

「予言ってあの未来予知とかのあれのことか？」

「そう、その予言」

シャーリーはえっへんっとまだぺったんこな胸を張る。

「私の予言は結構当たるんだよ？ 前にも海賊たちがいっぱいになるって予言したら大海賊時代が始まったし。あんまり当たってほしくなかったんだけどね」

「へえ、つまり信頼される予言でみんなを説得したわけだ」

うーん、それでも何で他の人たちがついてくるのかイマイチ分からない。

魚人海賊団が行くからついてくるというのも理由としては弱い気がする。

「うん、それで予言したんだけどその時に私と一緒にみんながシャボンディパークで遊んでいるのが視えたんだ。そのことをみんなに伝えたらいつの間にかみんなついてくることになって…」

「なるほど、だからか…」

にしてもそれで行くことを決めるなんて……………。
まだ引つ掛かることがあるが……。

それでもよほど信頼されてるんだな、その予言は。
いや、予言というよりシャーリーが、か。

「すごいな、シャーリーは」

「えへへ」

頭をかきながら照れ笑いをするシャーリー。

「おい、シャーリー。大丈夫なのか……？」

いつの間にか魚人の一人が近づいていて恐る恐る声をかけてきた。

「……その天竜人がお前の言ってた奴なのか？」

「うん！ だから言ったでしょ。テラ君はいい人だって。あ、そう
だ」

何を思いついたのかシャーリーはこちらを向いた。

「ねえ、テラ君って天竜人なんだよね？」

「ああ、そうだけど。昨日、言わなかったっけ？」

「ううん、昨日みんなにも言ったんだけど誰も信じなくて……。天
竜人は悪い人だけだーって。ほら見てよ！ テラ君は天竜人でいい
人じゃない！ 私は嘘つきじゃないでしょ！」

俺に確認をとったシャーリーは再び魚人の方を向いて言い放った。

「うっ、ごめん……。謝るから許してくれよ……。だって天竜人でそ
んな奴がいるなんて夢にも思わなかったからさ……」

まあ、そりゃ本当に夢にも思わないだろうな。

「というか未だに信じられない……。本当に天竜人なんだよな……」

「おうつ、天竜人だぞ」

「……………」

魚人は仲間の方を向いてこんな天竜人があつていいのか？ と目で訴えている。

別にいいじゃないか。

こんな天竜人がいたって。

その時、海面に新たな魚人の集団が現れた。

これがシャーリーの言っていた後から来るみんななのだろう。
アーロンの姿も見えた。

「おい、シャーリー！ 連れてきたぞ……って天竜人！？」

アーロンがシャーリーを抱いている俺を見て、驚く。

「兄さん、さっきに言っておくけどこの天竜人はテラ君だからね！」

「何だと…………？」

そう言つてアーロンは海から飛び出して俺に近づき、顔をまじまじと見つめた。

「マジで天竜人だったのか…………」

「昨日、言っただろう？。」

「口頭で言われて誰が信じるかよ」

そりゃそうだ。

「ニユゥ、連れてきたぞ。アーロンさん」

「道中、特になにもありませんでした」

「これで全員つチュッ」

アーロンの背後の海からハチ、クロオビ、チュウが飛び出してきた。海にはさつきよりも魚人の集団が増えていた。

おいおい……、ざっと200人くらいいるんじゃないのか？
人魚も何人かいるみたいだし……。

アーロンの奴、何考えてんだ？

「さて、これで全員だ」

アーロンを見ると憎たらしい笑みを浮かべていた。

「たとえ天竜人だろうとシャーリーの予言だろうとも関係ねえ。これだけの人数、連れていけるか!？」

!!

まさか、こいつ……。

「人間どもがうじゃうじゃいる遊園地へ!!」

やっぱりそういうことが……。

連れていけるわけがないと思ってわざとこんな人数を連れてきたな……？

何でこんな大人数が来たのか。
ようやく腑に落ちた。

恐らく大体の奴等がアーロンに言われて来たのだろう。
シャーリーを助けるために来てくれと。
そこまでして行かせたのか……。

だが甘いな。

「いけるわけ……」

「いけるよ」

「何だと……？」

「ちょうど日も暮れてきたし、頃合いだな」

辺りには夕陽の光が差していた。

俺は懷から笛を取り出した。

そして俺はその笛を思いつきり吹いた。

辺りに笛の音が響き渡る——……

「……イイイイヤアアッホオオオウウウ……！！！！」

奇声が聞こえたかと思うとどこからともなくモーター付きのボンチ
ヤリに乗った集団がこちらに向かって突撃してきた。

「久しぶりの出番だぜ！！　？ブラックオーガ？ボス、ギドー参上

「……!!」

「人さらい屋か!!」

「え?」

「シャーク 鮫・ON・DARTS!!」

「ちよっ、違っ…、ぎゃあああああああああ!!!!」

「まあ、そんなわけで俺の情報屋、もと便利屋のギドー一味だ」

「うつつ……、久しぶりの出番ではりきってきたのにこの仕打ちって……」

「ボス~~~~!!」

アーロンに襲われたギドーは誤ってボンチャリから落ちてしまい、体が擦り傷だらけだった。

結構な高さから落ちたと思うんだけど、擦り傷だけで済むところを見るとある程度は鍛えてるのかもしれない。

「へえ、これがクソガキの言ってた奴等か」

「なるほど、彼らを使うのか……」

「これがお前の言っていた人員補充かのう、小僧」

そう。

ギドーたちを呼んだのは人員補充なのだ。

さすがに俺が天竜人だと言えども心配がある。

それは人さらい屋の存在だ。

これだけ魚人や人魚がいればば間違いない人さらい屋が出てくるだろう。

そのため、監視としてガイアたちを連れてきたのだがこの人数ではいくらなんでも全員を監視することは無理だ。

ましてやシャボンディパークで散らばって遊ぶところを監視するなんて無理を通り越して不可能だ。

そこで考えたのがギドーたち？ブラックオーガ？の起用だ。

彼らは人数がそれなりに多い上に元人さらい屋だ。

蛇の道は蛇ということで俺の知り合いでこれ以上適格な奴はいないだろう。

「しかし、テラの旦那も物好きだな、わざわざ魚人のためにここまでするとは」

「ちっ……」

ギドーの魚人に対する蔑みを含めた発言にアーロンが舌打ちする。

「ギドー、固定観念はやめろ。彼らを魚人として見るんじゃなくて一人の存在として見る」

「……よく分からないが、テラの旦那が言うなら気をつけますよ」
ギドーの魚人に対する偏見はまだマシと言えるが、やっぱりこういうのを見てしまうと世間と魚人たちの間の隔たりを改めて実感させられる。

……悲しいことだ。

「気に入らねえな……。おい、ガキ！俺たちが遊園地へ行けるってどういうことだ？」

「ん？ ああ、それは――」

日も暮れて、西の空に夕日が沈みつつある中で魚人を含めた俺たちはシャボンディパークの正面入り口にたどり着いた。

道中、膝についている人たちの視線がものすごく突き刺さったが、夕方なので人通りも少なく、俺という天竜人がいるからなのか大した騒動もなくここまで来れた。

魚人たちは新鮮な光景にかなり驚いていた。

そして彼らは今、俺の言ったことに対してそれ以上に驚愕していた。

「秘密だとか抜かしやがるから来てみたが……何だよそれ……、無茶苦茶じゃねえか……!!」

「にゅっ!？」

「ありえない……」

「これが天竜人なのかっチュツ……」

「すごーい……!!」

「な、だから言っただろ。いけるって。人間がいるとか関係ない。だって貸し切りなんだから(……)」

そう。

簡単な話、完全に貸し切りにしたのだ。

それもシャボンディパーク丸ごと全てを。

天竜人という権力の強さを改めて思い知ったさ。

でもまあ、さすがに真っ昼間から貸し切りにするわけにもいかなくて夕方、つまり閉園時間後に遊べるようにしてもらったのだ。

あまりの物事の大きさにただただ驚愕し続ける魚人たち。

「わしたちも最初に聞いた時はこうなったのう」

「あの時のおっさんの顔と言ったら……」

「アア!? なんじゃい!？」

「何でもありません……」

……こいつら、いちいちコントしないと気が済まないのか？

「おい、テラ。早く彼らを元に戻してやれ」

魚人たちは驚きを通り越して放心していた。

「ああ、そうだな。おーい、目覚めろー！」

はっと我に返る魚人たち。

「貸し切りってことはつまり……」

「思う存分遊べるってことだよな……？」

「あの観覧車にも乗れるのよね……？」

「コースターも、ティーカップも、他にも……」

ようやく事態が飲み込めてきて期待が膨らんできたらしい。

「どうもテラマキア聖、ようこそお越しくださいました」

遊園地の支配人がペコペコしながら俺の前に現れた。

「シャボンディパークをご利用いただき、誠にありがとうございます……」

俺は急いで月歩で空中に逃れた。魚人たちはそのまま園内へと入り、散り散りに乗り物に向かっていった。

「あつという間だな、おい」

「大人も子供も関係なしに興奮しているな。それほど夢見たということだろう」

「海賊の奴等まで夢中じゃのう」

ガイアたちは魚人たちのあまりの興奮の大きさに放心していた。

「んじゃ、ガイア、ブルー、サカズキ。それぞれ小電伝虫渡しておくぞ。何かあつたらギドーたちから連絡が来るはずだからな。じゃあ頼むぞ」

「ああ、了解」

「よっしゃあつー！、コースターに行くぜ俺は！」

「遊ぶな貴様！」

ガイアたちも園内へと入っていった。

そして入り口前は俺一人になる。

「さてと……、ん？」

いや、どうやら違ったようだ。

俺の他に一つだけ、俺と同じくらい背丈の人影があった。
魚人の少年らしい。

「おい！ 君は入らないのかい！」

「……………」

聞こえてないのか何の反応も示さない。

「おい！」

近づいて肩に手を置いて声をかける。

「触るな！！」

すると勢いよく振りほどかれた。
顔を見る。

こちらをものすごい形相で睨んでいた。
あまりの迫力に一瞬たじろいだほどだ。

「俺は認めねえからな……………」

少年はそう言つて園内に入つていった。

……………あの子の目。

あの目はアーロンが最初、俺に向けた目と同じだった。
憎しみのこもった目。

他には何もなかった。

ただそれだけ。

ありえない。

どうやったら。

何があつたらあんな目をする事ができるんだ……？

俺は思わず身震いをした。

「いったい何だつて言うんだよ……」

俺の問いに答える声はなかった。

この後、俺はこのもやもやとした思いを抱えながらシャーリーたちと遊んだ。

しかしやはりあの少年のことが引つ掛かっていて上の空だった。さらにその後もそれに頭を悩まされるのだが、その時に起こったあの事件で忘れてしまう。

あの事件――

俺が初めて心の底から本気で人を殺したいと思った、あの事件で――

第三十三説：魚人の夢見たシャボンディパーク（後書き）

もう一話だけ外伝を挟んでから長編に入るつもりです。

そういえばみなさん、今回はシャーリーたちのシャボンディパークで遊ぶシーンが書かれていませんでしたが、書いた方がいいのでしょうか？

もし書くなら外伝として書くつもりなので感想の方に意見をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4788w/>

《天竜》の伝説

2011年11月29日12時22分発行